

YEAR BOOK

2019 Vol.44



第1回公開講演会





Kyoto International Student House

(公財)京都国際学生の家

Kyoto International Student House • Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

"Haus der Begegnung" is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a "House of Encounter" as its name "Haus der Begegnung" indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

- 1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man
- 2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.
- 3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.
- 4. Life Together is an adventure and an experiment. "Haus der Begegnung" in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther

表紙デザイン: 辻川 知歩

【巻頭言】

同窓会 (OM会) の活動開始

村田 翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

今年の6月8日(土)に「京都国際学生の家」の第1回同窓会(OM会)総会および公開講演会が開催された。組織としての同窓会(OM会)は、2000年にすでに設立されていたが、活動はほとんど展開されて来なかった。今回のような活動は初めてのことであった。活動開始の意図としては、OMのコミュニケーションと親睦を図ることと同時に、ハウスへの寄附を促進する契機にしたいという願いも込められていた。公開講演会の趣旨やプログラムについては、内海博司先生(理事長)の記事に明らかにされている。

その公開講演会は、当日の午後 13 時から 16 時にかけて行われた。プログラムにあるように、第 I 部では、「HdB から育った科学者」のテーマで、戸口田淳也先生(京都大学ウイルス・再生医科学研究所/iPS 細胞研究所教授)とジーン・タナンゴナン先生(近畿大学農学部講師)に講演してもらった。戸口田先生は「HdB から iPS 細胞との出会いまで」、ジーン先生は「サンゴ礁の生物多様性と HdB のダイバーシテイ」のタイトルであった。iPS 細胞は、今日世界中で注目されている事柄であり、聴衆は関心をもって傾聴した。生物の多様性と HdB のダイバーシティの関係は大変興味深く、皆さん考えさせられた。続いて第 II 部では、「HdB の過去、現在、未来」のテーマで、在寮生(外国人留学生 3 人、日本人学生 1 人)による寮生活の感想・抱負などに関するスピーチ、および内海博司先生(京都大学名誉教授)の講演があった。内海先生は、「HdB に係わって半世紀」と題し HdB の主な歴史的展開について話された。講演・スピーチの内容はこの"Year Book"に掲載されているので参照されたい。

午後4時半から第1回総会が始まった。はじめに同窓会活動の趣旨ついて理事長の内海先生より説明があり、その後、司会者として山田祐仁氏が選ばれた。議案では、会則の提案、役員の選出、活動内容が取り上げられた。会則案が理事長より提示されたが、組織、会費等について意見が出て再検討することとなった。活動内容では、会員名簿の整理、事業、寄附活動、Year Book への原稿提出、ハウス行事への参加などが討議され基本的に了承された。なお、会則については、10月18日に行われた役員会において再検討され、原案を修正のうえ決定した。同会則を添付資料として提示する(P100参照)。役員には、会長(村田翼夫)、副会長(岩田、ジーン・タナンゴナン)、監事(平松幸三、嘉田良平)、庶務幹事(古川千佳、木葉丈司)、会計幹事(崔英樹)、幹事(柳そらや)が選ばれた。また、会員との連絡を密にするコーディネーターも20人以内で依頼することになった。

18 時から 19 時半にかけて HdB の 1 階ホールにおいて親善パーティが実施された。

多数の OM たちが旧交を温めるとともに在寮生も加わって親睦を図った。参加者は、70 人程であった。寮生による演奏のパフォーマンスもあり盛り上がっていた。

このような同窓会の活動を行うことの意義について考察しておきたい。次のような ことが挙げられよう。

第1には、前述のように、OM が久しぶりに再会し旧交を温めて親睦を深めることである。第2には、ハウスの改築や新築に対する寄付を募るよい機会になることである。実際に、第1回同窓会の後、寄付金は増えている。さらに、第3に、ハウスのプログラムや行事(コモンミール、国際食事祭、旅行、感謝祭、クリスマスパーティなど)に参加してもらったり、新しい活動(例えば寮生に対する懇話会)を提案してもらったりする契機となることであろう。とりわけ、外国からOM が参加してもらえれば、外国における仕事や社会経済の状況に関する情報を得たり、ハウスにおける生活の効用について幅広く話を聞けたりする好機となる。第4として、特に今回実施した公開講演会はハウスに認められた公益財団法人の目的を果たす絶好の機会であること

が挙げられよう。同窓会メンバーのみを対象とする講演会では 公益性が乏しいが、公開とすれば、一般の方々、地域の住民も 参加し得るわけで公益性は高ま る。第1回の公開講演会にも同 窓会メンバー以外の方々も約 10人出席されていた。今後その 数を増やしていきたいものであ る。

現在のところ、同窓会総会および公開講演会は、年に1回開催する計画となっている。多数の参加者を得て同窓会が盛り上がり、ハウスの維持発展に貢献することを期待している。

来年度における第2回同窓会の総会および公開講演会は、2020年6月13日(土)の午後に同じ楽友会館にて開催する計画である。また、親善パーティも夕方にハウスの1階ホールで行う予定である。多数の方々の参加を希望している。



戸口田先生の講演風景



親善パーティの様子

~ 目次─CONTENTS ~

【巻頭言】		
•村田 翼夫	同窓会(OM 会)の活動開始 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1
【目次】		3
【募金活動について】		
・内海 博司/平野 克己	本館耐震工事先行着手と今後の展望	5
【特集:第1回公開講演会】		
・内海 博司	京都国際学生の家 第1回公開講演会について	8
・京都国際学生の家 第1回公	開講演会チラシ	9
<hdb から育った科学者=""></hdb>		
• 戸口田 淳也	HdB から iPS 細胞との出会いまで	10
・ジン・タナンゴナン	サンゴ礁の生物多様性と HdB のダイバーシティ	18
<hdb の過去・現在・未来=""></hdb>		
• 武田 桃子	HdB への感謝	23
Manohar Rutvika Nandan	Rutvika's speech for the OM Meeting ·····	25
• Welsh Richard Louis	Richard's speech for the OM Meeting ·····	26
• Lee Kyungmin	すごい HdB が大好きです	28
・内海 博司	HdB に関わって半世紀 ····································	30
【HdB 設立の精神】		
・ヴェールナー・コーラー	共同の生について(京都「国際学生の家」献堂式講演)	36
・設立経過概要		43
【OM 便り】		
・村田 翼夫	モンゴル見聞録-日本式教育モデルの導入	45
【レジデントより】		
Shin Mingyeong	HdB での 1 年半 ······	49
• 柊木 知	いい意味で普通の寮	50
Tang Menjia	My last year in HdB·····	52
・中山 貴美子	HdB という場所 ······	53
Narumi Hayakawa	First year in HdB · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	54
・遠藤 聡志	HdB での一年 ·····	55

・重入	、義和	HdB での生活 56
• Li X	inxian	Reflection on living at HdB · · · · 57
【活動]報告】	
• 崔	英樹	ハウスペアレントの1年を振り返って 58
• 2019)年度寮生活動行事表	
• 2019) 年度寮生行事活動の報告	67
• 2019) 年度寮生当番活動の報告	82
【資料	}]	
· (公)	財)京都国際学生の家役員等	§······ 86
• 2019) 年度補助金・寄付金・そ	の他ご支援 88
・特定	芸術金の募集に関わる募金	· 食目論見書······ 90
· (公)	財)京都国際学生の家の略ら	년······ 91
· (公)	財)京都国際学生の家利用	省の集計
· (公)	財)京都国際学生の家後援会	吴会則
· (公)	財)京都国際学生の家同窓会	会会則100
施設	·概要······	103
【編集	後記】	
古川	千佳 .	104

【募金活動について】

本館耐震工事先行着手と今後の展望

内海 博司 (HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM) 平野 克己 (募金委員会事務局長、HdB 評議員)

1. 募金活動の経緯

2017年5月に募金委員会が発足し、長尾真氏(京都大学名誉教授、元京都大学総長、元国立国会図書館長)と立石義雄氏(京都商工会議所会頭、オムロン名誉会長)に顧問になって頂いた。その後京都府・京都市への訪問、京都商工会議所、京都仏教会、ライオンズクラブなどを訪問、クラウドファンディングの開設、またマスコミへの働きかけ等考えられるあらゆる募金活動に着手した。

目標金額は、本館 1.5 億円、研究者棟 1 億円の計 2.5 億円でスタートしたが、2019年 1 月時点で約 2,200 万円という結果に留まり、計画を本館の耐震、老朽化の対策のみに絞って 8,000 万円の工事額としての募金活動に変更し、2019年 2 月から新募金案(第 1 期工事)として再活動に入った(これらの経過は公開講演報告(本誌の P8)に詳しく書かれている)。また、募金額だけで不足する場合も想定し、京都信用金庫に借入金の打診をし、借り入れの条件を確認した。工事着工予定の 2020年 4 月には学生達も含めて全員退去して(HdB を閉鎖して)8 月には工事完了の予定であると報道関係にも告知して進めてきた。

10月に入り8,000万円の工事予定金額を3社に見積もりを取ると、信じられないような3.5倍から5倍ほどの工事見積額が出て来た。1社は2.985億円、1社は4.25億円、もう1社は見積もりを辞退してきた。その高騰の原因はこれまでの調査で建物の天井や床材質にアスベストが出て来たこともあるが、オリンピック、台風被害などの影響で人件費、建築資材の高騰が原因のようであった。もし1年工事を延期しても工事費が下がるかどうかは不明であるとの状況判断から、学生達には4月から退寮する必要はなく、少なくとも1年は工事を延期することを伝えると共に、速やかに臨時理事会を開催することを要請した。

そして学生達が住んでいても可能な耐震工事だけを先行する案等を含めた数案作製し、臨時理事会に(12月22日)に提案した。その結果、耐震補強工事と老朽化したガス管の更新のみを先行して実施することが決定された。この工事は寮生が在寮のままで実施可能で、工事期間は3ヶ月であるとのことであった。この工事によって耐震基準をクリヤした本館となり、少なくとも地震に対しの安全性は確保されることになる。これ以外の老朽化対策などは引き続き募金活動と平行して鋭意進める予定である。

2. ここまでの募金活動の結果

2019年度2月末時点での寄付金受付から2019年12月までの寄付金は以下の通りである。(OMとは元寮生である)

① 個人寄附 (OM) : 1,802,000 円 ② 個人寄附: 1,478,674 円 ③ 企業・団体: 1,956,000 円 合計: 5,236,674 円

これまでの2017年5月から2019年12月末までの募金総額は下記の通りである。

① 個人寄附 (OM): 16,605,338 円 (遺贈を含む)

② 個人寄附: 6,265,674 円③ 企業・団体: 4,606,000 円合計: 27,477,012 円

3. 今後の展開

3.1 老朽化建物の改修

1966 年に建築され 55 年を経過し、建物自体、電気、給排水などのインフラ設備の老朽化は著しく、居住性、安全性など一刻も早い改善が望まれる状態である。今回はその内のガス管のみであり、今後、優先順位を定めて改造計画を立案して着工するが、具体的には、①トイレの更新②窓のすきま風対策③電気設備更新④給排水配管更新⑤部屋の更新、更には⑥収入を増やす3階の改修(HP室の変更とスカラー室の増加)などが想定されているが寮生の意見などを参考に、広範囲な検討をして決めて行きたい。全体的には半世紀前と現在では居住空間の基準も変化しており、世間並みの設備にするだけでも大幅な改造費用となり、その実施に対する資金計画も必要となり募金活動の継続は避けられない。

2017 年以降にお願いした方々、また新たにお願いする方々への HdB の設立趣旨、 半世紀に渡ってはたしてきた役割、社会貢献などを P R することは重要で有り、募金 活動は今後も継続すべきであろう。公益財団法人としての運営の基本を、これまで通 り皆様の善意を中心とした募金に置く HdB の趣旨を内外に幅広く訴えていきたい。

3.2 募金活動と将来について

これまで 1.5 億円から縮小した 8 千万円の第 1 期工事である本館の耐震・老朽化対策が完了すれば、少なくとも学生室の家賃の値上げ、3 階の部屋の改造によるスカラー室の増加と部屋代の値上げで、借入金をしても HdB を維持できるとしてきた。更に第 2 期工事であるスカラー室の建て替え工事が完成すれば、安定した HdB の将来計画が立つとしてきた。しかし、第 1 期工事でさえ完遂出来ない状況に陥っている現況では、1 年待っても工事費が下がらない場合には、値上げも部屋の増加による増収の見込みもつかず、赤字に転落する恐れがあり HdB をこれ以上続けて行くことは困難であ

ろう。そこで HdB を閉じざるえない状況に陥った場合にどう対処するべきか、この設立趣旨をどう繋いでいくのか、必要な手続き等についても検討を始めなければならないと考えている。

本年 4 月からの工事に備えて、昨年末から半世紀近く整理されていなかった地下倉庫の整理を行ってきた。そして今回の改修工事でも必要な本館設計図を探していたが発見できなかった図面が出て来た。更に 1965 年 4 月 10 日に行われた献堂式での創設者である神学博士ヴェールナー・コーラー先生の「共同の生について」という講演記録の翻訳(本誌の P36)も見つかった。そこには、始めて知る HdB 建設に対する博士の厚い思いが語られていた。約半世紀経ってもその言葉は新鮮であり、奇しくもこの灯火を消すなと訴えかけているように思われる。

【特集:第1回公開講演会】

京都国際学生の家第1回公開講演会について

内海 博司 (HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM)

理事長に就任した 2007 年頃は、1965 年に開設された留学生寮(財)京都「国際学生の家」の本館のインフラ(水道、電気、ガスなど)の老朽化が目立ち始めた頃で、西日本大震災で壁にひび割れが入った西館の立替も考えねばなりませんでした。そこでまず西館の立替の積み立て貯金を始めました。2013 年に公益法人化問題が起き、財団法人から公益財団法人に無事移行したとホッとしていた頃、京都府から建物の耐震状況を報告するようにという通達を受けました。そこで本館を建設した清水建設に第一次耐震審査を依頼すると、本館自体も最新の耐震基準には合っていないという報告を受けました。そこで寄附金税額控除の資格を 2015 年に取得し、2016 年には第2次耐震審査を行うと耐震工事をする必要があることが判明し、耐震問題についての検討委員会を発足させました。

2017年3月には本館耐震・リフォームと西館立替案を作製し、2017年9月に長尾真氏(京都大学名誉教授、元京都大学総長、元国立国会図書館長)と立石義雄氏(京都商工会議所会頭、オムロン名誉会長)を募金委員会の顧問とした募金委員会を発足させました。同年10月1日には募金趣意書を作成し、本館工事(1.5億円)・別館立替工事(1億円)総額2.5億円の募金活動を開始しました。しかし、募金活動を2年続けても2千万円ほどしか集まらず、募金目標を検討し直し、本館工事を第一期工事として工事自体も縮小(8千万円)したかたちで募金活動を続けてきました。

この募金活動を通じて痛感しましたことは、京都で最初の留学生寮であり、日本で最初の混住型の留学生にも係わらず、当学寮の知名度は非常に低いことと、開設以来千名を超える卒寮生がいるにも係わらず連絡が取れる卒寮生数は 1/4 程であることでした。そこで卒寮生の会(OM会: Old Member)を発足させることと、多くの京都市民に(公財)京都国際学生の家の存在を知って頂く必要性があると判断して、卒寮生及び在寮生達による第1回公開講演会を 2019年6月8日(土)に(公財)京都国際学生の家近くの京大楽友会館で行いました。

これは参加出来なかった人達にも、読んで頂きたいと思って組んだ公開講演会の特集であります。如何に卒寮生が学び・育ったか、現寮生が学んで居るかが良く分かるかと思います。その時のチラシと当時の京都新聞の切り抜きを一緒に掲載いたします。



京都国際学生の家 Haus der Begegnung (HdB)

第1回公開講演会 入場無料

a 時: 2019年6月8日 (土) 12:50~16:10

場 所:京都大学楽友会館 〒606-8501 京都市左京区吉田二本社町

R的は昭和40年より54年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。 その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒業生の講演と共に紹介させて頂きます。

開会の辞 内海 博司 (理事長、京都大学名誉教授)

13:00~14:00 HdBからiPS細胞との出会いまで

第I部 HdBから育った科学者

戸口田 漳也 (京都大学外以:再生医科学研究所/iPS細胞研究所教授)

14:00~14:40 サンゴ礁の生物多様性とHdBのダイパーシテイ ジーン・タナンゴナン (近畿大学島学歌講師)

第Ⅱ部 HdBの過去、現在、未来

14:50~15:30 外国人学生及び日本人学生から 在寮生有志

15:30~16:00 HdBに係わって半世紀 内海 博司 (理事長、京都大学名誉教授)

閉会の辞 村田 翼夫 (理事、禁波大学名誉教授)

参 加: 未聴軟造、無料でどなたでも参加できます。

主 催:公益財団法人 京都国際学生の家 連絡会:京都市立京区登録放業町10 電話/FAX:075-771-3648 ホームページ: http://hdkipoto.jp/en/home/

毎日新聞 2019.5.24 掲載記事

卒寮生が寄付募る講 の客での出会いと目らの研究につい ゴ糖の生態研究者のジン・タナン 一と、ほぼ回回用に見て受い 大変していた戸口田が也・京大ウ 京都国際学生の家改修工事、資金難 第1000人以上在 くスイスのキリス 国際学生の変は際 来月8 日·左京 事が必要だが、資金額で 事が必要だが、資金額で ような場所かを知っても 提回選事長の との配着か らうための社会への発信 茶明だ。 学生も多いため、卒業生に独国へ留学したらする 八者・戸口田教授らの書 前い合わせは京都国際 年生の家の確定と、 年後一時から京大學友 牛の家(ひてちう 入寮生は数年で替わ で、一日公園園の 3 初めて公開調油会を 、 学の家などの 強人となった。 現在の数生ら で 本松

<HdBから育った科学者>

HdB から iPS 細胞との出会いまで

戸口田 淳也 (京都大学 iPS 細胞研究所 副所長、元 HF)

HdB との出会い

私は昭和 56年に京都大学医学部を卒業しました。当時は、現在の 2年間の研修医制度とは異なり、多くの卒業生が医師国家試験に合格する前に、自分の行き先を決めて、各医局の面接を受けるというルールでした。私は父が整形外科医であること、高校、大学とラグビー部に所属してスポーツ医学に興味があったことなどから、学生時代から漠然と自分は整形外科医になるのかなと思っており、実際に整形外科に入局しました。最初は先輩研修医からの患者さんを引き継いで、暫くしてから新規の患者さんの担当となります。私が最初に新患として受け持った患者さんが、骨肉腫という骨の悪性腫瘍の中学生の患者さんでした。そしてその患者さんの主治医が、当時ハウスペアレントをなさっていた琴浦良彦先生であり、それが私と HdB との最初の接点です。翌年私が大学病院での研修を終了するまで、その患者さんの入院治療は続き、必然的に琴浦先生と過ごす時間が長くなりました。そしてその間に何度か HdB を訪れる機会がありましたが、自分がそこで住むことになるとは全く考えておりませんでした。

寮生としての HdB

昭和57年6月から3年間の浜松の病院での研修医生活を終えた後、大学院生として帰学することになりました。試験合格の通知を受けて暫くして、琴浦先生から HdB に入寮してはどうかとお誘いを受けました。当時は独身で身軽でしたし、学生時代はアパート生活でしたので、学生寮というものを経験してみたいという気持ちもあり面接試験を受けました。丁度、大学院の入試で、ドイツ語を勉強したこともあって、Haus der Begegnung という名前にも惹かれたこともあります。更にぼんやりと将来、留学できたらいいなと考えており、英会話の勉強にもなるのではと都合のよいことを考えておりました。無事面接に合格して、寮生としての生活が始まりました。

学生時代は、アパートと農学部のグランドと雀荘の3点を回って、時々、講義に行くという生活を送っており、他の学部の学生との接点は全くといって言い程無かったこともあり、文系の院生の方など、多様な背景の学生との共同生活は極めて刺激的でした。いかにも由緒ある血筋のご出身のような名前のハーバード大学からのドイツ人留学生は、篆書や隷書のような中国のカリグラフィーの研究をしておられ、当然中国語は堪能でした。ネパールからの留学生は、ビールを飲みながら。私の理解できない言語を含め、同時に3人と3カ国語を使って口論してました。韓国からの留学生は、

出国するときに日本人には絶対気を許してはいけないと言われたのに、自転車の事故で日本人に怪我をさせてしまい大変な事になったと思ったら、とても優しい方だったので驚いたと語ってくれました。これら全てのことが私にはとても新鮮でした。

3 年間の寮生としての生活で学んだ事の一つが、常識とは決して"常"に同じものではないということでした。ハウスミーティングで"早朝"から音楽を流して体操をする

レジデントに対する苦情に関する議論がありました。

苦情を言われた学生の国ではその時間には皆、起きて活動を開始しているので、"早朝"という認識は全くない。一方、苦情を述べた学生の"常識"では、その時間はまだ"夜"に近い"早朝"であり、貴重な睡眠時間の一部であることから、静寂が守られるべきであるという意見です。皆さんの"常識"では何時からが"早朝"で



しょうか?女性レジデントを受け入れるかどうかの議論も大変興味深い議論でした。 女性レジデントの受入れの可否は、ハウスの憲法に相当する Bylaw (定款) に関わる 課題であり、理事会の決議事項に相当します。当時の理事会は、女性レジデントの受 入れなどの議論にすら上がっていなかったので、いくら学生が議論しても意味がなかったのですが、それでも延々と賛成派と反対派の間で議論が戦わされました。反対派の論理は、いわく、男性だけの方が、遠慮ない討論ができる(なぜ女性がいるとできない?)、男性だけの文化を守るべきだ、風紀が乱れる(!)、等々。そう発言していた先鋒が、実はその後、ゲストとして宿泊していたドイツ人と結婚するというオチがあります。

研究との出会い

HdBに関連した私の人生の転機となった次の出会いが内海博司先生との出会いでした。私の大学院での研究は、琴浦先生との最初の繋がりもあり、骨や筋肉に出来たがん(肉腫といいます)の研究で、入学後、整形外科の研究室で先輩に教えて頂きながら実験をしていました。大学院の1回生ではいくつかの講義を受講することが義務づけられているのですが、入学後半年ほどたったある日に受講した講義は私にとって衝撃的なものでした。京都大学放射線生物研究センター(放生研)の佐々木正夫教授による、その講義は私が研究していた骨肉腫という病気が、生まれつきの遺伝子の変異によって発生することがあるという内容でした。分子生物学という名前の学問に対する憧れもあり、何とか佐々木教授のもとで研究ができないかと思っていたところ、何と当時 HdB の理事をされていた内海博司先生が佐々木教授の研究室の助教授をなさっていることを知りました。早速琴浦先生を通じて、内海先生にお願いして佐々木教授を紹介して頂きました。佐々木先生ご自身は、分子生物学的な実験はされていなか

ったので、受け入れに関して迷われたのですが、となりの研究室で助手をしておられた石崎寛治先生に指導して頂くということで引き受けて頂きました。今、思うとかなり変則的なことですが、小所帯の研究センターで研究室間の風通しも極めてよかったことが幸いして、二つの研究室の方と親しくなることができました。独身でしたのでアルバイドも1日だけで、あとは朝から夜中まで研究室に入り浸る生活でした。実験が面白くて、3年目はあまりハウスの活動に参加できなかったことを申し訳なく思っています。卒寮した後、大学院の4回生の6月に結婚したのですが、その二次会をハウスでさせて頂いたのも大変楽しい思い出です。

見る前に跳べ

何年か前に出身校である米子東高校で講演をさせて頂く機会があり、その時に先生 のモットーはなんですかと聞かれた時の答えが、この「見る前に跳べ」です。大学院 卒業間近の4回生の冬に、アメリカ西海岸での学会に石﨑先生と共に参加し、その帰 途に(と言っても方向は反対でしたが)、シカゴ、ニューヨークそしてボストンと研 究所訪問旅行に連れていって頂きました。シカゴでは放生研の大学院の先輩が留学さ れているところに、ニューヨークでは石﨑先生が留学されていた研究所、そしてボス トンでは私の研究に関して共同研究をさせて頂いていたハーバード大学の Dryja 教授 のところを訪問しました。私の研究の内容を紹介した後に、Dryja教授から「実は来年 から一人ポスドクを雇用する計画があるのですが、どうですか」と言われました。ボ ストンでは石﨑先生のご友人の家に泊めて頂き、シーフードやニューイングランドの 美しい風景を満喫し、すっかり魅了されていたので、後先考えず(妻とも相談せず)、 是非お願いしますと返事をしてしまいました。実を言うと、帰国してから進路に関し てかなり迷いました。大学院の4年間、外科医としての技量は当然停滞したままです ので、同級生がどんどん経験を積んでいく中、更に3年近くメスを持たないというこ とは、将来整形外科医としてやっていけるだろうかという不安がありました。でも、 考えても無駄だからやってみよう、なんとかなるだろうということで留学することに しました。この辺りから、私の「見る前に跳べ」という流れが始まったように思いま す。

ボストンでの3年間は、苦労も多かったのですが、最先端の研究に触れることができ、また日本では味わえない体験もたくさんできました。何とか論文をまとめることができて平成3年に帰国しました。

帰国後、京都市内の病院で整形外科医としてのリハビリが始まりました。同時に私に続いて放生研で研究をしている大学院の後輩に、留学中に取得した技術を教えて実験を指導することで基礎研究との縁も続いていました。そんな時、また人生の歯車が回る出来事がありました。残念ながら今回は尊敬する先輩が旅先で急死されるという不幸な出来事がきっかけであり、その先輩が着任することが内定していた京都大学生体医療工学研究センターの助教授のポジションに急遽応募し、採用した頂き平成7年7月に着任しました。

ハウスペアレントとしての HdB

帰学することをお聞きになった琴浦先生から、それならハウスペアレントをしなさ いという指令が来ました。幼い子供が3人という状況でしたが、寮生の時の楽しい思 い出もあり、妻も同意してくれてお引き受けしました。これがハウスとの3回目の出 会いです。ところが楽しかった寮生の時代とは全く異なる苦難の時が待っていました。 まず学生の雰囲気がすっかり変わっていました。懸案 (?) の女性レジデントの入寮 が始まっていたことや、学部生中心で年齢層が下がったこともあってか、よく言えば 自由な雰囲気、悪く言うと少し子供っぽい雰囲気になっていました。寮費滞納者の問 題などのトラブルシューティングに追われる日々だったように思います。借地権の問 題で、スイスミッションとの関係も難しい状況となり、スイスペアレントとの関係も あまりスムーズではありませんでした。当時の故稲垣博理事長には、スイスミッショ ンとの交渉などで大変なご苦労をお掛けしました。残念ながら、私の代でスイスから のペアレントの派遣は終了となり、HdB は独立組織として生き残る道を選択すること になりました。ペアレントとして過ごした3年間を思い返すと、指導するという意識 が強すぎたようにも思います。HdB のペアレントはティーチャーではなく、学生と同 じ時間を共有するペアレントであるという意識を持つことが大事であったのかなと思 います。

再生医学との出会い

平成 10年にそれまで所属した研究センターが再生医科学研究所 (再生研)として再スタートしました。この研究所は日本で始めて、再生という冠がついた研究所でした。一口に再生医学といってもそのカバーする領域は、極めて多岐に渡ります。基本的な考え方は、本来人間がもっている再生能力では、再生できないような病的な状態を、人為的に再生を図るとこが再生医学です。

再生を司る因子としては、組織をつくる細胞、細胞が再生を司る足場、そして細胞が増殖分化するための因子の3つが必要であるとされています。植物に例えるなら細胞は種で、足場は土、そして増殖因子は水になるでしょう。私は再生研でこれらの中で主として細胞に関する研究を行ってきました。私たちの体は約200種類の異なる能力を有する細胞で構成されており、それぞれが異なる能力を有しており、生命の維持に役割を果たしています。これらは全て元を辿ると、1個の受精卵に行きつきます。つまり受精卵は全ての細胞を生み出す能力を有している細胞です。しかし200種類の細胞が直接受精卵からできるのではなく、神経とか血液のように一つの組織を構成する異なる複数の種類の細胞を生み出す能力のある組織幹細胞と呼ばれる細胞から分化するとされています。私は再生研で、それまのでがんの研究に加えて組織幹細胞の一つであり骨や軟骨の細胞に分化する能力のある間葉系幹細胞を用いて、骨や軟骨の再生に関する研究を始めました。そして骨頭壊死という難治性の骨の病気に対して間葉系幹細胞を用いる治療法の試験を行いました。

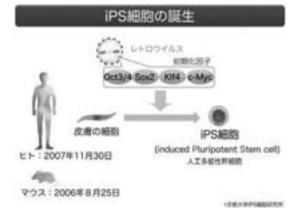


iPS 細胞との出会い

1981年、ケンブリッジ大学のマーチン・エバンス教授は、マウスの受精卵が100個ぐらいの細胞に分裂した胚盤胞と呼ばれる段階で体の外に取り出して、もとの受精卵と同じ能力、つまり全ての細胞に分化する能力をもっている細胞を培養することに成功したことを発表しました。この細胞は胚性幹細胞(ES細胞)と命名され、2007年にこの業績によりノーベル生理学・医学賞を受賞されました。マウス ES細胞の発表から18年後の1998年、ウィスコンシン大学のジェームズ・トムソン教授がヒト ES細胞の樹立を発表しました。もちろんマウスと異なり、個体を作製する実験は出来ませんが、その他の特徴からマウス ES細胞とほぼ同等であると考えられ、無限に増殖可能で、かつ全て細胞に分化できることから再生医療のへの応用が期待できる細胞です。ただ

その元となる受精卵は、そのまま体内にあれば、個体となったはずの細胞ですので、受精卵を壊すことは生命を滅していることに等しいという立場からいくつかの国では国の補助による研究は禁止されています。また他人の細胞になりますので、移植治療に用いる際には免疫拒絶の問題が発生します。

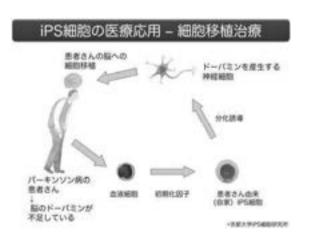
2003年に私は再生研の教授に昇任しました。その翌年の2004年に山中伸



弥教授が奈良先端科学技術大学から京都大学に移ってこられました。教授選考のため のインタビューの際に、京大での研究テーマとして分化した細胞から ES 細胞と同等 の能力を有する細胞を作製するという計画を紹介されました。大変夢のある研究であ り有望な基礎データもあるようでしたので、大いに期待はしたのですが現実的には長 い時間がかかるのではという印象を受けました。ところが、それからわずか2年後の 2006 年にマウスの皮膚の細胞にたった4つの遺伝子を強制的に発現させることで、ES 細胞と同等の細胞ができることを発表されました。世界中の幹細胞研究者が目指して いた成果であり、初めてその成果を見たときの興奮は今でも鮮明に覚えております。 数名の先生と山中先生を囲んで、お祝いの宴会をしたのですが、その時はまさか自分 自身が iPS 細胞を使った研究を始めるとは思ってもいませんでした。ところが、2007 年にヒトの iPS 細胞が発表されると、iPS 細胞に特化した研究施設を設立する動きが一 気に高まり、翌2008年の2月に京都大学iPS細胞研究センターがバーチャルな形です が発足することになりました。設立にあたり、それまで iPS 細胞はもちろん、ES 細胞 も取り扱ったことの無い私にもお声をかけて頂き、そこから私の iPS 細胞研究が始ま りました。そして2010年には建物が完成し、iPS細胞研究所としてスタートしました。 その後、2015年に二期棟、2017年に三期棟が完成し、現在約600名の研究者や研究支 援者が iPS 細胞に関する研究に従事しています。ヒトの iPS 細胞が樹立され 12 年が経 過し、その間に様々な臨床応用を目指した研究が進められてきましたが、主となる応 用は細胞移植治療と創薬への応用です。

細胞移植治療への応用

特定の細胞が無くなったことが原因の病気があります。例えばパーキンソン病という病気は、ドーパミンというタンパク質を産生する脳細胞が、なんらかの理由でなくなっていくことで、体の動きが障害される病気です。そのような病気では、無くなった細胞を補うことで症状が改善することが期待されます。そこで患者さんの細胞からまず iPS 細胞を作



り、そこからドーパミンを産生する細胞を作って、患者さんの脳に移植するという治療が考えられます。これが iPS 細胞由来細胞を用いた細胞移植治療の考え方です。既に 2014 年に加齢黄斑変性症という眼の病気に対して、患者さん由来の iPS 細胞から作成した網膜色素上皮細胞の移植治療が行われ、移植した細胞は長期間生着して、患者さんの視力も保たれていることが報告されました。

患者さん由来の iPS 細胞を応用したこの自家細胞移植治療法は、免疫拒絶の問題が回避される利点があるのですが、一方で、世界で始めての応用例ということもあり、

細胞の安全性チェックに非常に長い時間と数千万円の経費がかかりました。優れた治療法なのですが、将来的に多くの患者さんに対する治療法とするには問題があります。そこであらかじめ安全性がチェックされた他人の iPS 細胞を使用した他家細胞治療が検討されています。免疫拒絶反応は細胞表面にある HLA と呼ばれる抗原で決定されることから、多くのヒトに移植できる特殊な HLA をもった iPS 細胞を樹立するプロジェクトが進行しており、現在、既に日本人の約 60%をカバーできる細胞が樹立されています。この細胞を用いて、網膜の病気に続いて、2018 年にはパーキンソン病に対する治療が、2019 年には角膜や血小板の病気に対する治療が行われました。更に 2020年中には脊髄損傷や心不全に対する治療が行われる予定です。今後はゲノム編集技術を用いて、より多くの方に移植できる iPS 細胞を作製すると同時に、より安全でかつ迅速に iPS 細胞を作製する方法が考案され、将来は全ての方が自分の iPS 細胞をもつような時代が来ることが期待されます。

創薬への応用

細胞移植治療への応用は、比較的わかりやすい応用ですが、iPS 細胞を使って薬を探すという応用は、少しわかりにくいかもしれません。

対象となる患者さんは、遺伝病の患者さん、つまり約2万個あるヒトの遺伝子のどれかに生まれつき変異があるために病気になった方です。変異は全ての細胞に存在していますから、患者さんの血液や皮膚の細胞から作ったiPS細胞にもその変異は存在しています。この特定の疾患の原因遺伝子に変異があるiPS細胞を、疾患特異的iPS細胞と呼びます。次にこの変異をゲノム編集技術によって正常に戻した細胞を作製します。この変異修復iPS細胞と元のiPS細胞は、変異部位以外は全く同じ遺伝情報をもつ細胞です。次に、その両者の細胞を、その病気の原因となっている細胞に誘導し、培養皿の中で両者の特徴を比較します。もしこの時に、患者さんの病態に類似した現象、例えば、神経細胞が死んでしまう病気であれば、疾患特異的iPS細胞から誘導した神経細胞が、変異修復iPS細胞由来の細胞より死にやすいという現象が観察できたなら、培養皿の中で病気を再現することに成功したことになります。最後の段階は、多くの化合物を一つずつ、疾患特異的iPS細胞由来の細胞の培養皿に加えていって、

観察された現象を改善する、つまり細胞が死んでいくことを防ぐような化合物を探索するドラッグスクリーニングと呼ばれるプロセスです。そしてその化合物が病気を防ぐ効果があるかどうかを、動物モデルで確認した後に、患者さんに投与して有効性を評価する治験という段階を経て、その結果をもとに治療薬としての承認を受けて、患者さんが使用できる薬となります。これが創薬への応用です。



患者さんとの出会い

iPS 細胞研究センターが発足して暫くしてから、同僚の先生から、骨の遺伝病の患 者さんから、自分の病気を研究して欲しいという依頼がきているけれど、どうします かとの連絡がありました。その患者さんと御家族は、iPS 細胞のニュースを聞いて、iPS 細胞を使って自分の病気を治して欲しいと希望されたとのことでした。その病気が、 今私が主として研究している進行性骨化性線維異形成症(FOP)という病気です。つまり 私が FOP の研究を始めたのは、一人の患者さんとの出会いがきっかけです。FOP は 200万人に1人という非常にまれな病気で、日本の患者さんの数は約80名と推定され ています。筋肉や靱帯など、本来は骨が出来てはいけない組織のなかに骨ができてし まう病気で、その結果、体幹や四肢の動きが著しく障害され、日常生活に大きな支障 を生じる疾患です。2006年に原因の遺伝子が同定されましたが、その後も有効な治療 薬がない状況が続いていました。2007年にその患者さんから iPS 細胞を作製して、研 究を開始しました。多くの研究員の努力の結果、2015年に異所性骨が出来る時に作用 するタンパク質をつきとめ、2017年にそのタンパク質の作用を阻害する薬剤としてラ パマイシンという薬剤を同定しました。ラパマイシンは既に他の疾患に対する薬剤と してヒトに使用することが認められている薬剤であることから、この薬剤を用いた治 験を2017年からこの薬剤を用いた治験を開始しました。このような創薬への応用がい くつかの疾患において進められています。

おわりに

振り返ってみると、HdBとの出会いは私の人生を大きく左右したものでした。

多くの出会いは、私と iPS 細胞との出会いのように、全く予測できないものであり、だからこそ、見る前に跳べという意識で出会いの場に自ら進むことが大事なのではと思います。これからも HdB が名前の如く、多くの人に出会いの場を与えて、それぞれに予測もしない新しい世界が拡がっていくことを期待します。そして出会いの大切さを広く社会に発信していくことで、自国優先主義、排他主義の潮流に社会が立ち止まってくれる一助になることを目指すことが、行政、一般の方々の支援に答えることになるのではと考えます。

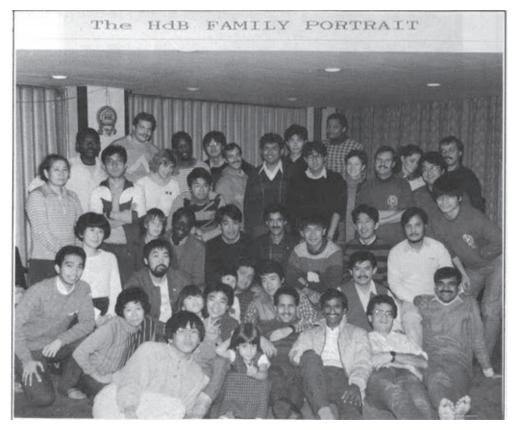
サンゴ礁の生物多様性と HdB のダイバーシティ

ジン・タナンゴナン

(近畿大農学部講師、OM1984)

要旨

海洋面積の 1%にも満たないサンゴ礁の海は生物種の約 25%が生息する生物多様性の宝庫である。しかし、地球温暖化による海水温上昇等によって今世紀にも造礁サンゴは絶滅する危機的状況に陥っている。まさに、耐震問題で存続の危機に直面している HdB (ハウス) と似た状況といえる。多種多様な生物を育むサンゴ礁同様、ハウスは多人種多国籍が集うダイバーシティの場として世界の多様な文化を体感できる貴重な機会と空間を提供する。個性的な面々とハウスで過ごした3年間を回想しながら、私の研究分野の生態学的生物多様性と社会経済学的「ダイバーシティ」について考えてみる。



1986年度のレジデント(53名のうち42名)。筆者は左端前列に膝ついている。 当時の職員とスイス・日本ハウスペアレントご家族も写っている。

留学生寮は多様性との共存

1979年(昭和54年)4月から始まった日本留学生活は多様性の連続だった。文部省(現文科省)奨学生として、日本語ゼロを克服するため、最初の一年は東京都府中市にある東京外大付属日本語学校の留学生寮に寝泊まりして、すぐ隣の教室に朝から晩までみっちりと日本語をあ・い・う・え・おから叩き込まれた。おそらく当時の地政学を反映する国籍構成で、同期生は故国フィリピンと同じ東南アジアの出身者がほとんどで、その後カナダ、ニュージーランド、オーストラリアの留学生も加わった。京都大学入学からは京都市山科区にあった国際学友会京都留学生寮に入寮し、中国、韓国をはじめアジア諸国やヨーロッパ、アメリカから世界中の京大留学生や研究者と4年間滞在した。

学部卒業後、大学院進学のため、(在寮 4 年間までしか認めない)山科留学生寮を退 寮し、新たな住まいとして国際学生の家(ハウス)に移ることを決めた。学部生のと きから、スポーツ交流会やダンスパーティ等の催しで友人も出来て、よく遊びに来て いたので、ハウスのことを十分知っているつもりだったが、入寮条件としての面接が あった。面接では、ハウスのドイツ語名称にある begegnung=出会いが単なる人との出 会いではなく、義務が含まれていることと説教された。その義務が当番制。ハウスの レジデント全員は必ず何かを担当し、それを果たせないと入寮資格無し、と強調され た。当時、私は水産生物学研究室に所属し、実験のため2-3週間は舞鶴の京大水産実 験所に滞在するときもあるので、その祭は当番の仕事ができない。そのときのハウス ペアレント F 先生は私と同じ農学部だったのでこのことはご存知で、指摘された。や ばい、と思ったが、ハウス不在の分はそれ以上頑張るとアピールしたのかも知れない。 結局、何とか入寮が認められて、1984年(昭和59年)4月から1987年3月まで在寮 した。その後、博士課程に進学したため、退寮して下宿住まいと新築の京大修学院留 学生寮にも1年間入寮した。(当時の京都3大留学生寮をすべて制覇できたことがち ょっとの自慢)。なお、ハウスでは日本枠は約10名(?)であるが、他はひとつの国 (地域) からは基本的には 3 名以下の入寮制限はあるが、空室等を理由に例外的な運 用もされている。

多様性とダイバーシティの違い

故国フィリピンは約7,100島の島嶼共和国、固有種密度の大きい生物多様性ホットスポットである。地質学的タイムスケールでそれぞれの島・海域において固有種が進化したと考えられる。また、各島、地域には独特な文化や言語があり、文化人類学的に多様な地域社会が形成されている。一国87の種族言語は多様性社会フィリピンを象徴する。この多様性のなかに私は生まれて育った。出身地が違う父と母は別々の言語を話すが、家族で使うことばは父の言語。子供のとき、母の故郷によく連れて行ったので、彼女の言語は聞いて理解できるが、ほとんど話せない。また、学校は英語とタガログ語(厳密にはフィリピノ語)で授業が実施されているが、巷ではイロンゴ、セブアノ、イロカノの3言語が飛び交う。互いの言語で通じない場合は共通語のタガログ語を使うため、私は日々少なくとも3言語を話して暮らしていた。多言語多文化の環境に育ったため、留学生寮という多様性環境には特に違和感を覚えたことはなかった。

一方、日本社会は画一的とよくいわれているので、世界各国が居住する留学生寮は 比較にならないほど多様性社会である。しかし、最初に住んでいた東京外大の寮と京 都山科、京大修学院の寮はいずれも留学生専用の寮であるため、日本社会・地域から は隔離された異質な存在といえるであろう。この寮のレジデントは短期滞在も多いた め、仕方がない面もあるが、生活拠点の地域に多様性の利点が十分に発信されず、機能していないと思われる。この場合の多様性はダイバーシティといえないだろう。しかし、聖護院にある京都国際学生の家(Haus der Begegnung, HdB)(親しみを込めてハウスとも呼ばれる)は、日本人学生も留学生と一緒に生活し、さらに「当番」という義務を課しているため、個性の集団だけではなく日本社会に根ざした機能的な多様性、すなわち、ダイバーシティの場である。



ダイバーシティは英語の diversity から由来したカタカナ言葉で、本来は日本語の多様性と同意語。しかし、日本の社会経済で使われ始めたダイバーシティの意味は「多様性の効果的あるいは有効的活用」が包括されている。なぜそうなったか、社会経済学は専門外なのでネットで調べた。そもそもは、アメリカの企業マネジメントではdiversity and inclusion と標語されたものが短縮されて、inclusion=組み込むが日本ではダイバーシティに包含されたこととわかった。さらに、1985 年に改正された「男女雇用機会均等法施行」を機に日本企業が重要なキーワードとして使われはじめたといわれている。

本稿では、多様性とダイバーシティを区別し、日本的意味のダイバーシティを機能的多様性と表現する。ハウスは多様な国籍、地域を受け入れているだけでなく、各自に当番を課して、ハウス行事を皆で実施させることで多様なコミュニケーションや協力体制が築かれ、多様性が有効に活用されているダイバーシティの場である。在寮期間にあった当番は、夜中に玄関を施錠するガード当番、冬に暖房をつけるボイラー当番、キッチンをきれいな状態に監視する各階のキッチン当番、毎週金曜日の食事会企画者のコモンミール当番、年2回泊りがけの旅行当番、1年に一回皆から原稿を募るイヤーブック当番、留学生寮交流のためのスポーツ当番。当番が免除されるのは、レジ

デント代表に選ばれた 4 人のチームメンバーになった場合のみ。ちなみに、私はスポーツ、イヤーブックを担当し、チームのチェアマンにもなった。

女性レジデントのいないダイバーシティ

ダイバーシティの概念を世間に広めた「男女雇用機会均等法施行」は企業における 女性の活躍を後押しすることが目的である。当時のハウスは男子しか受け入れていな いため、真のダイバーシティの実現にはこれが大きいな課題だった。普段は女性がい ないせいか、年数回のダンスパーティが恒例行事となって、その実施に向けて皆積極 的に協力し、活気あふれる華やかなハウスのロビーが演出される。

女性レジデントがいないデメリットのひとつは、先述の留学生寮対抗スポーツ大会に現われた。最初はハウスと山科留学生寮だけの大会だったが、京大の修学院寮が出来てから、ハウス、山科、修学院の三つ巴となった。当時、修学院には女子留学生寮はあったが、スポーツ大会には積極に参加しなかった。多国籍が参加し、各種目の結果による点数を順位をつけるミニオリンピックさながらのスポーツ大会だった。そしてある時期から、女性の参加モチベーションを上げるため、結果の順位と関係なしで女性ポイントが加算されるようになり、優勝が当たり前だったハウスは2年連続優勝トロフィーが奪われ、男女共同の山科、そして修学院寮に渡った。この流れを断つため、私がスポーツ当番のとき、女子留学生寮にハウスとの合同チームを持ち掛けた。交渉の末、提案が了承されて、合同チームが発足した。その合同チームの活躍で優勝し、再び優勝トロフィーがハウスのロビーを飾った。

女性レジデントを受け入れるかどうかは、在寮期間後半にレジデント全員出席のハウスミーティングに議題となった。一回目のミーティングでは各自が賛否の理由を発言して議論がなされただけ。多様な議論のなかでフェミニストと思った人が受け入れに慎重な立場を表明したことが以外だった。人は見かけによらずか。そして、2回目のミーティングで採決にかけられて、僅差で女性受け入れは否決された。しかし、10数年後には女性レジデントの入寮が認められて、真のダイバーシティが実現された。

サンゴ礁の生物多様性とハウスのダイバーシティ



フィリピン、シキホール島のサンゴ礁水中風景

サンゴ礁は熱帯雨林に匹敵するほど生物多様性が高いため、海の熱帯雨林とも言われるが、熱帯雨林以上の多様性はあると指摘する研究者もいる。サンゴ礁の生物多様性は様々な要因によるものであるが、ひとつは造礁サンゴ群集の3次元的構造が形成する無数の生息空間の提供といわれている。もうひとつは複雑で多様な食物連鎖を維持できる効率的な栄養塩循環と考えられている。

生物多様性は、例えば生態系が攪乱に晒された結果、ある生物種が絶滅した場合に取って代わる種(バックアップ種)が存在するかで重要となる。生物多様性が高いほど、同じ生態学的役割を担う種が多く存在すると、攪乱が起きても生態学的財とサービスの提供が維持される。いわゆる redundancy=重複性(反復性)が高いほど生態系機能の持続性が保てる確率が高くなる。

つまり、生物多様性は種絶滅に対する保険のようなものと考えられていたが、近年では生態系機能が生物多様性によって必ずしも保障されるとは限らない見直し論が出てきた。例えば、David Mouillot et al.の論文 (Functional over-redundancy and high functional vulnerability in global fish faunas on tropical reefs, PNAS: September 2014) では、世界の広い海域を6つに分けて、それぞれに生息する合計 6,316 種の熱帯性魚類を調べた結果、最も種類数の多い (多様性が高い) 中央インド太平洋海域 (3,689 種) と最も少ない (403 種) (多様性が低い) 東部大西洋海域は、生態学的機能の多様性はそんなに変わらないと報告された。結局、種多様性豊富な海域では限られた生態学的役割に多くの種が偏るため、種多様性の少ない海域と同じように種絶滅による生態学的リスクを覆っていることになると結論づけた。

ハウスについても同じように多くの多様な人種、国籍の集合体だけにとどまらず、 各自が役割(当番)を遂行し、個人の意見、考え方が出し合える、相互理解が築かれる関係で多様性が機能するダイバーシティの場といえる。

私は、ハウスのダイバーシティが機能するための究極の目標は世界平和とおもう。 人間は何も知らないことに不安と恐怖を覚える。ハウスで知り合った世界中の友人は その彼・彼女の母国を知るきっかけとなる。その国に友人がいたら、戦争なんかでき ないとおもう。

HdBへの感謝

武田 桃子(日本)(京都大学薬学研究科)

こんにちは。2019年度前期チェアパーソンを務めております、武田桃子と申します。 今日は、HdBがいかにレジデントを勇気づけて変えてくれるのかということについて 私の経験を交えながらお話させていただきたいと思います。

先日、私のことを入寮当初から知るある OM に「えーあの桃子がチェアパーソン?大丈夫? (笑)」と言われました。すこし落ち込みましたが、実際に彼がそう言うのがわかる部分は自分の中でありました。というのも、私が HdB に入寮した際は、あまり積極的ではなかったからです。

そもそも私がこの寮への入寮を決意した理由は、留学時の悔しい経験があります。私は幼い頃から国際交流には興味が有りました。大学3回生の時(HdBに入寮する1年前)、念願であったカナダへの長期留学をしました。



留学をすれば英語力も伸び、外国人の友達に囲まれて楽しく過ごせる。そう思っていました。実際、楽しかったですし、留学を通してしか出来ない貴重な経験はたくさんしました。ですが、思っていたほど上手くいかないことも多々ありました。英語力は全然伸びず、さらにシャイであった自分は外国人に対する恐怖心のようなものがあり、友達作りに苦労しました。なので、留学後は、「私って留学してましたって言える人間なんだろうか?」と思っていました。この悔しい気持ちを晴らすため、HdBという国際学生寮に身を置き、疑似留学体験を続けることに決めました。

ということで、HdBに入った時は、英語もあまり喋れないし、日本人ばかりと話しているし、部屋にこもりがちだし、当番の仕事も段取りが下手でしたし、ハウスミーティングで思うことがあっても中々勇気が無くて言えませんでした。

HdBに入って約3年たった今、だいぶましになったのではないかと思います。英語は日常会話やミーティングでの議論に付いていけるようになりました。(とはいえまだまだですが)外国人に対する恐怖が無くなり、幅広い人に話しかけられるようになりました。ロビーによく降りれるようにもなりました。

一番の変化は自分から手を挙げて動くようになれたことです。例えば、非公式イベントを企画してみたり、避難訓練を開催してみたり。これまで紙ベースで個別に行わ

れていたデータ共有をクラウドで一元化する仕組みを皆と考えたり。

こういう経験を通じて、皆で協力しながらゼロからアイデアを作っていくこと、組織の変化の過程に自分が携わっていくことが楽しいと思うようになりました。シャイな自分にとっては新しい感覚で、HdBにいるからこそ味わえました。

来年から社会人になりますが、社会に出る前にこのような経験をすることが出来、 とても良かったと思っています。

周りの人も皆同じように変化しているのを感じます。始めは日本人と、または外国人としか話していなかった人達が仲良くなっていく。ロビーに降りてこなかった人が降りてくるようになる。新しいクリエイティブなイベントを企画する。

ではなぜ HdB ではこのようにレジデントが積極的になれるでしょうか。私は二つの理由があると思います。

まず一つ目に、イベント企画が多い制度です。HdBに入ると、当番に必ず属さなければいけません。自分たちでアイデアを考えて、それを他のレジデントに伝え、イベントを進行していく。その過程でレジデント同士の交流が深まるし、能動的になっていくのだと思います。

二つ目に、HdBの「受け入れてくれる雰囲気」です。もちろんトラブルや失敗もあります。ですが HdB は良い意味でゆるいので、基本的にレジデントは失敗してもその人を気にしたり非難したりすることはありません。それよりも楽しいことにフォーカスする雰囲気なので、失敗を恐れずに伸び伸びと活動することが出来ます。

そういう雰囲気は、すぐに生まれるものではありません。人から人へ、伝統として伝わっていっているのだと感じます。私も入寮して、HdBの先輩達からその精神を引き継ぎましたし、私も後に入ったレジデントにもそれを伝えられていたら嬉しいです。だから、この国際交流の精神、失敗よりも楽しいことを!というような雰囲気は、私の知らない OM の方々とも通じると確信しています。

まとめると HdB は楽しめる場所、一生の友達ができる場所、変化する勇気をくれる場所です。こんな場所はなかなか無いのではないかと思います。

私はそんな HdB が大好きで、HdB を知れたこと、住めたことは本当に幸運だったと思っています。これまで 50 年 HdB が続いてきたように、これからの 50 年も学生に素晴らしい機会を与え続ける寮であってほしいと、心から願っています。

Rutvika's speech for the OM Meeting

Manohar Rutvika Nandan (Indian)
(Kyoto University)

What is HdB? From an engineering point of view is just a common dormitory with walls, bedrooms and common spaces, with an entrance and a roof. But when you get inside, and start to live in this place, you understand that is not a common dormitory. It's a family. There are fight, joke, laugh, as in all parent's house. The place is full of life, a dynamic life filled with culture, sport, and food but it's also quiet and peaceful. It's different. because you're living by your own, and so are the people living with you. And the dormitory, students and staff, push you to know the others living with you. By the many events as excursions and common meals, organized by the residents, the students can meet each other. Personally, the common meal is my favorite. During this event some of the residents must prepare for the food and then share it with the participants to the meal. While cooking you can learn a lot about international food, and let others experience your own country by the taste of the food. Meanwhile people can get closer each other, overtaking their shyness, opening themselves and sharing their experiences. Suddenly the dormitory become your new family, but different from your home. It's a family of friends that share experiences and stories, happiness and sadness. And this happens quite fast, thanks to the presence of long-term residents that put lot of effort to increase the life quality inside HdB, organizing those kinds of events. There are events almost all weeks, keeping people involved. And it doesn't matter if you spent three years or just few months, it will become a home, it will be your home from the beginning.

HdB has been an important part of my life since the last two years. When I first came to Japan, I was given a room in a dormitory in Uji. This dormitory, though next to the Uji Campus of Kyoto University is quite secluded. The rooms are self sufficient and you don't really have a feeling of community. Going there from India, where everyone is in your business, was a weird experience. I had no friends, I struggled to live alone. That with not knowing the language almost made me want to quit my degree and go back. After coming to HdB, everything changed. I found a sense of community, a sense of family. My lonely life brightened up. I started talking to people, making friends and learning to speak in Japanese. People in HdB have become my friends for life and for that I feel a strong sense of gratefulness. I want to continue the spirit of HdB for the coming years. It gives outsiders like me a place to which they feel they belong. It makes life in a new country much easier. Thus, I would appeal to all of the OMs and residents present here to put in efforts to make this place not just survive, but thrive for the coming years.

Richard's speech for the OM Meeting

Welsh Richard Louis (Zimbabwean)
(Kyoto University)



Institutions that promote international understanding and student support like HdB are something that the world needs these days. All over the world billions of people have access to infinite content and communication via the internet, so there is always potential for misunderstandings whether they be cultural, political, linguistic, etc. Academic collaboration is also something which has been enabled and is arguably one of the key

benefits of globalization. Students and researchers travel to study and work in foreign countries frequently now and we need to provide services to facilitate this. In my talk, I would like to elaborate on how HdB addresses such issues and why its holds such a special place in our hearts because of this.

Firstly, all residents both past and present will tell you that HdB is like a "home away from home" and there is nothing else that equals it. Living in another city or (perhaps in most cases) another country can be a stressful, lonely and difficult thing to do, but not if you live with us. Our building might be getting old, but we have something invaluable which still makes every day here worth living – a family. A multiethnic, multicultural family that will simultaneously lift you up and humble you in front of all those you deal with. Like a family, we have our differences and it isn't always easy to get along, but at the end of the day we understand each other better and let bygones be bygones. This is a group of people who you can receive support from in your time of need and possibly solutions you might not have thought of.

In Japan, foreign students have it particularly tough when it comes to language and cultural barriers. Japanese people are very polite and try so hard to help you, but most of us still find ourselves in a position where we have no autonomy and can't do basic things like paying for health insurance. Thankfully, everyone in HdB has a passion for languages to some degree. In fact, half of the residents who live in HdB are Japanese and they are interested in learning to speak English. It also goes the other way. I would say that at least half of the foreign students can speak good basic Japanese and have been through all the same trials previously. Like most places, Japan's society is all about jumping through the hoops. A language/cultural barrier can lift the hoop up, making it harder to get through, but HdB is akin to a trampoline in this case – you can jump higher and its waaay more fun!

Despite all of the entertainment going on in our lobby most evenings such as ping pong, pool

and board games, we often sit down and learn from each other too. Having such diversity sitting in one room every evening makes for some interesting conversation and you learn things about countries that are never covered on mainstream news channels all the time. The world is a complicated and messy place where right and wrong aren't always so obvious. Chatting to different people in the HdB lobby has always pushed me to confront points that I never would have considered previously, and then form a subtler, nuanced opinion about the topic at hand. Perhaps this is the thing which I am the most grateful for.

From all of this, it is easy to see that HdB fulfils a number of critical needs that our modern world has, and in doing so, it contributes towards a positive form of globalization. This understanding is something that the human race can benefit from in future generations and should be nurtured by everyone involved.

すごい HdB が大好きです

 Lee Kyungmin (イー・ギョンミン) (韓国)

 (京都大学総合人間学部)

HdBに来てから4年ほどたち、振り返って見ると「私こんなこともやってたんだね」と、自ら見てもびっくりすることがいっぱいあります。生まれて初めて家族と国を離れ、最初はさみしがりの消極的な一人の留学生であった自分を、そのころは予想もできなかった経験、考え、学びの機会を私に与え、段々私の色彩もより鮮明かつ複雑にしてくれたのは HdB でした。

単純に楽しいことを夢中に追いかける私にとって、HdB は子供をうまく誘い、導いてくれる親のような存在でし た。様々な背景を持ち、互いに新鮮な考えや興味を吹き



入れてくれる HdB のみんなは、私の知っていた「楽しい」の領域を広げてくれました。 十人百色の京都の家族たちから刺激され、私もいい刺激をお返ししたいと思う中で、 私はみんなのために私にできることは何であるかと積極的に考えるようになりました。

負けず嫌いで、自分の作り出した狭いプライドの垣の中で住んで来た私にとって、新しいことへの挑戦とは失敗の可能性を含む、決して「楽しい」こととは言い切れないものでした。しかしそういう私が、やったことのないトリップ企画の競争プレゼンに参加したり、人前で歌ったり、踊ったり、みんなが着たがるようなTシャッツのデザイン工夫を楽しめるようになりました。これは、物事を成功・失敗でしか考えていなかった短編的な考え方が HdB での生活の中で薄まってきたからではないかと思います。HdB での生活は正解・不正解ではなく、多様な正解が存在しているんだと私に教えてくれました。これに加え、HdB の保護者である House Parents の必要最低限の干渉とその存在が与えてくれる安心感を背景に、House Meeting や様々なイベントを通して、自主的態度・考え・積極さを養わせてもらえたのは私だけではないでしょう。

私の人生の中でこんなに密接に多様性に触れられる環境に置かれたのは HdB が初めてで、HdB 前後で私の感じる「違い」の語感は大きく変わりました。周りのほとんどが似たような背景、考え方、目標を持っていた韓国での学生生活の中で、私の思う「違い」とはどっちかというとしばしば不便でめんどくさいネガティブなイメージの浮かばせるものでした。対照的に、HdB での生活の中で「違い」は段々私の中で魅力のあるポジティブなものに変わってきました。世界中から集まり、異なる経験・教育を受けてきた HdB のみんなにとって「違い」はあって当たり前なことであり、共同生活の中で「違い」を無視し、裁かずにはいられないものなのです。裁くものが増える

のが何が楽しい?となると思いますが、「違い」を裁く過程の中の学び、普段の交流の中の嬉しい驚き、活動内容半径の広がりは「違い」があってからこそ享受できるものと私は思い、感じてきました。HdBの雰囲気もその「違い」を積極的に出すように背中を押してくれるので、自分の色を出しやすく、みんなの色も見やすい環境なのです。HdBのみんなの生活の中の価値観、歴史に対する観点、食べ物文化、娯楽の様相などに現れる「違い」、多様性の魅力を、私は時間をかけ味わう方法を見につけました。時々の言い争いやケンカも振り返って見ると、同じ流れでいい経験だったと思います。

まだまだの私ですが、HdBでの生活から私は楽しく様々な学びを得た気がします。できればもっと長くみんなの楽しい激動的な日々を過ごしたいのですが(笑)、間をおいてまたもう少し成長したみんなに会えるのを楽しみにします。今まで私にとって家族以上の存在としていてくれた HdBの運動好き、ゲーム好き、料理好き、ダンス好き、音楽好き、恋話好きのみんなに感謝の言葉を申し上げます。

HdB に関わって半世紀

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM)

私と HdB との出会い

私が HdB (Haus de Begegnung Kyoto: 出会いの家) に入居する3年前、丁度京大教 養部の宇治分校から吉田分校へ移ってきた当時(1962年4月)、アジアからの国費留 学生や賠償留学生と出遭うことが多くなりました。彼ら留学生は国や大学の受入体制 が十分でない状況の中で、日本語の修得や下宿探しで困っていました。そこで留学生 と一緒に「京都大学留学生友の会」という学生サークルをたちあげ、留学生問題に取 り組むことになりました(本サークルは約 13 年続きました)。このサークルの目的が 「学生として、対等の立場で日本人学生と外国人学生とが交流し、互いの文化・風土・ 社会を理解して、ひいては国際親善を図ることを目的とする」とのことでしたが、現 実は留学生の宿舎探しや、日本語を教えたりする奉仕的な活動ばかりで、目的と活動 の矛盾を感じていました。留学生を引き受けるという下宿屋にアジアからの留学生を 紹介すると、露骨に嫌な顔をして断られるということも多々ありました。当時日本人 の頭の中では外国人=欧米人=金持ちという風潮でしたので、如何に東南アジアの学 生達の心を傷つけ、その矛先が我々学生にも返ってきていました。そこで本学生サー クルも京都に留学生寮を作ろうという運動もしていましたが、ある日聖護院に新しい 留学生寮が出来るという話を聞いて、建設中の HdB を友人のビルマ留学生トンミン氏 と一緒に観に行き、現場に居られた創設者の一人稲垣博教授にお会いして、HdB の設 立趣旨(Principle and Purpose)を見せて頂き感動して、多くの友人留学生達と共に入 寮したのが、HdBとの関わりの始まりでした。

HdB の 1 期生として

そんな訳で、最初のレジデント(院生)として2年(1965年4月~1966年3月)過ごしました。当時は最高2年間しか居れないばかりかレジデントは男子だけで、留学生と同じ年齢なら日本人学生は幼いとして日本人は院生以上という入寮制限がありました。更に寮生活するための最低のルールはあったのですがトラブルが続出する始末でした。訪問された女性の友人と合う場所は1階ロビーだけ、2階以上には上げてはならないというルールがありましたが、開寮当日の4月1日に荷物を運んできたビルマ留学生の友人女性が2階に上がり部屋に出入りし、その後も女性達が2階以上に上がることが頻繁に起きていました。更にスイスと日本の二組のハウスペアレント(HP)がいたので、「ヒトが徹底的に話し合う最適の人数は15,6人程」と云う法則に従い、2階の学生17人は日本人 HPと、4階の学生は3階のスイス HPと一緒にコモンミー

ルやミーチングを行うことになっていました。学生を分断して何をしようとしているかが理解できないというので、全員一緒でコモンミールやミーチングを行うべきだという意見が出たりでミーチングは何時も揉めていました。当時は寮生で留学生との交流があった日本人は私だけでしたので留学生といろいろと議論した後、私が「学生の意見を集約する学生委員会が必要である」と稲垣先生に直訴することになりました。しかし話を聞いた先生が大変立腹したのには驚きました。60年安保闘争のなごりもあり、多くの大学の学生寮が学生運動家住み家となり諸悪の根源は学生自治組織と思っていたようで、学生の自治組織には大変警戒をしていたようでした。何度かの話合いの後、現在の学生組織である議長、副議長、会計、書記とハウスペレントを含むチームという組織が出来て、現在のハウスルールが整備されることになりました。

ハウスペアレントして

その 10 年後に急に日本人 HP の空きが出来て、まだ独身で京大医学部の助手であった私に HP (ハウスペアレント) として入居するようにと要請されました。一年目は独身で、2 年目は結婚して HP (1973 年 3 月~1975 年 6 月) の任を続けました。丁度開寮 10 年目に当たり、10 周年の記念行事を行いましたが、それを記念して YEARBOOK を作りました。結果としてそれが YEARBOOK の 2 号となり、その後は YEARBOOK が毎年発行されるようになりました。更に 10 年前に我々が作ったハウスルールが現状と合わなくなっていたので改正したりしました。

2度目の HP は米国留学から帰国した頃で、約3年間(1987年4月~1990年8月) ほど入居しました。その時もハウスルールの改定を行いました。また、ダンスパーティーや音楽会などで何かと周辺住民に迷惑をかけていることから、地域のお祭りに積極的に参加しましたし、周辺住民との交流を目的とした第1回の「国際食べ物祭り」を開催しました。この「国際食べ物祭り」は途切れることなく現在も続いていることは嬉しい限りです。

常務理事として

その後も京都に居るというので、学寮運営委員長や理事、常務理事を仰せつかっていました。21世紀を迎える直前、非常に残念なことが起きました。35年間も HdB 構想に賛同し建設資金や維持費を集めてハウスペレントを送り込み共同で HdB を運営してきた SOAM と、公的な協力体制が消滅したことです。HdB の運営方針で意見が異なったと云われていますが、SOAM の財政的な問題が起きたことが原因のようでした。スイス国民は宗教税を払っていますが、多くの人々が教会にも寄附をし、その寄附金を用いて種々の活動をしていました。しかし若者達が寄附をしなくなったこと等で資金繰りが悪くなり、経済大国になった日本に何故お金を使うのかということが問題視されていたようです。スイスからハウスペアレントも協力金も送られなくなったことで、日本人ハウスペレントだけで運営することになりました (1999/12/31)。また付属設備の老朽化で、ボイラーを廃止してエアコンに変更を余儀なくされたことや、建物が

「防火不適合建造物」と認定されて、その対応が出来なければ HdB は閉鎖せざるを得ない窮地に陥りました。そこで私の友人である吉田和男京大経済学教授と神田啓治京大原子炉実験所教授に理事に就任して頂き、吉田理事を委員長とした募金委員会が活動を開始しました(1999/10)。まず OM や在寮生達による学寮存続を訴える嘆願書を集めて、京大を通じて文部省の留学生課にお願いし、神田理事の助けを借りて(財)日本国際教育協会から、改修工事費の 1/3 が支援を頂けることになりました。また吉田理事の働きで稲盛和夫京セラ名誉会長から 2 千万円の寄附を受けられることなり、それが引き金となり、京都府(200 万円)や京都市(100 万円)、諸企業、多数の市民の拠金によって改修費(5.800 万円)が集められ、閉鎖の危機を乗り切ることできました。

理事長を引き受けて

2007 年稲垣博 4代目理事長が亡くなられたことで、理事長を引き継ぎ 13 年 (2007 年 5 月~2020 年現在) が過ぎようとしています。その間に 45 周年記念式典、50 周年記念式典を行いました。更に法人制度の大改革に遭遇し、当財団法人も公益財団法人に移行する手続きをして無事移行することができました(2013.4.1)。その2年後には「税金控除」の資格も取りました(2015/3/31)。

本館の耐震対策と老朽化対策について

しかし2000年の危機から10年も経たない内にHdB 存続の危機に再度直面することになりました。日本列島を襲う阪神淡路大震災(1995)・東日本大震災(2011)などが契機となり、公共建築の「耐震状況」報告をしなければならなくなり、HdB の耐震状況を知る必要が生じました。まず HdB を建設した「竹中工務店」に一次診断をお願いすると、建築後50年経つHdB 本館は、耐震基準が変化しているので耐震補強が不可欠という診断を受けました(2013)。補強には最低1.5億円は必要である。しかし補強しても何年建物を維持できるか不明という厳しい診断内容でした。スカラーが滞在する西館は建て替が必須として最低1億円は必要とのことでした。当然建設後半世紀も過ぎているので、電気・ガス・水道などのインフラの老朽化が表面化してきました。当時の水道管は鉄管なので鉄サビで配管が詰まることが多く、電気製品も多くなり電気容量が足らなくなって来ていました。

そこで HdB の将来計画を立ち上げ検討を始めました。理事会・評議員会・学寮運営委員会の諸委員をも含めた「拡大役員会」を開催し、HdB の存在価値をも含めた将来計画について議論を重ねてきました。理事長就任後、阪神淡路大震災で被害を受けた西館を建て直すための積み立てを開始していたのが 3,000 万円ほどありました。しかし本館の耐震・補修もするとすれば、全然資金が足りません。そこで、資金集めのために公的支援制度を探しましたが、全て無くなっていました。それまで留学生宿舎に援助していた(財)日本国際教育協会は独立行政法人日本学生支援機構に吸収され「留学生宿舎建設奨励事業」は 2009 年度に廃止されていました。京都府も京都市も留学生寮の建物の補助制度は無くなっていましたし、日本財団も留学生寮への補助金制度は

無くなっていました。更に悪いことには、HdBの建物が建てられている土地は借地ですから、土地を担保に融資は受けられません。結局、民間からの寄附に頼るしかないことになります。卒寮生(OM)達の応援や京都の会社、ロータリークラブ、ライオンズクラブ等の他、一般市民にお願いせざるを得ません。

HdB は維持する価値があるか

HdB が建設された当時の冷戦は終わりましたが極端な「多極化」が進む中で、9.11のテロ勃発、その後のパリやベルギーなどでの大規模テロ、民族・宗教にまつわる対立の表面化、更には「グローバル化」と「貧富の格差」の拡大と共に、国際世界は反グローバル化、自国優先主義やポピュラリズムに揺れ動きながら大きく変動を続けています。設立以来半世紀が過ぎましたが、人種・文化・宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「邂逅・出会い」を重視して、「共同の生」を掲げて活動を続けている HdBの存在価値は、従来にも増して、ますます大きくなっていると感じています。

留学生寮 HdB の特徴を数え上げると多々あります。①1965 年に外国の主導で設立された京都初の留学生寮であります。②日本人と留学生とが同等の権利で入居している日本初の「混住型」の留学生寮であります。しかも京都に在住する大学生は皆応募資格あります。③留学生の入寮制限として1つの国から3名までとしているので、常に10ヶ国以上の留学生が混住しています。そして常に10名の日本人は確保され、男女比は1:1であります。④ハウスペアレント(住み込みチューター)が学生と一緒に生活し、指導・アドバイスをしています。⑤台所やトイレ・シャワー等を共用し、必然的に寮生同士の「出会」を助ける寄宿舎形式を取っています。⑥コモンミール(食事会)、国際食べ物祭り、セミナー、感謝祭等の行事を定期的に行い、「食」を通じたレジデントと外部の住民と交流活動を行っています。⑦学生の代表とハウスペアレントと一緒に形成するチームという自治組織をもち、種々の仕事を分担して共同生活をしています。⑧民営故に寮生活の「理念・目標(principle and purpose)」を掲げ、人間理解・人間形成の場として運営がされているユニークな特徴を持つ留学生寮であると自負しています。

現在日本には30万人以上もの留学生が滞在しています。彼ら留学生に単なる宿舎を提供するだけでは、日本人学生にとっても留学生にとっても、非常に残念であると思っています。その9割がアジアからの留学生です。明治以来急速な近代化に成功しながら、古い慣習や文化も維持している不思議な国、日本に憧れて、日本を選び学びにきた留学生を「国際的な人間教育の協力者」として位置づけ、日本の学生達との共同生活を通じて国際的理解と友愛を培い深める「人間理解・人間形成の場」として、更には「世界平和を築く人材養成の場」として機能させている留学生寮は日本広しといえども、当学寮 HdB だけである思っています。

募金活動の開始と募金活動の見直しと工事の時期について

建て替えには、規模にもよりますが、5億円~10億円は必要と判明しました。しかし第二次耐震審査(2016)で本館は1階の一部の柱と壁の耐震補強だけで十分であり、その補修をすれば後半世紀は大丈夫という結果でした。そこで建て替ではなく本館の耐震補強とインフラの改修の対応で、この危機が乗り越えられることが判明しました。本館の耐震・改修費用は約1.5億円、西館の建替は約1億円で、総額約2.5億円は必要であるという見積もりが出て、募金活動を開始しました。

再建した暁には HdB を、①多文化共生の推進拠点化として、例えば宗教間・異文化間対話の実践をしたいと考えています。また②国際連携のお手伝いとしては、留学生・地場企業・滞京研究者の交流の場を作りたいと考えています。更に③コミュニティの防災拠点として、大地震・自然災害に備えた外国人向けの避難情報の伝達などを新たな目玉として創って行きたいと考えています。このように考えて総額 2.5 億円の募金活動が立ち上がりました(2017.6~)。

募金活動目標: 総額約2.5億円

募金委員会顧問:長尾真(元京大総長、京都大学名誉教授、

元国立国会図書館長、文化勲章受章者)、立石義男(京都商工会議所 会頭、オムロン株式会社名誉会長)

- 1. 募金委員会の立ち上げ: 委員長: 平野克己評議員
- 2. 目標募金総額: 2.5 億円
- 3. 京都商工会議所の代表的な企業 100 社にお願い
- 4. 京都仏教会にお願い:金閣寺・銀閣寺・清水寺の募金箱設置
- 5. クラウドファンディング: 朝日新聞 A-PORT
- 6. OM の人達への呼びかけ

7. マスコミへの協力取材: NHK、 京都新聞、朝日新聞、毎日新聞、中国新聞 しかし約2年間の募金活動の成果は非常に残念なことに、目標金額の1/10という結 果でした。

1. 約1年半の募金活動による寄付金受付総額 (2019年3月末時点)

個人寄附(OM):14,803,338円(遺贈を含む)(OMとは元寮生)

個人寄附: 4,787,000 円 企業・団体: 3,650,000 円 合 計: 23,240,338 円

2. HdB が保有していて建築使える費用総額は約4千万円

この結果を踏まえて、工事見直しと寄附金総額の変更することにしました。西館再建案を切り離し、寮生の生命を守る本館の耐震対策と最低限の老朽化対策工事に絞り、総額を9千万円に縮小した本館工事計画に変更しました。しかし手持ちの金額4千万と募金2千万円の合計6千万円しかなく、3千万円不足していることになります。この3千万円を新募金目標額とした新募金趣意書を作成し募金活動を再開しました

(2019/2/29)。そして耐震・改修工事は、2020年4月から8月までの5ヶ月間に行い、その間は学生達も含めて全員退出し、本館を閉鎖して工事をする予定にしています。

追記:上記までが、この6月に講演会でお話しをした内容です。しかし2019年11月に2020年4月からの工事に向けて、3社からの工事の見積もりを取った結果に愕然としています。予定額である8千万円が3倍から5倍以上に値上がりしていることが判明したのです。オリンピックや日本列島を襲った台風や震災被害で人件費も物資も値上がりをしていました。現在、寄附して下さった耐震工事だけでも先にしておき、その他は一年延ばすか、全ての工事を一年延期するかの岐路に立たされています。一年後にも値下がりが無い場合には、本法人を預かる責任者として何をなすべきか、当法人の解散・合併などの最悪の事態をも視野に入れて検討しているところです。

京都新聞 2019.5.30 掲載記事



【HdB 設立の精神】

共同の生について(京都「国際学生の家」献堂式講演)

ヴェールナー・コーラー (神学博士)

I

この家の献堂開館式がたまたまボンヘッフアー追悼記念日と同日に行われることを、わたくしはとくに嬉しく思います。1945年4月のあの数日のことについて申しあげることをお許し下さい。デイートリヒ・ボンヘッフアーは、ヒトラー政府による他の重要被投獄者たちと共に、緊迫しつつあるアメリカ軍による解放を避けるために、ブッフェンヴェルデ収容所から連れ出されました。囚人たちはある森のただ中に泊められました。かれらの中には、ロシア人ココーリンの姿もありました。日曜日になって、ボンヘッフアーは被投獄者中の有力者から、キリスト教の礼拝を司式することを要請されました。かれはこれを断わりました。そして、右のロシア人がこの礼拝を行うことを納得したとき、はじめてかれはこれを執行したのです。かれのこの態度は、われわれの新らしい学生の家との関連において深い意味を持っています。この礼拝の後まもなく、ボンヘッフアーは他の有力な囚人たちから引き離されてプロッセンビュルク(バイエルン)に連行されました。4月9日早暁、そこで彼は処刑されたのです。イギリスの航空隊員ペイン・ペストは、かれの最後の言葉をこう伝えています。「これで終りだ。しかしわたしには生の始まりだ」と。

このボンヘッフアーの最後の言葉は、1 つの新らしい生の理解を秘めています。この家との関連において、新らしい生の理解と自由と共同の生への出発の意味をしばらく素描してみたいと存じます。この家における共同の生に開しては新らしい生の理解が緊要であると申しますと、何か挑戦的に響くかも知れません。現代の人生観にはじつに多種多様なものがありますが、せんじつめると 2 つの基本的なタイプに分けられると思います。すなわち、伝統的 - 宗教的タイプと無批判的 - 科学的タイプがそれであります。ほとんどすべての宗教は、われわれの現存在の被限定性の背後に彼岸的生の存在することを主張します。このことに関してわたくしは、種々の仏教宗派の因縁理解や仏教的また神道的民間信仰における死者礼拝について思い起します。マルクシズムがキリスト教を非難して、それが彼岸的生を説くことによって人間を愚劣にすると責めたのは至当であります。たしかにわれわれキリスト者は永遠の生命を強調する余り、此岸的生を自ら等閑に付する特殊な傾向を幾百年にもわたりて示してきました。かってあるアフリカ人がわたくし申しました。「われわれのところへやってきた

宣教師が言った。『上にあるものを見よ』と。われわれが上を見ている間に、ヨーロ ッパ人はわれわれが地上に持っていたものを掠め去った」。伝統的宗教的生理解は字 のように特色づけることができるでしょう。すなわち、それはよりよき生を死後に期 待して現在の生を正当に評価しない。この世の生における多くのものを断念し、地上 のすべての不正を戦うことなく耐え忍ぶものだと。しかし、この伝統的宗教的生理解 に劣らず無批判的科学的生理解もまた同様にナイーヴであります。これは、自然科学 的に確証できるもののみが信じられ得るとし、死後の生のごときは迷信にすぎぬと考 えます。これら宗教的また非宗教的見解は、どちらも結局は無批判的である故にナイ ーヴであります。前者は伝統的諸宗教に盲目的に寄りかかっており、後者は自然科学 のその時々の立場に依存しています。われわれは、これら二つの生理解にたいして同 時に然りと否とを申します。伝統的宗教的世界像批判にたいしては然りであります。 死後のパラダイス的生の諸表象が大部分の宗教に共通してみられることをわれわれは 承知していますが、しかしこれらの表象をそのまま受けいれることはもはや不可能で あります。同様に、われわれの批判はあらゆる形式の近代的・偽似科学的希望にたい しても向けられます。われわれは、地上にパラダイスを、理想的人間社会を実現しう るとは考えません。伝統的宗教的希望のみでなく、非宗教的希望もまた鋭利な批判の 前に結局は堪え得ないことを、われわれは知っているのです。しかし、いままさにこ の批判に立ちつつ将来的生にたいする一層強力な然りをじつは申さねばなりません。 諸宗教の持っている古い諸表象は、すべて誤りであるわけではありません。それは、 現代の諸民族のマルクシズム的、また民族主義的希望においてこれらの諸表象が生き 続けている事実を示しているのです。古い宗教的期待は、近代的世俗的期待と同様、 一つの共通の根拠を持っています。この根拠は、いまはわれわれにはあるいはただ予 感されうるのみであるかも知れませんが、重要なことは、われわれの持つ希望の根拠 に基いてそれはじつは見出されうるものだ、ということであります。それは、種々異 なった素姓の人間との生きた対決において与えられるものなのです。この家では、古 い伝統的宗教的あるいは世俗的期待を持った人間と、激烈な批判の前にすべての希望 を衷失した人間とが、ボンヘッフアーのごとく純粋で生きた希望を抱いて死に得る人 間と共に共同の生を営なむのです。種々の希望と期待とが不安と怖れと対決するとこ ろに、新らしい生の理解が起り得るのです。かくて明らかなことは、この家において は伝統的宗教的生理解と非宗教的生理解とが二つながら認められ、また反面どちらも 問われているということであります。

われわれは、われわれのうちでユートピア的希望に生きている人々を認めますが、 同時にその人々の希望の根拠が何であるかを共同の生の中で問うて行くのです。この 家の基礎はユートピア的、宗教的、哲学的希望のいずれでもありません。ユートピア 的希望の意味するところは、共同の生が平和と正義の理想状況の人間社会における実 現であるということです。このような目的設定のもとでは、この目的達成のためにわ れわれは(つねにイデオロギーに従って)すべてをなさねばなりません。この家のメ ンバーにとっては、このことは、お互いの聞につねに平和を保ち、同志的正義を実現 せねばならぬことを意味します。そうなれば、この家はキリスト教的家か、仏教的家 かあるいは共産主義的家となってしまうわけです。そのような家は世上よくあります。 このような家では、委員会とか管理者などが学問をする若者たちをかれらの目的に導 くべく、宗教的な、あるいはイデオロギー的な洗脳的教育を行うのです。たぶん、忠 実な伝統的仏教徒、キリスト者、あるいは共産主義者というのが、そのような共同の 生の収穫でありましょう。

もちろん、これ以外にも可能性は存在します。といっても結局は不可能に終るのですが。いわゆる中立的な無計画的な共同の生というものを考えてみましょう。ここでは、宗教的、哲学的、政治的な誤った希望はすべて棄てられます。われわれすべてにとって好ましい小さな希望が大切にされます。顕著な成果を約束する研究とか、職業における立派な経歴が望まれるでしょう。あるいは美しい乙女や、しばらく後には楽しい家庭などが希望の内容であるかも知れません。約言すれば、ひとは、健康な他の人々のように、仲間同志での喜ばしい現存在を希望するのです。このような希望の現実化は失敗に終らせたくないものです。しかし、しばしばこれらの「小さな希望」を泥にまみれさせたのは、宗教的あるいは政治的狂信者たちの恥ずべき仕わざでありました。かれらはやって来てこう言います。「おまえは教会のために生きねばならぬ」、あるいは「おまえは祖国のために生きるべきだ」、またあるいは「おまえは世界革命のために死なねばならぬ」と。

われわれは、宗教者や思想家たちのユートピア的希望にたいすると同様に、無計画 者たちの小希望にたいしても然りと否とを申します。これらの希望を、われわれはい わば文字通り受け入れます。この家では、イデオロギーに基づいて考え、宗教的に型 にはめられ、市民的小希望に自己を限定している人々を、すべての希望を持たずに立 派に生きる人のごとく生活せしめるのです。われわれは、これらの人々と共に、あな たがたの希望や幻滅をも受け入れましょう。この点で重要なことは、われわれの然り と否との決定は、われわれが人々とその性向とを実際に支えまた忍ぶことによってな される、ということであります。諸種の期待は、そこから何か新しいものが生れ出る ような解決に導かれねばならないのです。この新しいものは、たんに市民的なもので も、イデオロギー的、マルクレズム的なものでも、伝統的キリスト教的なものでも、 また仏教的なものでもありません。この新しいものは、これら雑多な人間的希望や幻 滅の調和でもありません。また種々の神学的、哲学的期待の混合でもないのです。こ の新しいものは、通常の生の傾向の逆転であり、われわれの考え方の転換を要求する ものであります。それゆえ、この共同の生について、相対立する概念によって論じ、 また然りと否とを同時に語ることは正しいことなのであります。従って皆さんも、こ の生活が計画的・非計画的の相違の彼方で新しい意味において共同の生であることを 了解されるとき、それが計画的であると共に非計画的であると、同時に言うことができるでありましょう。

 Π

さて、生の理解の逆転について、共同の生の自由の概念との関連で考えてみましょ う。この家の生活は、通常の意味で自由でしょうか。メンバーは相互に何の義務も負 わないのでしょうか。ここでの生活は、他にいくらもある家や寮と同様の意味で、た んに平均的近代的学生生活の模範のごときものでしょうか。 否! あるいは、学生を自 己のイメージに従って教育しようとする教授たちの監督の下に行われるものでしょう か。もちろん、こういう考え方にも一理はあります。多くの学生はその生の方向を見 失っています。かれらはいずれかのイデオロギーに身を委ね、政治的諸勢力の道具と されてしまっています。他の学生たちは甘い生活の虜となって、人間社会におけるか れらの将来の責任を忘却してしまうのです。前者、あるいは後者のごとき学生たちを この美しい家で教育することは、はたして妥当でしょうか。否!学生たちはかれらの 甘い生活を嬉しそうに、あるいは悲しそうに営むべきでしょうか。また、実存主義者、 あるいは革命主義者になるべきでしょうか。この設問の立てかたは正しくありません。 この問いは、平均的な、不分明な生の理解と自由の理解から発せられる問いだからで す。共同の生の自由は、人間が相互的な教育計画をもって共に生活するところにも、 またあらゆる計画、あらゆる目的、あらゆる訓練から遠ざかるところにも成立はしま せん。この自由は、人を出遭いに導く開放性の中に現われ来るものです。この自由と 共に、よき共同の生は立ちもし倒れもいたします。それゆえ、この自由から、この自 由において、またこの自由のために生きることが喫緊のことなのであります。これこ そが、われわれがつねに新らしく立ち迎わねばならぬ課題なのであります。

この家は、この自由から、またこの自由のために建てられたものです。この家が自由から建てられたことは、1つの大胆な主張です。日本におけるこの国際的な学生の家の実現を目ざして責任を取り、またそのために活動して来た大小それぞれの団体においては、部分的には相反する生の理解に立つ人々が参画しています。ある人々はキリスト者であり、他はそうではありません。この家の実現のために力を尽し、また将来そうするであろう多くの人々は、伝統的なキリスト教と共に歩むことはできないでしょう。他の人々は、この家が教会的サークルの期待に応えそうにないことを怖れるに違いありません。しかし、あらゆる形の期待と怖れのうちで、これらの人々は共に努力をして来たのであります。この人々は、新らしい異なったものを確かにするために、そのような期待と怖れから自らを解放する決意をした人々なのであります。

わたくしは5年半前に日本を去ってスイスに帰り、共同の生の新らしい理解を提唱 し始めたのでしたが、その時日本における皆さんと同様のことを経験いたしました。 教会的サークルの中からこういう声が発せられました。「あなたのやろうとしている

ことは、あまりに非キリスト教的だ。われわれの後援できる事業は、純粋にキリスト 教的なものに限られるべきだ」と。これにたいして教会外からの声は申しました。「こ の事業はあまりにキリスト教的だ。われわれは中立的な事柄でなければ後援しない」 と。しかし他方、あらゆる種類の人々、すなわち教会人、非教会人、プロテスタント 信者、カトリック信者、知識人、庶民の多くは申しました。「こういうことこそわれ われの望んでいたことだ!」と。このような状況の中で「スイス『出遭いの家 Haus der Begegnung』協会」が設立されたのでした。この設立に先立つ準備的段階においては 「スイス東亜伝道会 Scbweizerioche Ostasien mission」の代表的な人々が力を尽しまし た。しかし、新らしく設立された協会の内部においても、幾多の困難な問題が解決さ れねばなりませんでした。会員中に、幾人かのきわめて強固な道徳主義的足場に拠る 人々がいたのです。かれらは、この「出遭いの家」の中に、かれら自身の運動の目標 を達成する可能性を見出したのでした。何回となく重ねられた会談の結果、われわれ の進むべき道は残念ながら二つに分たれねばなりませんでした。われわれの見解では、 道徳主義的立場の人々も共同の事柄に関して協力して貰えると思っておりました。し かし道徳主義的立場の代表者たちはこれに反して、かれらのイデオロギーを取る者と でなければ共に働くことはできないと確信していたのです。この対決、またその他の 諸事件を通して明らかになったことは、共同の生の本質は、われわれが異なる考え方 の人々、さらに言うならまさに敵対者と共に生活し、働かねばならぬところにこそ成 立するという事実でありました。

わたくしは、この家が自由から生い立ったことをお話いたしました。本日皆さんがこの献堂開館式に御列席下さっていることは、そのことの実証であります。素姓も人生の道もその目標も異なる男女めいめいが、自由の実現のために決意を固めたわけです。同じことはスイスでも起りました。教会的サークル、スイス東亜伝道会、スイス福音教会救援事業団 Das Hi し fswerk oer evange し ischen Kirchen der Schweiz それのみならず教会外あるいは他教派の信者を含む多数の個人が、この事業を後援すべく決意を固めたのでした。この実現を可能ならしめ得た事実の大きな部分をわれわれは、ここに列席している一人の人物に負うています。かれは、この事業を全スイス的運動である「兄弟たちにパンを Brot fur Bruoer」の固有の任務として取りあげてくれた人物なのであります。

この家は、自由から、そして自由のために建てられました。自由はわれわれの課題でもあります。ドイツ語で「課題 Aufgabe」という概念は二重の意味を持っています。それはまず、何ものかを止揚する、与えてしまう、もはやそれに固執しない、という意味を持っています。他方、何ものかを引っつかむ、着手する、実現する、と意味でもあります。このような二重の意味で、自由はわれわれの課題なのであります。われわれは、学生または教師として課題の対極性において実存せねばなりません。各人はそれぞれ、自己があるところのものである自由を所有し、かつ保持するのです。各人

はそれぞれ、己が責任を持つ事柄に対処すべきであります。 もっとも大切なことは、 この家に住もうとしている人はすべて、自己にとって重要な事柄を言葉に言い表わす ことです。各人は自己のあるがままに在らねばなりません。そしてこのことに努力す べきであります。これが自由であります。そしてこれはさらに、各人が他者をも傾聴 せしめうるような努力をなすことをも意味いたします。とくに要請される態度は、話 し合い、つまり相互的な傾聴と語りかけの態度であります。このことに関して強調さ れる必要のあるのは、不自由とは何かということであります。それは、人があるとこ ろのものを言葉に言い表わさぬこと、そして他者の言葉に傾聴せぬことであります。 この家のメンバーに、このような不自由の中で妨げられることなく生活できるような ことが許されてはなりません。 同時にまた第二のことが要請されます。真実の傾聴、 つまり傾聴への解放ということは、自己の「立脚点」のつねに新らたな放棄の準備を 要請するものです。純粋な話し合いは、われわれが耳でのみ聞く習慣を棄てて相互に 自己を開くと共に、はじめて可能となるものです。このことは純粋な共同の生のダイ ナミズムを許すでしょう。各人はつねに撤退と突進の途上にあるわけです。われわれ は、スイス人はスイス人として、日本人は日本人としてまさしくそのまま留まるので す。各人は自己の素姓を肯定すべきであります。もし誰かがその素姓を否認しようと する場合は、それは些か不健全です。日本人であり、アメリカ人であり、等々という ことは、いいことではありませんか。なぜ、われわれは己れのきわめて多様な、そし てしばしばきわ立った伝統にたいして然りを言わねばならぬのでしょうか。また反対 に、なぜ否を言わねばならぬのでしょうか。わたくしはスイス人として、われわれや わたくし自身にたいしてのみならず、日本人、アメリカ人、ドイツ人等々にたいして も同様に腹を立てます。なぜわれわれは自己にたいして喜んだり怒ったりしてはなら ぬのでしょうか。われわれはこの然りと否の中において相互的に生きるべきであるし、 また生きることができるのです。また、そこにこそ自由、すなわち相互的挑発、理解、 誤解の中に課題としての自由を認識すべきであるし、またそうすることができるので あります。

 \mathbf{III}

このように、自由は共同の止揚への可能件として成り立っているものです。それは、われわれすべてがそこに坐っている牢獄からの突進の好蔑として成立しています。そのような自由への勇気を、われわれは前提と考えています。この家において、相互の対決を試みることなく共に住むということは許されるべきことではありません。このことにたいする生活設計においては、時空の範ちゅうは避けるべきでありましょう。われわれは相互にすれ違いつつ生きるべきではありません。前提とすべきことは、われわれがすでに何らかのイデオロギーや宗教や人生理想を追求するのではなく、真理をこそ追求する態勢にあるということであります。われわれは、真理はすべてを貫いていることを信じています。それゆえ、わたくしは、神についての聖書の証言が誤りであることを認識したとすれば、そのときは共産主義者、仏教者、神道者、あるいは

不可知論者にいつでもなる用意ができているのです。わたくしは、キリスト教、教会、 そして聖書についての批判をつねに新らしく真剣に取りあげょうと努めています。わ たくしは何よりも、異る考え方と生き方をする人々を理解しようとする努力を続けた く思っています。しかしまた、わたくしは沈黙することはしないつもりです。みずか ら真理と信じることを、わたくしは口に言い表わして参ります。わたくしは、「道で あり真理であり生命である」イエスを指し示し行くでしょう。イエスは、われわれす べてを唯一の家族として見ていられる方、すなわち父なる神に向って呼びかけました。 この父に直面するとき、わたくしはこの共同の生を、全人類の輝かしい永遠の未来の ための止揚として理解するのです。人間の生の意味は共同の生においてその結論に達 すると、わたくしは考えます。われわれの行うあらゆる決定は、われわれが互いにあ い対し、またこの父にあい対するところに成立するものと信じます。しかしながら、 一切のことはこうして真であり善であると断定される、というわけではありません。 何が真であり善であるかは、それにたいしてわれわれの眼が開かれるときにのみ見出 されることです。光があり闇があります。善い生活も悪い生活もあります。愛があれ ば憎しみも存在します。平和と戦争、正義と不正が存在しています。真理にあい対す ること、自由への道につくことは一つの決断を意味します。共同の生は、従ってわれ われの現存在の表面における調和的共存を意味するものではないのです。共同の生は、 つねに新らたな緊張と対立の保持であり、あらゆる人間的無意味と意味の戦場の生で あり、われわれにけっして共通せぬものの保持であり、われわれの共通性、そしてわ れわれの生活そのものを破壊しようとするものを耐え忍ぶことであります。そして共 同の生は、この解決にさいしては、人間の共同社会の決定のための戦い、すなわちお 互いのための、またわれわれの将来のための現存在を獲得すべき戦いにおいてつねに その途上にあるものなのであります。 (訳責 遠藤 彰)

この論文は献堂式 (1965 年 4 月 10 日) での創設者故ヴェールナー・コーラー博士の「共同の生」についての講演記録です。本館の耐震・補修工事に先立ち、2019 年 12 月 5 日に地下倉庫で創設時から眠る書類を整理していて、内海が見つけたもので、Principle and Purpose に凝集された文章を補う貴重なものと判断して、ここに掲載します。少し読みづらいところがありますが、コーラー博士の言わんとする意図は十分に伝わるかと思います。また、本学寮の存続の危機にある時期に見つかったことも意義深いかと思っています。翻訳者は故遠藤彰第 3 代理事長です。

内海博司

設立経過概要

昭和30年7月頃、スイス東アジア・ミッション代表として来日されたW・コーラー博士 (Dr W Kohler) は、同ミッション敷地内に平家建一棟を日本人学生の寮として移築し、京都「国際学生の家」建設の構想をもつた。ついで昭和34年秋、同博士はスイス帰国を前に、この構想を京都在住の有志に伝えその具体化をはかるため準備有志会を開催した。

昭和36年1月、有志会は当時生活科学研究所理事野間正秋氏にその組織の法的整備につき援助方を依頼し、一方、建設発起人会開催準備のため約10回の会合を開催した。 当時の有志会の主なるメンバー(敬称略・ABC順)は

F・ドゥマムート 後藤邦夫 飯 峯明 今井 潔 稲垣 博 竹中正雄 田中久雄 遠山光郎 O・ペニンガー N・サーバー 内田伊三雄 の諸氏であつた。

昭和36年11月19日、ミヤコホテルにおいて第一回建設発起人の集いを開催し、湯 浅八郎氏を議長に選び、席上、コーラー博士が帰国後同じ主旨によつてチューリッヒ 市に設立した「国際学生の家」(Haus der Begegnung Zurich)委員会より、6,000ドルの 寄附申込みの入電があつた旨の発表が行なわれた。なお、出席者氏名(敬称略・ABC 順)は

有賀鉄太郎、F・ドゥマムート、 遠藤 彰、後藤邦夫、藤森庚子郎 掘江保蔵、飯 峯明、稲垣 博、伊藤規矩治、今井 潔、覚前睦夫 A・ラブ、松本仁助、中島 誠、奈良 伝、鳴海 元、野間正秋 大饗 茂、岡島松太郎、岡本清一、奥村竜三、大山 寛、O・ペニンガー相良惟一、桜田一郎、N・サーバー、田中久雄、高山義三、竹中正雄 徳永清行、遠山光郎、宇野勇次、内田伊三雄、渡辺得之助、湯浅八郎 H・ミュラーの諸氏であつた。

昭和37年3月24日、生活科学研究所において第2回の建設発起人の集いを開催し、第一回設立発起人の集いの出席者に K・G グナチィラカ、金関 毅、松村克己、大塚節治の四氏を加えた。

出席者の中より左の十五名の実行委員 (敬称略・ABC順) 有賀鉄太郎、F・ドゥマムート、遠藤 彰、堀江保蔵、稲垣博、伊藤 規矩治、野間正秋、奥村竜三、大山 寛、O・ペニンガー、相良惟一 桜田一郎、湯浅八郎、青年商工会議所代表(1名) を選出し、爾来生産開発科学研究所(生活科学研究所の所名変更による)において実行委員会を10回開催し、昭和37年11月24日実行委員会作成の原案により設立発起人による財団法人設立総会を開催した。

昭和38年1月初め、スイス東アジア・ミッション監事A・ベンチガー氏来日し、本事業のスイスにおける後援態勢を報告し、本邦における事業進捗方法など懇談した。

昭和 38 年 4 月中旬、さらにスイス東アジア・ミッション会長 W・クーン氏が来日し、当時、ミッションが所有していた京都市左京区聖護院東町の土地約 433 坪の地上権の貸与を確約され、ついで同年 6 月同氏よりスイス国世界奉仕運動 Brot fur Bruder 及びその他の団体から 67 万スイスフラン (邦貨約 5,560 万円) の寄附がスイス東アジア・ミッショツを通じて行なわれる旨の発表があつた。

昭和38年10月8日、書類整備の上文部大臣に財団法人設立の許可申請を行い、昭和38年12月16日付許可指令書を受領し、許可の日付を以て財団法人を設立すると同時に寄附行為記載により左記のもの (敬称略・ABC順)

(理事長) 湯浅 八郎

石川 芳次郎

遠藤 彰

宮井 恭

フリッツ・ドウマムート 野間 正秋

稲垣 博

が理事に就任した。

昭和38年12月28日、理事会において理事稲垣博氏を理事長代理に互選した。

昭和39年1月16日、理事登記終了と同時に臨時事務組織(総務部長平尾 博)を 完了し、爾来毎月二回理事会を開催し、今日に至る。

この記録も、2019 年 12 月 5 日に地下倉庫で創設時から眠る書類を整理していて、 内海が見つけたもので、設立当初の役員等の記録になると思い、ここに掲載しました。 誰が期した記録か書かれていませんが、当時の事務を担当した平尾氏かと思います。

【OM 便り】

モンゴル見聞録-日本式教育モデルの導入-

村田 翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

昨年11月に「国際教育研究フォーラム、秋季例会」を名古屋大学で行った時に、モンゴルの教育研究者が3名出席し発表してくれた。彼らは、国立モンゴル大学教育学部の教官2名と国立モンゴル教育大学の教官1名であった。その国立モンゴル大学から呼びかけがあり、今年の9月19日~20日に同大学において同国際フォーラム、秋季例会が開催された。日本から私を含めて6名の研究者が参加発表した。

モンゴルは寒いと聞いていたが、ウランバートルに着くと摂氏 15 度、夜には 0 度となった。京都では、まだ 35 度の暑さが続いていた。ホテルで夜に 10 度位になるのに暖房は入らなかった。モンゴルのホテルでは、10 月にならないと暖房は入れないとのことで、特別に毛布を注文して寒さをしのいだ。

19日のフォーラム会場は大講義室で、参加者は学生も含め180人にも及んだ。日本で行うときは、普通、20人足らず、海外の国立大連外国語大学(中国)や国立嘉義大学(台湾)で行った時も50人程度であった。発表者には日本人に加え中国人3名、アメリカ人2名も加わった。こうした規模の大きい国際フォーラムは、国立モンゴル大学の文科系では初めてとのことで、大学挙げての歓迎になったようだ。同時通訳、特別講義室さらに、コーヒー、ティー、ケーキのサービスもあった。同大学にとってこのフォーラムは、規模の大きい国際研究会の契機になったようである。



国際フォーラムの開会式で馬頭琴演奏をしてくれた国立モンゴル大学生

発表内容では、私は京都の美山町のケースを中心に小規模小・中学校の統合問題を論じた。モンゴルでも地方における小規模学校の統合が問題のようでいくつもの質問があった。その他、日本側から、日本のICT教育、教員の専門性開発、教員研修のあり方、アフリカ・ケニアの難民教育、コロンビアの自主学習などの発表があった。モンゴルの研究者からは、教育研究方法、モンゴルのIT学習、児童生徒の評価方法、化学カリキュラムの開発、モンゴルの言語学習・教員研修、日本におけるモンゴル留学生の目的志向等の発表があった。アメリカ研究者(Western Washington Univ.)は、「モンゴルの学校環境評価」、中国人研究者(モンゴル自治区教育大学)は「モンゴルの化学カリキュラムの特色」について論じた。諸発表の後、多くの質疑が交わされた。

フォーラム終了した翌日に、日本人研究者 6名が自動車でウランバートル郊外の大草原を案内してもらった。近くにある大きな山(高さ 100~200 メートル)を1日かけて1周するというコースであった。山といっても木が生えてなくて芝生のような小さい草はみられた。ウランバートルの町を流れる河や池の側に葉がすでに紅葉した木が伸びていた。所々にゲルで生活する遊牧民と馬、羊が群れを成していた。ゲルは移動するのに便利な家である。そのゲルを見るのは初めてであった。最近のものは、あまり大きくないゲルを3つ合わせて生活していて、それぞれ、居間、料理室・食堂、寝室に分かれていた。ゲルが集まっているある部落で、羊肉のバーベキューを御馳走になった。大きな窯に水と肉に焼いた熱い石を入れ蒸かす方法であった。蓋をした後30分余りして開けると大変おいしい羊肉料理が出来上がり、しかも羊の嫌な臭いのしないのが不思議であった。

その部落から、小学校まで約5キロメートルあるとのことで、どのようにして通学するのか聞いてみた。すると馬を利用するとのことだった。子ども達は3歳から乗馬の練習をするので小学生は大変上手で心配いらないそうだ。遊牧民の伝統的生活の一端を知らされた。チンギスハーンの大きな銅像(高さ40メートル)のある場所は観光地になっていた。そこで、2こぶラクダに初めて乗った。タイで乗ったことのある象の背中よりも揺れた。

フォーラムの前日 18 日には、モンゴルの高等専門学校や新モンゴル学園を訪問させていただいた。新モンゴル高専技術学校や IET 高専は、技術者・技能者養成のため重視され比較的新しく設立されたものである。日本の高専との交流を盛んに行っているとのことであった。特に、苫小牧高専、東京都立高専、福井高専へは、生徒の留学や教員の研修派遣も盛んに行っていた。カリキュラムや施設設備についてもそれら高専のものを模範にしていた。

新モンゴル学園は、日本の学校教育をモデルにして 2000 年に創設された。当初、高等学校のみであったが、その後、2004 年に中学校、2008 年に小学校、

2016年に幼稚園が開設された。いわゆる小中高一貫校で生徒数は約1500人である。日本の学校教育の特色に関し主に採用しているのは、次の6項目であった。

- ① 知育のみならず徳育、体育を含めた全人教育を目指す。
- ② 学校の校舎に入るときは、上履きに履き替える。

- ③制服を着用する。
- ④ 給食、学校掃除を行う。その際、児童生徒は手伝いをする。
- ⑤ 部活動を取り入れる。
- ⑥ 毎月1回の学校行事を開催する。林間学校、野外活動にも力を入れている。

元横綱の日馬富士(ダワーニャム・ビャンバドルジ氏)は自ら出資して、2018年9月にウランバートルにやはり日本式の学校「新モンゴル日馬富士学園」を設立した。 この学校は、前述の新モンゴル学園の分校ということで、類似の教育を行っている。

近年、日本の教育は国際的に注目され、例えば、教員の自主的な研修形態である授業研究は"Lesson Study"として、多くの開発途上国のみならずアメリカ、イギリスなどの先進国でも導入されるようになった。また、前述の部活動、学校行事それにホームルームなどは、特別教育活動と呼ばれてきた。そうした活動も"Tokkatsu"としてモンゴルのみならず、多くの国々で注目され採用されるようになってきている。

「京都国際学生の家」は、外国人留学生と日本人が共生するユニークな留学生寮であるが、これも日本的な国際寮としてモデルにならないであろうか。かつて、コーラー先生の提案でベルリンに同様な留学生寮が設立されたが長続きしなかったと聞いている。考え方、思想信条や生活習慣の異なる人々が共生する国際寮は、世界が狭くなり文化の相違する方々が遭遇し共同生活せざるを得ない現代社会の縮図でもある。国内のみならず国際社会に向けても留学生寮のモデルとして提供することをもっと考えてもよいと思う。



質問してくれたモンゴル高専の学生たち



ゲルが建つ大草原風景



ラクダに乗る体験



新モンゴル学園の先生方と

【レジデントより】

HdB での1年半

Shin Mingyeong (シン・ミンギョン) (韓国) 京都大学

私は京都大学農学部 4 回生で、食料・環境経済学科-地域環境経済学分野に所属している。HdBには 2018 年 10 月に入ってきて 2019 年 11 月末の現時点では 1 年間の時間を過ごし、今学期の終わりで退寮する。

入寮してから HdB が 2019 年の秋から工事に入る予定だということが分かり、心配になった。だが、それが 2020 年春、2020 年秋以降…とどんどん遠くの話になった。 2020 年3 月卒業で京都から離れる私にとっては工事が遅くなるのは良かったとホットするのだ。でも、HdB が無事持続できるようには工事が必要なので、来年までは目標予算が集められて工事に入ることを望む。いつか将来に京都に来ることがあれば、工事の後変わった HdB の姿がみたい。おそらく短くても 5 年後になるので、その時点のレジデントとは他のつながりがないと思うが、機会があれば HdB の未来のレジデントとも会ってみたい。

私は 2020 年 3 月卒業で、今の時点では卒業式のある日に京都にいるかどうかも不明だ。早かったら 2020 年 2 月中旬にある卒業論文発表会が終わってからすぐ、遅くても 3 月初旬には退寮する。卒論の執筆と発表の準備があるので、今までの 4 回生前期までとは違ってテスト期間が終わっても休めなく、より忙しくなる。卒論発表会の当日までも休みがないので、早く母国の実家に帰って休みたい。温水で洗顔ができて床暖房で温かくきれいなアパートでの生活とお母さんの手料理と母国にいる友達が懐かしい。これらが来日してから私の癒しになっていることだから、卒論が終わったらすぐ帰りたい。韓国も日本と同じく夏は暑くて冬は寒いけれども、日本ほど夏の湿度が高くはなく、基本的に床暖房ができるので冬には家が温かい。

韓国で 2020 年上半期の韓国企業の採用を狙う。金融系、具体的にはソウルにある 資産運用会社に入社することを希望している。職務はまだ決めていないが、毎日日本 語を使うものにはならない。韓国の大手企業の資金が日本から調達されることがある ので、必要によっては日本側とコミュニケーションすることはあると思う。

いい意味で普通の寮

柊木 知(日本) 京都府立大学

2019年6月に初めて開かれたOM会にて、光栄にもスピーチをする機会をいただきました。その際に私が言った一言に優しさのこもった笑顔をたくさん向けてもらいました。

「今でも、HdB での生活が夢なんじゃないかと思います。」

HdBに入って4セメスター目を迎えています。これが私にとって最後のセメスターです。右も左も、英語も分からないまま、突き抜けた1年目と違い、HdBのことを知り、自分の意志により動ける2年目になっているとそれとなく感じています。緊張感や非現実感が程よく抜けている感じがします。HdBという非現実感に浸り、毎日をウキウキワクワク過ごしていたわけですが、ここ最近「この生活が夢だったらどうしよう」と考えなくなったことに気づいたのです。相変わらず毎日のようにロビーに行き、New Resident からは Are you here all the time?と聞かれるまで、ロビーの住人と化しているわけですが、1年目ほどの夢の世界のような感覚ではなくなりました。そして、まさに今日気づいたのです。私はようやく HdBでの友達をひとりひとりの人間として見ることができるようになりました。



慌ただしく突き抜けた日々では、○○人の△△、□□国から来た◇◇という風に、ジャンルに分類していた気がします。もしかしたらその人自身よりも国の印象の方が強かったかもしれません。しかし、今日 Common meal の料理を作りながら音楽を流していると、「この音楽のセンスとってもいい!」と褒めてもらい、カラオケに行こう、クラブに行こうと話が盛り上がり、趣味がとても合うことを知りました。このときに何も国籍なんて気にしていません。ひとりの人と話して、趣味が合うことに気が付いただけです。

HdB は国際寮として、インターナショナルなイベントがたくさんあり、様々な国の人と出会うことができます。しかし、そこにとらわれすぎて、出会う人ひとりひとりをしっかり見ていなかったかもしれないです。国や地域でカテゴライズするのではなく、ひとりひとりとの出会いを大切にし、その人のことを知りたいと強く思いました。そう思うと、今の私には HdB は普通の寮です。ただ人と人が一緒に暮らしている寮です。国籍なんて関係ないのですから。それでも私はここに集まる人たちが大好きで、この寮で暮らしていることを幸せに思います。今晩は、改めて HdB での今までの記憶が蘇り、やっぱりこれが夢だったらどうしようなんて考えてから眠りにつきそうです。

My last year in HdB

Tang Mengjia (湯 夢佳) (中国)

京都造形芸術大学

My name is Tang Mengjia, come from China. I am studying in Kyoto University of art and

design. I moved here last spring. It has been almost two years now. I am very happy to have

such an opportunity to live with friends from all over the world.

I have studied Japanese for three years so far. The first year I studied Japanese at a language

school. I rarely have the chance to chat with a Japanese, so my Japanese was a bit strange.

After coming here, I found that many foreign students speak Japanese very well, especially

Koreans, they are fluent in speaking.

Whether in school or at home, I have to talk with Japanese students in the last two years. My

Japanese ability has improved a lot. Especially writing, after writing a report, I will ask

Japanese students in HdB to help me modify it. I really like the warm hearted, intelligent and

creative students in HdB.

In addition to studying, I also traveled to many places with my friends. For example,

Rokousan, Kinosaki, Biwako, Kobe and Shanghai... I will start work after graduating from

graduate. In the last part of my student years, I feel so happy to have so many wonderful trips

and good memories.

I hope HdB can be renovated as soon as possible. Let more students have a nice time here. If

I can make a lot of money in future, I will try my best to help HdB get better.

52

HdB という場所

中山 貴美子(日本) 京都大学

去年のイヤーブックを読み返してみた。去年も色んなことがあったなと思った。今年は楽しいことばかりでもなくなった。頭を悩ませるようなことや、どうしたらいいかわからないことも増えた。

でも、同時にこの国際寮はいろんな人たちの手で支えられてきたことに気づいた年だったと思う。思いがいっぱい詰まっている寮なんだということにも。

私はやっぱりこの寮を残したい。こんな場所ってなかなかない。私はずっと不思議だ。どうしてこの寮はこんなにも色んな垣根を超えて人と人とを結びつけてくれるのだろう。もしそれが寮それ自体ではなく、寮に住む人たちに代々受け継がれてきたNew Resident への暖かい気持ちなのだとしたら、どんな人も受け入れて包み込んでくれる暖かい雰囲気なのだとしたらそれをどうやって残したらいいのだろう。少し考えすぎなのかもしれない。未来ばかりに目を向けすぎなのかもしれない。だけど、この寮なのだからこんな変なやつがいたっていいのかもしれないと思う。そして、おそらくというか絶対、このようなことを考えている人は一人じゃない。変なやつはいっぱ

いいる。(変なやつとか言って ごめんなさい)

私は今年の春に共に時間を 過ごしてきた人たちとお別れ しなければならない。そう考 えると、やっぱり今も大切に できたらと思う。私はなかな かそれがうまくできないけど、 そんな人たちと笑ってお別れ ができるように、悔いのない 時間を過ごしたい。



と、ここまで書いてきてやっぱりこの寮を残すなんてことは無理なことなのかもしれないとも思う。正直なところ。自分が頑張ってもどうにもならないことなんて山ほどあるし。それでもあがいてみたいと思う。なぜかって。なんとなくです。

First year in HdB

Narumi Hayakawa (日本) 京都女子大学

I have been living in HdB since this April. I have had live in Australia to study English for 7 months. After my studing abroad, I want to talk more foreigners and practice my English so I decided to live here. At first, I was nerves and could not go to the lobby to speak. However, after I joined Hanami, it led me becoming friends with other residents.

Now I am really happy to live in HdB. I think there are mainly three reasons that I really appreciate to be able to spend time in HdB.

Firstly, there are nice friends and people of different nationalities so we can share our different culture, education, politics and so on. In addition, we go to different universities and take different courses. Therefore we can learn a lot of things from the various fields.

Secondly, I think it is good to go to restaurants or some events with anyone who are interested in. When we want to go somewhere else, we feel free to ask our members of LINE group. Then I can know some interesting events and have wonderful experience.

Thirdly, there are lots of events in HdB. Those events are held by residents so we should cooperate each other. That would be very helpful when we will be a worker. Also we can make new friends in some events such as common meal or IFF (Intertnational Food Festival). In fact,

we did interact with a people from other dormitories. Moreover, we can have a special experience for free in Seminar. I tried Double Dutch and made pottery this year. If I were not living in HdB, I might never experience those. I am very happy compared to other university



students, as I am going through with more various experiences.

What I have got in this dormitory is the happiest experience and memory in my university life. I have a lots of awesome fiends now. I want to stay here like this with my friends from now on. I hope to enjoy HdB life next year as well!

HdB での一年

遠藤 聡志 (日本) 京都産業大学

私にとって HdB での生活はただ単に様々な国の人と共同生活するということだけにとどまらず、ともに協力して一つのものを作り上げることの楽しさや、ほかの寮生と意見を交わしてより良い寮を作り上げることの達成感などとても内容の濃いものであり、私の学生生活においても、とても大きな思い出の一つとなっている。

この一年間、HdB の様々な活動やイベントなどに参加してきて、寮生同士だけでなく地域の方々とも親交を深めることができたのではないかと実感している。そんな多くのことを学ぶことができた HdB において、私が一番思い出に残っているイベントがダンスパーティーである。

私はダンスパーティーの当番として会計に携わった。会計とは主にダンスパーティーに必要な物品や飲食物などを購入するための予算を見積もったり、収支を計算したりとダンスパーティーの会計面におけるすべての業務を行う。学生時代に会計のような仕事はなかなかできるようなことではないと思うので、このような経験は HdB に入っていなかったらできていなかったのではないかと思っている。ダンスパーティーにおける会計の仕事は決して楽な仕事であったとはいえないが、困ったときは同じダンスパーティー当番と協力し、ほかの寮生の力も借りながらダンスパーティーを無事終えたときにはかなりの達成感があり、改めて HdB に入寮してよかったと感じることができた。国籍を超えて共に一つのものを作り上げるという経験は HdB だからこそできることだと思うので、ダンスパーティーは自分なりにかなり成長を実感することができたイベントである

また、HdBでの日々の生活において、地域の方々とのかかわりというものはとても大切なものであると感じている。HdBがうまく機能するためには地域の方々とのかかわりは必要不可欠である。私自身、HdBに入った当初は地域の方々とはすれ違うときに軽く挨拶する程度であったが、一年このHdBに住んで、さまざまなイベントを通じて地域の方々とかかわっていく中でとても興味深いお話を聞くことができたり、自分にとって地域の方々との交流はとても大事なことであると実感できた。一年たった時には近所にたくさん顔見知りができ、毎日の生活がとても充実した。

以上のことから言えるように私の HdB での生活は決して楽なことばかりではなく、時に学業との両立で面倒に感じることもあったが、普通に生活していたら決して体験することができなかったような経験をたくさんでき、本当に充実した一年間であったと感じている。

HdB での生活

重入 義和(日本) 立命館大学

入寮した日は鮮明に覚えている。なぜなら、引越しを手伝ってもらった友達に、「お前こんな汚いとこ住むのか、俺は絶対住めんわ」と暴言を吐かれたからである。寮が古いということは重々理解していたが、そのときは友達の言葉で動揺し、入寮を取りやめよめようか、本気で迷った。だが、これまでの生活を振り返ると、HdBに入寮して本当に良かったと思う。

楽しい寮生活や多くのイベントのおかげで、充実した時間を過ごせているが、何よりここに住んでいる意義は、異文化に触れ、多くのことを学べるという点だ。

例えば、宗教面、イスラムやヒンドゥー教を信仰している人たちが間近にいることで、その宗教が、どんな宗教なのか、またどんな慣習があるかなど、異文化を理解する機会がたくさんある。特に CM などの食事イベントで、異文化に触れる機会が多く、この宗教の人は、何が食べれて何が食べれないのか、また食べれても特殊な処理をされているものでなければならないなど、日本では感じることが難しい、宗教という問題について学ぶチャンスがたくさんある。日本人の当たり前が、外国人にとっては当たり前じゃない、このような問題を、大学生という若い段階で、知ることができるのは本当に貴重な体験だ。

また日々の生活で私はあることに気づくことができた。それは言語の上手さは国際 交流する上では重要じゃないということだ。ここに住んでいる人たちは、それぞれで 日本語や英語のレベルが違う。それらの人たちが楽しくコミュニケーションを取る姿 を見て、言語はただのコミュニケーションをとるための手段にすぎず、そこに伝えよ うという気持ちがあれば何も問題はないのだ。実際問題、私はここに英語力を上げた いという理由で入寮したのだが、今となってはどうでもよくなっている。

とにかく HdB は学びを与えてくれる最高の環境だと感じる。

Reflection on living at HdB

Li Xinxian (Chinese) Kyoto University

Time passes by very quickly, and it is the second semester when I live in HdB. It is just like yesterday when recalling the first day when I came here last semester. I still remembered the first day was the welcome party. When I first came, I felt a little overwhelmed and a little timid. But I found that everyone is very friendly, I felt very comfortable, and I thought this is an ideal living environment. In the next semester of life, I did feel the friendship of everyone. When I encountered some problems, everyone was very helpful to me, guiding me through the HdB, helping me translate Japanese and treating me special coffee. In addition, Common Meal also allowed me to maintain a state of connection with the other residents. It is very important for me to maintain a familiar state between everyone. Although I am not able to participate in activities often because of my heavy and difficult schoolwork, I also feel that HdB is a very friendly place through Common Meals. Besides, HdB also enables me to get engaged in the near-by affairs. The elimination of near-bys due to the atomization of people (maybe due to the easy access to grande issues via media) makes people lose the feeling where they are standing at. The house meeting can enable us to refocus on the fundamentals where those huge issues are rooted, and make them not floating in the air. My current problem is that my language ability is not very good, neither Japanese nor English is ideal. I hope that I can improve my language skills and have further communication with everyone who lives in HdB. Finally, I would like to thank everyone living in HdB for co-creating such friendly environment to harbor the outlander.

【活動報告】

ハウスペアレントの1年を振り返って

崔 英樹(ハウスファーザー)

ふと気づくと、あっという間に 2019 年が終わり 2020 年を迎えた。和暦の大きな節目の一年だった。平成 31 年が令和元年となり、日本中がラグビーワールドカップ日本代表の活躍に熱狂した。令和元年から令和 2 年になり、間もなく世間は東京オリンピックムード一色になることだろう。

2018年の10月末に、前任の飯田悠哉・Rianne Hidding 夫妻が退任されること、2020年の4月より本館を閉鎖し、約半年間の耐震・改修工事が控えているので、ハウスの事情を知っている人、1年だけ住める人が良いということで打診を受けました。今までお世話になったので、お返しをしたいという気持ちで単身のハウスペアレントになることを引き受けました。HdBにシングル・ハウスファーザーで住むのは内海先生に次ぐ、2人目ということでした。

しかし、意気揚々と3階に移り住む予定でしたが、引っ越しを週末に控えたその週の初めに交通事故で肋骨を8箇所骨折する大怪我を負いました。激痛の中、なんとか最低限の引っ越しを自分で済ませ、その後、検査通院で気胸が発覚し、即1週間入院するという壮絶なスタートから私のハウスペアレント生活は始まりました。

本当に忙しかった。毎週のように行事があり、チームと打ち合わせを行い、その準備と手伝い(たまに指導)に追われていました。時には仕事も犠牲にして(同僚の皆さんごめんなさい)、レジデント達にできるだけたくさんの笑顔と思い出を作って欲しいと思い、あと、たくさん食べさせる・飲ませたいという一心で、ただひたすらに突っ走ってきました。そして、歴代のハウスペアレントの方々は本当に苦労されたことを痛感し、レジデント時代の自分をいろいろ反省した。

「いるポジションが違うと、こうも見える世界が変わってしまうのか」これも正直な感想である。

ハウスペアレントの主な仕事は、安心・安全な生活空間を提供し、ハウスイベントを当番と共に運営することだ。時には、レジデントに対して指導する立場に回らなければいけない。「請け負う責任」がレジデントと大きく違う。そして、注意することは、注意されることよりも頭も体力も使う。

以下、ハウスペアレントになって、自分なりに学寮運営で(イベント準備など)やってきたことや、工夫してきたことなど引継ぎを込めて雑感を書いていこうと思う。

前期イベント

4月13日(土) welcome party

・とりあえずいっぱい作った(6品) 焼きプリンを初めて作り、焼きプリンが定番 デザートに加えられた。最初は、分量や焼き時間や温度設定が決まらず失敗などもあったが、何度も作っているうちに自分なりのレシピが完成した。

前期 Common Meal (4/19(金) CM1 、5/10(金) CM2 、5/24(金) CM3 、6/7(金) CM4 、6/21(金) CM5 、 7/19(金) CM6 and Vote に実施):

- ・買い物が上手になった。最初は、要領が悪かったが、回数をこなすうちに買い物の要領がわかってきた。買う場所によっては、同じ価格でも質が悪い野菜などがあった。週初めに、電子チラシとショッピングリストを見比べ、何をどこで買えば安く良いものが手に入るかがその週の楽しみになった。ペアレントも料理をしないといけない。レジデントのメニューが出てから献立構成を見て、買い物の日に特売品で作るメニューを決めたので『ペアレントは料理を何作るかわからない』と当番の人には迷惑をかけたと思う。
- ・CM後のハウスミーティング中も、横の部屋でレジデントが呼んできたゲストがうるさく騒ぐようになり、レジデントたちがミーティングに集中できないのが気になり始めた。

4月20日(土) Sports day:

・今期より、予算配分が変わり、Sports day の予算が大きく削減された。Sports day の後には、皆でピザを食べるのが恒例だが、ピザを十分に買うだけの予算がなかった。割当ての予算だと数枚のピザしか注文することができないが、レジデントたちは「ピザを食べたい」というので一計を案じた。パン屋でサンドイッチ用の食パンを2斤買ってきて、ソースから手作りして「ピザトースト」を作ること。そして、野菜やハムなど食材をカットしたものや、卵を茹でて卵サンドの素を準備して、各自でサンドイッチを作らせ食べさせた。作る手間を省いて、レジデントの空腹を少しでも満たすためだ。「もっとピザを食べたかった」と不満もあったが、「サンドイッチは実は美味しかった、良かった」「ピザトーストも美味しかった」と言ってもらって嬉しかった。

5月11日 (十) Seminar:

・Seminar 当日の朝、集合前に食べる朝ごはんを準備してみた。コモンミールであまった食材などで、味噌汁とおにぎりを作って出して、参加を増やすようにサポートしてみた。そして、昼食には日本のカレーも作ってみた。「(カレーを)作りすぎたから、ピザやごはんが余った」とダメ出しを受けたが、嬉しいクレームが来たと肯定的に受け止めようと思う。

6月8日 (土) OM meeting

- ・HdBに住むレジデント、OM、OMスカラー、スカラーの定義や位置づけが問題になり明確になった。このあたりから、OMスカラーの生活問題を注視しはじめた。
- ・1 部と 2 部に分かれて行い、2 部は HdB での夕食会。前飯田ペアレントのご紹介いただいた、知り合いの方に素晴らしい料理を仕出してもらいました。飯田 HF の申し出で、カレーなど様々な料理を作っていただきました。次年度からは、誰が担当するのだろう。
- 6月12日(水):このあたりで、ハウスで取れた梅と使って梅酒を漬けた。
- → Thanks giving と Chrismas Party で皆に振る舞った。

6月16日 (日) Emergency training:

- ・ハウスに来ての初めての避難訓練だった。以前もやっていたらしい。避難訓練は、 有事の際に避難時間に差が出るのでやって良かった。講習終了後に、実際に火事が起 こり消防士さんたちはサイレンを鳴らして現場へ向かったのが印象的だった。
- ・終了後は特に前例がないので、終わってからの昼食は、HALALのチキンを使った チキンカレーと、プリンを作って皆で食べた。ペアレントになってから、肉料理の際 は、HALALかどうかなど宗教上の食生活を配慮するようになった。焼きプリンを作 り始めたのも、ゼリーだとゼラチン(豚のコラーゲン)を使うので、プリンなら問題 がないからだ。幸いにも、焼きプリンは好評だし、ハウスに丁度いいガスオーブンが キッチンにあるので助かっている。

6月29日(土) Dance party:

- ・Dance party 前日に、張り切り過ぎたレジデントが夜中まで騒いていて、また、連日 余興の練習を夜遅くまでしていたので、ご近所さんがクレームに来たことを翌日の朝 に連絡を受ける。最悪のタイミング。また、前日の28日は誕生日で、チームミーティングするので時間を確保していたらドタキャンされたので今もよく覚えている。当日 に、ご近所さんにお詫びに回った。
- ・Dance party イベント自体はとても盛り上がった。ただ、私の目が行き届かず、泥酔者を出してしまったのが反省点である。まあ、これも数年後に振り返ったときは、レジデントたちにとって良い思い出になっていることだろう。

7月13日(土) IFF (国際食べ物祭り):

- ・近年、7月になると大型台風が日本に上陸し、各地に大きな被害を出している。昨年度は、台風で中止になってしまったが、今年度は無事に開催することができた。
- ・料理をすることはなかったが、買い物する食材の種類が豊富で量が多いので大変だった。レシピは早めに出してもらった方がいい。この頃には、買い出しに慣れたので、 無事に済ませることができた。大きな問題もなく、当番およびレジデントたちはよく

やってくれました。

・唯一、書き残しておくならば、この時期は食中毒に注意しないといけない。

7月14日(日) Big Cleaning up:

・前日のIFFで残った食材を利用して、朝食(ごはんと味噌汁)を準備した。Big Cleaning up の後にも、Sports day 同様に皆でピザを食べるのが恒例だが、ピザを十分に買うだけの予算がなかった。Sports day に作って食べたサンドイッチにすることにした。これだと半分から 1/3 程度の出費で済んだ。

8月31日(土) 吉田東通り夜市へ出店:地域行事への参加

- ・夏休みの第四土曜日、HdBの前の吉田東通りは、子連れの家族や地域住民でにぎやかになる。年に一度の夜の夏祭りだ。近くの「タコケン」さんが主催している。そして、食事に行ったときに話が盛り上がり、出店することになった。
- ・インドの留学生の Ashif 君が作るチキンカレーはコモンミールでも大人気である。 これを出すことにした。Ashif 君にお願いし、岡田さん、柊木さんにヘルパーとしてお 手伝いしもらい大鍋でカレーを作って「インド人留学生の作った絶品チキンカレー」 として販売することにした。これに「左京区ふれあい祭」で作って出した「ラッシー」 のレシピを教えてもらいと一緒に販売した。
- ・当日は天候が悪くて、中止になるかもしれないとドキドキしていたが、なんとか決 行することとなった。前半は全然売れなくて、『売れ残ったらどうしよう』と心配をし

ていたが、中盤からサーカス軍団のパフォーマンス、盆踊りで来場者の目に留まりカレーは飛ぶように売れた。一人では対応しきれなくなってしまった中、Wuさん(台湾)がお手伝いをに来てくれて本当に助かりました。最後は、ハウスのガス炊飯器で5キロのお米を炊いたが足りず、「ごはんなしのカレーでも欲しい」ということで、最後はカレーだけを販売し共に完売した。



後期イベント

10月12日(土) Welcome party:

- ・たくさんのレジデントたちが自主的に料理を作ってくれたので助かりました。感謝です。季節の材料を利用して作ることを意識して3品作りました。
- ・2020年4月からの改修工事は、工事費用の高騰で全てを行えなくなったと知る。
- ・新しく一眼レフカメラを購入し、写真や動画撮影で多くの記録を残せるように頑張った。(これ当番の仕事だと思うけど)

後期 Common Meal (10/18(金) CM1、11/8(金) CM 2、12/6(金) CM 3、12/20(金) CM4、1/10(金) CM5、2/21(金) CM6 に実施):

- ・本来は、CMの買い物は、レジデントにもお手伝いしてもらいペアレントと一緒に行くことが慣習とされていたが、自分ですることにした。職場の近くにあるスーパーですべての買い物が済むので、趣味となった電子チラシチェックを入念に行い、数日かけて仕事終わりに食材を買い集めることにした。そうした理由は2つある。一つは仕事が忙しくなりレジデントと時間を合わせて買い物へ行くとどうしても遅くなる。そうなると、買いたい特売品の食材などはほぼ完売してしまっているからだ。2つ目は、コモンミール当番は、手を抜くことができない大変な仕事だ。レシピ集め、当日の準備など仕事量も多い。だから、買い物の手伝いなど仕事を減らし、当日の準備に専念してもらうためだ。余力があれば、買い物も行けば数時間かかるので、その時間が捻出できるのであれば、その時間でもう一品くらい当番に CM での食事を作って、皆に喜んでほしかったからだ。
- ・買い物で浮いたお金で、CM後の皆が喜ぶドリンクを買うことよりもデザートになる果物を買った方が良いと、吉川先生より指摘を受けた。
- ・初回の CM の後のハウスミーティングは、レジデントにミーティングに集中してもらうためにゲストに帰ってもらうことを断行した。大不評だったが、ミーティングには集中できたのではないかと思う。以後、ハウスミーティングは話し合う場になった気がする。
- ・近隣の大学寮とも交流を深めるために、京都大学吉田寮、同志社大学松陰寮、海の 星学寮の寮生さんたちを招待して、交流する機会を作った。

10月20日(日) Sports day:

・後期のハウスイベントは、京都市の助成金を受けて執り行うこととなった。2019年 秋学期より初めてのことです。予算の使い方が今までと大きく変わってしまった。そ のことをうまく当番に伝えることができずに行事を進めてしまった。結果、後々まで 条件をクリアするまですべてのハウスイベントの運営で苦労することになる。レジデ ントたちには今まで通り自由なイベント運営ができなくなってしまったことを申し訳 なく思う。

10月30日(水) Halloween Party: 非公式イベント

・レジデントに話を持ちかけて、Halloween Party を開催した。前期の Dance Party の後期版。皆、仮装しながらハウスへ集合。取りまとめてくれたレジデントたちが一生懸命頑張って、イベントを盛り上げてくれました。感謝です。頑張ってフランケンシュタインもどきに仮装をして参加した。あまり、こういう一面を見せていないので、レジデントたちは驚いていた。

11月16日(土) Thanks Giving:

- ・自分は、エンターテイメント性ゼロなので、余興等では活躍できないので、出し物 で一生懸命準備してくれているレジデント達には感謝の言葉しかありません。
- ・フルーツ盛り合わせに挑戦するが、惨敗。
- ・イベント終了後は、カウンターやロビーでみんなが集まって談笑したり飲んだり、 ゲームして盛り上がったりして歓談していた。それを見ながら、お酒を飲んでいるの が心地良かった。

11月30日(土) Seminar:

・出前陶芸教室を行った。事前に打ち合わせが十分に行えず、当番にせっかく作ってもらった計画を変更してもらうことになってしまった。非常に申し訳ないし、当番とペアレントの打ち合わせがとても大切であるということを実感した。陶芸教室は、小さな子供たちも参加し、一生懸命自分の作品を作っていました。作品には個性が出ます。

12月7日(土) Cooking event 1: (2月1日に Cooking event 2を予定)

・2018年度より始まったイベントで、初めての経験でした。本年度は、1回目はインド料理の紹介で Ashif 君が担当、2回目はドイツ料理の紹介で Onno 君が担当となります。レジデント主導で準備から運営まで無事に終わることができました。友人の家族を招待して参加してもらいました。大満足で「次のイベントもぜひ参加したい」と嬉しい感想を頂いた。

12月14日(土) Christmas party:

・前年度より予算配分が変わったが、昨年と同じような料理構成で企画したので、大幅に予算オーバーしてしまった。また、ソフトドリンクを買うのを忘れてしまったので、お酒を飲まないゲスト達に申し訳なく思う。当番が迅速に対応してくれたので感謝です。買い忘れの無いように、たくさんの買い物するイベントの際は相互チェクが必要だ。念のために「報告・連絡・相談」は重要だと感じました。当日は、料理を作り終えてから具合が悪くなり、倒れて寝込む。最後までイベントに参加できなかったのが残念。

12月15日(日) Big Cleaning Up:

- ・一年の汚れを落とす、大掃除的ハウスの一大イベント。Big Cleaning up の後は恒例のピザ。後期は予算があったのと、前日の Christmas party の余った食べ物などをうまくランチに回せた。クラムチャウダーを作って食べてもらった。
- ・個人的にハウスで大掃除したのは、レジデントが「捨てていいかわからないもの」 をたくさん整理と処分をした。ビリヤード室などにある古本、過去のイベントで買っ て使えなくなったもの、コード類、大型ゴミなどを処分しかなりスッキリしたのでは

ないかと思う。

1月11日 (十) SDGs event:

・新規に2019年度秋学期から、新規に立ち上げたイベントおよび当番。

SDG s とは、 \underline{S} ustainable \underline{D} evelopment \underline{G} oals \underline{O} m略で、「持続可能な開発目標」と日本語では訳される。SDGs は 2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193か国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標である。Seminar の失敗も踏まえ、当番・レジデント・ペアレント(ハウス)の「報告・連絡・相談」で連携し、イベントを運営・企画する大切さを諭し続けたが、そのハウスの要請に応じない当番の理解に苦しんだ。それだけに、予算の組み方やその使い方など反省点が多く残った。

・当日に参加したレジデントたちの反応は好評で、「このようなイベントは毎年あってもいいのではないか」「Seminar とコラボしても良いかもしれない」といった意見があった。ゲストスピーカーの方々には、無償でお手伝いを頂けたことに感謝申し上げたい。

ここ京都国際学生の家には、思い切って祖国を飛び立ち、希望と夢を持って、時には国の代表として日本にやってきた留学生と、国際感覚を磨き国際的に活躍したいと希望に燃えている日本人学生とが、行事を通じて交流を深めながら、共存している。私は、ペアレントとしてもレジデントと同じように楽しい HdB 生活を満喫したかったが、なかなかそうも甘くはなかった。それは2020年4月の改修工事を迎えるにあたり、半年間、レジデントはハウスを出なければいけない。空白の半年間が生まれることになる。半年後に、ハウスが再開したときに、ハウスイベントを伝承できるレジデントを育てる、引継ぎを残しておくことが責務と考えた。ただ、これは改修工事の不能により、ペアレントとしての舵取りは大きく狂い、迷走することになってしまった。

また、2人のペアレンツであれば、「お父さん」と「お母さん」がレジデントに存在することになるが、私は不器用なので、一人二役は無理であった。だから、すぐに感謝される短絡的なことはご飯を作ることくらいにして、将来レジデントたちがどこかの瞬間に「あのとき、ペアレントに言われて良かった。」ということを、一生懸命仕込むことにした。ただそれは、大学を卒業して社会に出た後、それが数年後、もしくは数十年後になるかもしれないし、そう感じない人もいるかもしれない。「あの時、京都国際学生の家での生活が今の自分を作っている。ハウスで生活してよかった。」と、レジデントが社会に出てからそう感じてもらえれば幸いである。

ハウスペアレントになり、HdB は多くの人に支えられて運営していることを改めて知りました。ハウス存続のために精力的に募金活動を行ってくれている募金委員や同窓会委員の方々、ハウスのために尽力くださっている学寮運営委員の方々、現場を支えている Office の方々、支援を頂いている学寮外の組織・企業の方々と書き出すとき

りがありません(書ききれてない方は申し訳ありません)。また、ハウスペアレントという役職を通じて、ペアレントにならなければ出会えない人たちともたくさん出会いました。まさしく、Haus der Begegnungでした。

ハウスペアレントとして推薦していただいた学寮運営委員長の山田先生、それを承認していただいてくれた内海理事長と理事会の方々、ひとり身の私に、学寮を任せることは不安が多かったと思います。そんな中、今年度は取り組む問題が山積みで、そのたびに私の判断を温かい目で見守って頂いたことに感謝申し上げます。原稿の提出が遅く、ぎりぎりまで待って頂いた Yearbook 編集委員の皆様および事務の清水さんに感謝いたします。また、原稿集めが本当に大変な中、頑張ってくれた、YearBook 当番である重入義和君と RABENARIMANITRA Lucia Ando さん本当にお疲れ様でした。

最後に、1年間頑固ペアレントに付き合ってくれた、チームメンバーおよびレジデントたちに感謝を述べたい。そして、ここ HdB を飛び立っていったレジデントたちが、将来、世界中で立派に活躍してくれることを願ってやまない。

2019年度 寮生活動行事表

4月13日(土)	歓迎会	Welcome Party
4月19日(金)	コモンミール①	Common Meal ①
4月20日(土)	スポーツデー	Sports Day
5月10日(金)	コモンミール②	Common Meal 2
5月11日(土)	セミナー	Seminar
5月24日(金)	コモンミール③	Common Meal®
6月 7日(金)	コモンミール④	Common Meal 4
6月16日(日)	避難訓練	Emergency training
6月21日(金)	コモンミール⑤	Common Meal 5
6月29日(土)	ダンスパーティ	Dance Party
7月13日(土)	国際食べ物祭り	International Food Festival
7月14日(日)	大掃除	Cleaning Day
7月19日(金)	コモンミール⑥と選挙	Common Meal 6 & Election
10月12日(土)	留学生歓迎交流会	Welcome Party
10月18日(金)	コモンミール①	Common Meal ①
10月20日(日)	スポーツデー①	Sports Day ①
11月 8日(金)	コモンミール②	Common Meal 2
11月16日(土)	謝恩会	Thanks Giving Day
11月30日(土)	セミナー①	Seminar ①
12月 6日(金)	コモンミール③	Common Meal®
12月 7日(土)	親子料理教室①	Cooking Event①
12月14日(土)	クリスマス会	Christmas Party
12月14日(土)	大掃除	Cleaning Day
	コモンミール④	
12月20日(金)		Common Meal 4
1月10日(金)	コモンミール⑤	Common Meal (5)
1月11日(土)	SDGsイベント	SDGs Event
2月 8日(土)	クッキング・イベント②	Cooking Event2
2月21日(金)	コモンミール⑥と選挙	Common Meal 6 & Election
3月予定	スポーツデー②	Sports Day 2

2019 年度 寮生行事活動の報告

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM)

外国人留学生地域国際交流等促進事業について

日本人学生と各国からの留学生が「民族、国家を越えた出会い」を通じて共生し、国際平和に貢献することを目標とした本学寮は、「食」を通じて相互理解を深めることを大きな柱としてきた。例えば、金曜日に寮生全員で各国自慢の料理を作り、一緒に食べるコモンミール(食事会)や学寮を支えて下さる人達をご招待して感謝の気持ちを表す謝恩会、新しい人達を招く歓迎交流会などが行われている。特に本学寮は、日本人が約10人(全体の約1/3)、留学生は1国から3人までの制限を設けていることから、常に13ヶ国以上の留学生が一緒に生活しているユニークな留学生寮である。更に学生の半数は女性となっている。

本年は「京都市外国人留学生交流等促進事業の補助金」を受けて、これまでの日本 人学生と留学生同士の交流を越えて、地域住民との対話・交流を図る活動を取り入れ ることにした事業活動について報告をする。

まず、「食文化を中心に据えた交流事業」は、留学生歓迎交流会やコモンミールに地域住民を招待して、会食を楽しむととともに、会食後におこなうミーティングに参加していただき、留学生と地域住民との国際交流活動を行うことにした。また、親子で楽しめる外国語の歌を一緒に歌ったり、世界各国の伝統料理・家庭料理の調理やお菓子作りなど親子料理教室などの活動を通じて、地域住民が異国の文化を吸収する機の提供を考えた。また、従来から行われていた、謝恩会、クリスマス・ディもこの交流事業である。

さらに、これまで自分達だけで行っていたセミナーやスポーツ・ディについて、地域住民を招待し、交流活動を行うことにした。

国連によって採択された SDG's (Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標) は持続可能な社会を目指して、環境問題や紛争などの課題に多様な角度からのアプローチを呼びかけている。京都は、SDG's 先進都市に選ばれるなど、SDG's の関心は高い。当学寮は平和の精神を掲げ、バックグラウンド(国籍、年齢、性別、学問分野)の異なる学生達が共に協力し合い寝食を共にしながら、国際異文化共生を体現している。そこで SDG's の中の「16:平和と公正をすべての人に」というメッセージを発信していくとして応募した。そのタイトルは「SDG's の促進に向けた国際学生の家による映像制作と実践型のイベントを開催する」という企画である。この事業によって HdB の存在意義をより多くの人に知ってもらう機会になると考えた。また、HdB に住む多種

多様なバックグラウンドを持つ寮生が HdB の理念と共鳴する SDG's を一つ一つの動画で発信することで、HdB が体現する living together (共生) とはどういうことかをわかりやすく知ってもらうこともできると考えた。この活動を通して寮生自身が、自分の学ぶ学問がより広い視点で見た時にどのような位置付けにあるのか、また他の学問領域とどのように結びつけられるのかを考察できる機会と考えた。

1. 食文化を中心に据えた交流事業:食事会(コモンミール)

コモンミールは、当学寮が設立された1965年以来続けられている伝統行事である。 半年間(1セメスター)で6回行われることになっている。コモンミールでは、 ハウスペアレントやレジデントやスカラー、事務員などが料理人になり、メイン 料理、サイド料理、ベジタリアン料理、ハラール料理などを作っている。レジデントは1セメスターで1度は主料理人として1度はヘルパー料理人となることになっている。これによって各レジデントは他国の料理を習う機会を得て、よりお互いを理解する機会となっている。地域住民も参加し、既実施の5回で、地域住民が延べ62人参加する学寮の主たる交流活動となった。この活動を通じて、今後も地域住民との国際交流が広がっていくと期待している。

① 第1回は2019年10月18日(金)18:30より

参加者:41名(内訳:レジデント25名、元ハウスファーザー1名、スカラー2名、同志社寮生を含む地域住民10名)

献立:卵と豚肉のベトナム風の煮込み、チキンカレー、ミネストローネ、フライドグリーンピース、鶏のさっぱり煮、小松菜とエリンギのオイスターソテー、ココナッツスノーケーキ、ご飯など

② 第2回は2019年11月8日(金)18:30より

参加者: 44 名(内訳: レジデント 27 名、ハウスファーザー1 名、スカラー2 名、 同志社寮生を含む地域住民 14 名)

献立: ナスと豚肉の生姜焼き、中国風鶏肉炒め、ナスとシメジのバジル風炒め、 野菜スープ、クリームプリュレ、ツナと小松菜のチジミ、肉じゃが、おでん、 野菜料理、ご飯など

③第3回は2019年12月6日(金)18:30より

参加者: 39名(内訳:レジデント25名、ハウスファーザー1名、スカラー1名、 OM3名、地域住民9名)

献立: ナスと豚肉の生姜焼き、中国風鶏肉炒め、ナスとシメジのバジル風炒め、 野菜スープ、クリームプリュレ、ツナと小松菜のチジミ、肉じゃが、おでん、 野菜料理、ご飯など

③ 第4回は2019年12月20日(金)18:30より

参加者: 43 名(内訳: レジデント 19 名、ハウスファーザー1 名、スカラー2 名、 地域住民 17 名)

献立:アヒ・デ・ガジーナ、レモンチキン、鮭のキッシュ、スイートポテト、

クレープ、ニョッキもやしのナムル、ヨーグルト、果物、ご飯など

⑤第5回は2020年1月10日(金) 18:30より

参加者:31名(内訳:レジデント16名、ハウスファーザー1名、スカラー1名、OM1名、理事1名、海の星寮生を含む地域住民12名)

献立:紅焼き肉、唐揚げ、キヌアサラダ、野菜スープ、リンゴパイ、レアチーズケーキ、ミカン、ご飯など

- ⑥第6回は2020年2月21日(金)18:30より(予定)
- 2. 食文化を中心に据えた交流事業: 留学生歓迎交流会 (Welcome Party)

日時:2019年10月12日(土)18:00より:立食

参加者:37名(内訳:新人レジデント4名、レジデント24名、スカラー5名、ハウスファーザー1名、理事長1名、地域住民2名)

献立: メイン料理(ポテトサラダ、ローストチキン、茸ソテー、エビのガーリック炒め)、サイド料理(ミートボール、グラタン、カボチャスープ、アボカドとピーナツ和え)、デザート(黒砂糖ケーキ、Godrogodro、ドリームケーキ、プリン)

新寮生が寮生間の相互理解を深め円滑に当学寮に入っていけることに加え、また地域住民との交流を通じて、京都市の地域社会について理解を深める目的で、本交流会は実施された。招待状が多数送付されたにも関わらず、当日(10月12日)は、台風19号の直撃した日に重なり、予定されていた地域住民の参加は叶わなかった。しかし、既に準備された料理もあることから、理事長と地域住民2名、寮生とスカラーで新入寮学生4名の歓迎交流会を行った。新入レジデントに対するHdBの意義やHdBの生活についての動画ガイダンスののちに、地域住民の紹介、最後に新人の自己紹介などが行われた。

3. 食文化を中心に据えた交流事業:第1回こども料理教室(Cooking Event)

日時: 2019年12月10日

参加者:27名(内訳:レジデント11名、スカラー1名、地域住民6名、地域の小学生9名)

海外・異文化のバックグラウンドをもつレジデントを交えて、子ども達との外国語学習・異文化交流としての親子料理教室を開催した。親密な国際交流を通じて、異文化理解につながり、ひいては、当学寮の活動理解を深めると考えている。今回は地域の6名の家族とその子ども達が参加した。世界に多数の香料を輸出しているインドの概要とインド料理についての説明についで、親子で羊料理と小麦粉で作るチャパティなどを一緒に作り、試食会を行った。料理を作る間にインドに関するクイズが出されるなど、楽しく異文化を知る機会となった。このような試みの積み重ねにより、グローバル志向を兼ね備えた人材の育成に資するのでないだろうか。参加したレジデントも、日本の子ども達の笑顔に触れて、日本の児童と話して楽しむ

貴重な一時となった。学生の報告書 P71 にあり。第 2 回はドイツ料理で、2020 年 2 月 8 日 (土) を予定している。

4. 食文化を中心に据えた交流事業:謝恩会 (Thanks Giving)

日時:11月16日(土)18:00より 立食

参加者:63名(内訳:レジデント26名、スタッフ3名、スカラー3名、招待者19名、ハウス関係者11名、ハウスファミリー1名)

献立:メイン料理(ビリヤニ、竜田揚げ、豚の角煮、酢豚、鶏のさっぱり煮)、サイド料理(ホアチエン、ベトナム風キノコと鶏肉のビーナッツサラダ、肉じゃが)、ベジタリアン料理(インゲン豆のキャセロール、車麩のフライ、人参と茸の醤油風炒め、柿とアボガドのサラダ)、デザート(ココナッツミルクスノーケーキ、ミニパンケーキ、ガトーパンプキン、フルーツの盛り合わせ、豆乳プリン)

HdBに寄付をして下さった方々、常にサポートをして下さる京都府、京都市の関係部者の方々や諸団体や地域住民等をお招きして学寮生が感謝の気持ちを表す会である。この謝恩会では招待者との交流を計るため、学生達はフォーマルな洋服に身を包んで対応し、学生達や地域住民と一緒に作った各国料理を味わって頂き、学生達による民族ダンス、演劇、ピアノ演奏などのパフォーマンスを招待者に楽しんで頂いた。これによって参加者が相互理解を深め、より深い親密な国際交流が行われた。学生の報告書P72にあり。

5. 食文化を中心に据えた交流事業:クリスマス・ディ

日時:12月14日(土)18:00より 立食

参加者:70名(内訳:寮生:29名、ハウス関係者12名、地域住民29名)

献立:メイン料理(ラザニア、ミートローフ、ハラール・ローストチキン)、サイド料理(蛸フライ、デンマーク風魚パン、サンドイッチ、ベジタリアン・キッシュ)、デザート(ジンジャークッキー、豆腐小豆プリン、クリスマスケーキ、クリスマス・スイーツ、フルーツサラダ)、飲み物(手作りホットワイン、アルコール飲料、ソフト飲料)

HdBのクリスマスは、日本的なものであるが、HdBにはキリスト教徒である学生も居ることから、このクリスマスの機会を利用して、クリスマスの意味を伝えたり、留学生の出身国のクリスマス料理を地域住民の皆さんに振るまい、相互の交流・理解を深める目的で行われた。食後には、クリスマスにちなんだゲームを参加者全員で行ったり、ピアノや管楽器の演奏等のパフォーマンスが行なれたことで地域の方々も大変喜ばれ、日本的なクリスマスだけでなく、本来のクリスマスの意味を理解していただくことにつなげることができた。学生の報告書P73にあり。

6. 異文化学習とスポーツを通じて交流を深める事業:セミナー

日時:2019年11月30日(土)

参加者:29名(内訳:レジデント17名、スカラー1名、地域住民6名、地域の小学生5名)

HdB の寮生と地域住民や地域の小学生がともに陶芸教室を体験することによって、地域住民との国際交流を行った。今回は、森陶器館に依頼し、日本の京焼きなど陶芸の歴史やお茶などの文化についての講義を受けた後、皿や茶碗などを作った。留学生は日本についての理解を深め、また共に一つの課題に取り組むことで地域の方々とも、より親密な交流を図ることができた。

7. 異文化学習とスポーツを通じて交流を深める事業:スポーツ・ディ (Sports Day) 日時:10月20日(日)

参加者:29名(内訳:レジデント22名、スカラー2名、地域住民5名)

スポーツを通じて学寮生同士や市民との交流を図り、より体験的な国際交流を行う為のスポーツ・ディを行った。当日は、参加者29人を4組に分け、競技種目はバスケットボール、卓球、ドッチボール、タマゴ運び競争の4種目であった。

当日は、地域住民の5人の参加があった。さらに、2回目のスポーツ・ディの企画を 検討している。学生の報告書P76にあり。

8. SDG's イベント:SDG's 促進に向けた国際学生の家による映像制作と実践型イベントの開催

日時: 2019年10月から2020年1月まで

HdBに住む多種多様なバックグラウンドを持つレジデントが、HdBの理念と共鳴する SDG's を一つ一つの動画で発信することで、HdBが体現する living together とはどういうことかをわかりやすく知ってもらえるように、動画を作成した。この動画を通して、SDG's の意義とこの HdB の意義を多くの皆さんに知って貰おうと考えている。まず当番3人が下記の①、②、③の外部主催の SDG's 行事に参加して体験し、自分達が作ろうとする SDG's の動画作成に関するアイデアを集めた後、学寮のレジデント達(31人)と協力して、目的とする動画を作成した。2020年2月8日(土)に予定されている「子ども料理教室2」に参加する子ども達に見せて、その効果を確かめる予定である。学生の報告書 P77 にあり。

- ① 2019 年 10 月 27 日: SDG's イベント「カードゲームで学ぶ SDG's、2030 年への時間を体験しよう ~2030SDG's~」のイベントに参加
- ② 2019年10月31日: SDG's Design International Awards 2019 応募、不採用
- ③ 2019年12月15日「やらんとわからん SDG's」イベント参加

Report (Cooking event)

On 7th dec 2019 we held a **cooking event** at our dorm. This event was one of its kind and a very unique one in HdB. As a resident of HdB we invited Japanese families to our dorm to

participate in cooking event. This event was solely focused on promoting the idea of learning different food culture across the globe. For this particular cooking event we choosed Indian cuisine to explore. As you all know how rich India is when it comes to food culture. India has given spices to the world and in order to keep that in mind we tried to keep our menu accordingly for this event. Total of 7 families joined us along with their kids. Many residents also participated in the event. We learnt how to make mutton tikka and also learnt how to make chapati with wheat flour. It was so much fun to see small kids doing all the efforts whole heartedly. Parents were also very supportive and were helping their kids to learn new things. We also had a short presentation about India. And a small quiz about India in between. Atmosphere was very cheerful and people were very satisfied with the event. After making all the foods we sat together and had lunch in the lobby. We talked about food and other stuffs. What a lovely event it was. Here are some pics from the event you can see and imagine how awesome this event was. We were thankful to all the participants and volunteers who came forward to make this event a success.



Thanksgiving in 2019

2019 年の Thanksgiving は、11 月 16 日に開催されました。今年の Thanksgiving 当番は Rutvika、Kohei、Tomo の 3 人です。例年通り、レジデント・スカラーたちはフォーマルな洋服に身を包み、18 時までにロビーに集まりました。会場の装飾は、Rutvika をはじめとするレジデントたちにより前夜に行われ、中心の柱を木に模して、赤や黄色の秋らしい葉やライトを施しました。また、ホワイトボードに感謝の気持ちを言葉にしたメッセージを様々な言語で載せました。

パーティーは Rutvika と Tomo の司会により始まり、寮長である Mathieu のスピーチへと移ります。彼は数時間前にフランスから帰ってきたばかりで疲れているはずであるにも拘らず、感謝の気持ちを込めた心温まるスピーチをしてくれました。日本語への翻訳は、スカラーである Soraya が見事に行いました。続いて、Kohei による料理の紹介です。料理の紹介は別紙の通りです。次に、ハウスファザーからゲストの紹介をいただきました。Onno によりドリンクの準備がされ、全員にドリンクが行き渡ったところで、内海先生より乾杯のご挨拶をいただきました。

18時40分頃から、メイン料理、サイド料理、ベジタリアン料理をいただきながら、 ゲストとレジデント間での会話も弾んでいきました。HdB の新しい取り組みである SDG's イベントの話や、昔の HdB でのハプニングや思い出などたくさんの話題に花を 咲かせました。19 時 10 分頃からデザートがテーブルに並び、おなか一杯ながらも、 デザートのおいしさに皆さんつい手が伸びている様子でした。19 時 40 分頃に隣室に 移動し、ビデオの鑑賞とパフォーマンス行われました。Kohei により作成されたビデ オでは、ご支援くださっている方々、オフィスの方々、ハウスファザー等への感謝の ビデオメッセージが流されました。引き続き、例年恒例のパフォーマンスにうつりま す。計4組のパフォーマーたちが何度も練習を重ねた曲を披露してくれました。1人 目は Onno でピアノの演奏です。タキシードに蝶ネクタイというピアノマンらしい正 装で、シューマンの曲を披露してくれました。2 組目は、Onno と Soraya のピアノの連 弾です。ドヴォルザークの難易度の高い曲を見事に弾きあげ、会場は感動の空気に包 まれました。3 組目は、Chiho、Natsumi、Kanane、Serena、Kimiko で、ジャズナンバ ーの「Sing Sing Sing」です。会場の全員での手拍子に合わせ、軽快なリズムで奏でら れました。最後のパフォーマンスは、Natsumi、Serena、Marie の3人で、人気テレビ シリーズ"GLEE"より「Don't Stop Believin'」です。美しい歌声と曲に合わせた振り付 けを披露し、間奏では客席のすぐ隣を通り、会場を沸かせました。パフォーマーたち の練習の成果を存分に発揮できる舞台となりました。

20 時 30 分頃、4 つのパフォーマンスを終え、レジデントからささやかな贈り物が、ハウスファザー、清水さん、水谷内さん、吉武さんに贈られました。吉武さんからは英語でのお言葉をいただき、中には HdB で過ごすアドバイスも込められていました。その後、ハウスファザーより、ゲストの方々への感謝の言葉とともに閉会の挨拶とし、集合写真を撮って閉会としました。

このように、2019年の Thanksgiving は成功に終わりました。

Xmas' Party in HdB

Schedule

18:10-19:40: Greeting and drinking hot wine, eating dishes and talking to others

19:40-20:20: Performances

20:20-20:30: Group photo

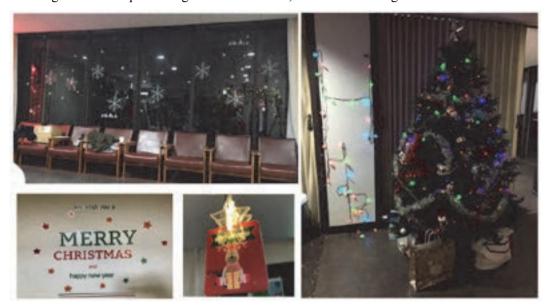
20:30-20:45 Eating fruits (optional), some guests left

20:45-21:05 Playing game

21:05-21:45: Cleaning up by residents

[Decoration]

First, we took all decorations up from the basement and separated them into different categories (lots of hard work!!!). Then we set up Xmas tree and put on decorations and ohlala...we got a gorgeous Xmas tree (Yayyyy!). We bought some new decorations and equipment such as lights, stickers and extension cords. We put a new light on the Xmas tree, a chain light with clamps holding cards on the wall, stickers on door-glass and the wall.



[Dishes]

This time, we decided to have a simple, Western-style Xmas so most of the dishes were traditional Western dishes for Xmas. Dennis kindly made hot wine, Nayoung made Ginger cookie, Natsumi made Meat loaf with minced meat and Richard made roast chicken. We also had many other delicious food made by other residents (Thank you all!!)

Main: Lasagna, Meat loaf with minced meat, Halal roast chicken, Side dish: fried Octopus, Danish

fish bread, Sandwiches

Veggie dish: Veggie Quiche,

Dessert: Ginger cookie, Tofu pudding with red beans, Xmas

cake, cutie Xmas sweet,

Fruit, Salad,



Drink: handmade Hot wine, alcoholic drinks, soft drinks.

[Performance]

We had a very fun performance by Keisuke (nininbaori (ににんばおり) "Helping Hands" comedy performance, some musical performances.



[Group photo]



[Games]

This year, we played Janken train (rock paper scissor train) after we took group photo. Music was played and when music was stopped, people made pairs first and did "rock, paper, scissors". The loser lined up behind the winner and put their hands on his or her shoulders. The music was played again and again, when it was stopped, "trains" found pair and played again. The train got longer and longer. Last, the head of last train was the winner of the game. Everyone enjoyed the game.





Sport day report

On Sunday the 20th October the spectacle of the annual HdB Fall semester sports day began. Members of the dormitory awoke bright and early for a rigorous morning of entertainment, laughter and shenanigans, followed by the promise of pizza at the end.

The event started at 9 with a stretching and warm up session lead bit he ever enthusiastic Ashif Equbal. Some of the sleepier members managed to join us at this time and eventually we had enough people to make 4whole teams. Sporting events organized for the day included basketball, table tennis, dodge ball and an egg-carry relay – all of which were chosen to challenge our participants technically, physically and mentally. The teams were tried to be chosen in a fair way und during the activities some adjustments were made due to the fairness of the team composition.

During the different games friendships flourished and understandings of each othere deepened in the environment of the HdB garden. The participants showed consideration towards each other and when someone got hurt he/she would immediately be replaced. Everyone was able to work up a sweat and the pizza and drinks were very welcome at the end.

The Sports Day Toban's would like to thank all of those who participated and make the event possible. The true spirit of HdB visible in compassion, ambition and deliberateness of the participants was evident in all of you that day.

SDG's 活動報告書

SDG's 当番: 中山 貴美子、韓 思平、岸野 圭祐

本活動は、京都市外国人留学生交流等促進事業補助金に「SDG's 促進に向けた国際学生の家による映像制作と実践型イベント開催」を目的として、応募して、交付された補助金での活動報告である。

目的:国連によって採択された SDG's (Sustainable Development Goals)は持続可能な社会を目指して環境問題や紛争などの課題に対して、多様な角度からのアプローチを呼びかけている。京都は、日本の中でも SDG's 先進都市に選ばれており、平和の精神を掲げてきた当寮らしさと、バックグラウンドの異なる学生が共に協力し合い寝食を共にする中で国際異文化共生を体現することで SDG's の中でも特に「16:平和と公正をすべての人に」に対してメッセージを発信していく。

SDG's は17の分野別の目標が掲げられており、その中でも特に当寮での活動に即したテーマを取り上げ、オンライン上で幅広い世代の人にアプローチできる「映像」をキーワードに短編映画やCMを作成する。時期に応じては学生映像祭典等に出展する。寮生を被写体に日常生活の中でも出来事をメッセージ性を込めてドラマ調に仕上げ、国内外へと発信する。また、完成した作品を持って京都市や左京区内でグローバルイベントを開催し、国際協力の在り方を伝える。実践型イベントでは、寮生と地域の方々がチームとなり、SDG'sのテーマに即したミッションに対して解決策を共に模索し、議論を重ねることで国籍と言語を超えた関わり方を体感してもらう。

京都市内の小学校や中学校での平和学習のカリキュラム内で連携することも検討中。この活動を通じて、HdB の存在意義をより多くの人に知ってもらえると考えている。HdB に住む多種多様なバックグラウンド(国籍、年齢、性別、学問分野)を持つ寮生がHdB の理念と共鳴する SDG's を一つ一つ動画で発信することで、HdB が体現する living together とはどういうことかを分かり易く知ってもらうことができると考えている。SDG's の活動を通して寮生自身が自分の学ぶ学問がより広い視点で見た時にどんな位置付けにあるのか、また他の学問領域とどんな風にコラボすることができるのかを考えることができるようになると考えている。今後 SDG's はどの国のどの地域のどの会社や団体でも避けて考えることができないものになるだろう。寮生がいつか社会に出た時にもこの活動が活きてくると考えている。

SDG's 当番の準備

まず、SDG's 当番 3 人が、下記の 3 つの他の SDG's 活動に参加して、体験し、その知識を元に当学寮独自の SDG's 活動を行うことにした。

①SDG's イベント「カードゲームで学ぶ SDG's、2030 年への時間を体験しよう ~2030SDG's~」への参加

場所: 大阪府大阪市中央区本町3丁目4丸寿ビル9階

日時: 2019年10月27日(13:30-16:00)

URL: https://imacocollabo.or.jp/event/20191214-4/

SDG's についてレクチャーを受けたあと、カードゲーム「2030 SDG's」(SDG's の 17 の目標を達成するために、現在から 2030 年までの道のりを体験するゲーム)をした。このゲームの世界では、さまざまな価値観や違う目標を持つ人が存在し、そうした人々が協力する中で SDG's の壮大なビジョンを実現することを目指していた。このゲームをする中で、なぜ SDG's が私たちの世界に必要なのか、そしてそれがあることによってどんな変化や可能性があるのかを体験的に理解することができた。

私達のイベントでも、SDG's という言葉を聞いたことがない人やあまり興味関心がない人でもゲームが持つとっつきやすさと面白さで知らず知らずのうちに熱中し、楽しみながら SDG's の本質を理解することができるような仕掛けを作りたいと思った。

②SDG's Design International Awards 2019

日時: 2019年10月31日

URL: https://compe.japandesign.ne.jp/SDG's-dia-2019/

この企画に中山が応募したが、残念ながら受賞はかなわなかった。そのアイデアの 一部を、最後に掲載しておく。

③「やらんとわからん SDG's」イベント参加

場所:立命館大学琵琶湖草津キャンパス セントラルアーク二階

日時: 2019年12月15日

このイベントでは、「SDG's 版貿易ゲーム」を体験した。「貿易」が世界の人々の暮らしにどのような影響を与えているかを、一種の疑似体験を通じて理解できるゲームなのですが、チームで協力したり、ほかのチームと交渉したり、環境のことも考えたりと頭をたくさん使う内容が盛りだくさんなゲームでした。このイベントからチームで協力する形式にすると初対面の人でも盛り上がることができるということを学んだ。

2. HdB レジデントとの活動

3 つの外部イベントに参加した知識を基に、 A.誰にでも実践できる取り組み、B. HdB で実践できる取り組み、C.京都市が実践している取り組み,の 3 つのテーマから 1 つを選び、30-90 秒ほどの動画を作ることにした。レジデントを下記の 12 のチームに編成した。

チーム名とメンバー

SDG1 貧困をなくそう

早川 成美、Ashif Equbal、Hofmann, Onno Jakob

SDG2 飢餓をゼロに

大川 夏海、Rabenarimanitra,、Lucia、Wu Chang-Yu

SDG3 すべての人に健康と福祉を

Shin Mingyeong, TANgt Mengjia, HUANG Yin-Hsuan

SDG5 ジェンダー平等を実現しよう

Kamlah, Marie、岡田 瀬礼奈、柊木 知

SDG7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

Manohar Rutvika Nandan, Randolph, Ruiz Rodriguez

SDG8 働きがいも経済成長も

赤尾 奏音、李 シンシェン

SDG9 産業と技術革新の基盤を作ろう

金 羅煐、Obster, Dennis、重入 義和

SDG11 住み続けられる街づくりを

辻川 知歩、TRINH Hai、淵之上 航平

SDG12 つくる責任つかう責任

Palungkun、Vanessa Alma、Mathieu Fevre、岸野 圭祐

SDG15 陸の豊かさも守ろう

中山 貴美子、山本 祥太、WELSH Richard Louis

この各メンバーの中で、 ①アイデア出し (11/22-12/7) ②ビデオ撮影(12/8-12/20) ③ ビデオ編集 (12/21-1/11)を行った。

結果として、アニメーションや寮生による寸劇を絡ませた映像など、個性あふれる作品が集まった。実際に動画完成までたどり着くことのできたグループはSDG3、

SDG7、SDG8、SDG11, SDG12, SDG14、SDG15 のチームだけであったが、どのチームも SDG について立ち止まって考え、自分の考えを文化の異なる寮生と話し合う良い機会になったと思われる。

参加者は5つのチームに分かれ、SDG's 神経衰弱、SDG's ジャスチャーゲーム、SDG's クイズなどのゲームに参加した。そして、SDG's の分野で活躍している玉木さんと木下さんのお話を聞いた後、自分で取り組める SDG's についてグループでディスカッションしそれぞれのチームが発表した。

ゲーム、レクチャーやアイデア発表を通して参加者は SDG's について理解するとともに、SDG's 達成のために自分たちは何ができるかを考えることができたのではないかと思う。

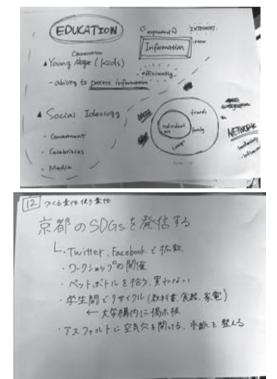
今後の活動について

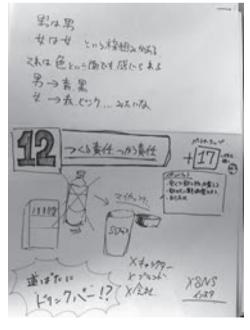
2022年2年8日に予定されているクッキングイベント2(子供料理教室2)に、我々が作った動画を放映し、SDG'sについて子供たちが楽しく学ぶことができるかどうか、実践したいと考えている。

(全体写真)



(アイデアの一例)





氏名/代表者名(団体の場合は代表者の氏名を記載) 姓名: 中山 貴美子

選択したテーマ: 民族、国籍、年齢を超えて多様な人が共生するためのデザイン

タイトル:多様性の豊かさをみんなに

目的:国籍、民族、年齢の異なる人が出会える魅力的な場を身近なところに作り、その場をその場にいる人の手によって持続可能なものにしていくこと。日常生活において多様性の豊かさを感じられるようにすること。

対象とする使用者:日本人、外国人居住者、外国人観光客

実現性(裏付けとなる根拠): すでに存在する施設や文化財、住宅、お店を利用したり、学生が運営主体となったりすることで付加コスト (場作りのための初期投資や人件費などが)なくてすむ。 それぞれのニーズをマッチングすることで、その場が持続可能なものになる。外国人(観光客、労働者、留学生)が増加しているため国際交流活動に参加する人も確保できる。大学入試が変わり、英語を書く、読むだけではなく話す、聞く能力が重要視されるようになり、企業も外国人が増加したことを受け、英語の会話力をより要求するようになったことを背景に、英語のコミュニケーションスキルを向上させたい日本人が増えている。

予想される結果(社会的インパクト): 英語を実践的に使う機会を増やすことで、生きたコミュニケーションのツールとして捉えることができるようになる。日常的生活において外国人と触れ合う機会かが増えることで、異なる価値観を持つ人の存在を認めて受け入れることができるようになる。

デザイン(あなたの提案を、テキスト、図、イラスト、画像などを自由に使って表現してください): 私たちは民族、国籍、年齢を超えて多様な人が共生するためには異文化を了解、民族や国籍が異なる人と交流するチャンスを増やすことが重要であると考えた。そこで国籍、民族、年齢の異なる人が出会える魅力的な場を身近なところに作るようなデザインを考えることにした。



2019 年度 寮生当番活動の報告

チーム:チームはハウスペアレンツとともにチームミーティングを行なった後、ハウスミーティングを開催し、寮生の話し合いを行なう。Chair Person, Vice Chair Person はハウスミーティングの議長および副議長を務めるとともに寮内各種行事全体を把握、かつ司会進行役をになう。Secretary はミーティングの書記として各ミーティングの議事録を作成する。Accountant は寮生会費の会計を管理し、予算配分を担当する。

Chair Person(前期)武田(後期)FevreVice Chair Person(前期)Manohar(後期)大川Secretary(前期)TRINH(後期)赤尾Accountant(前期)柊木(後期)Lin

主要実施:

入寮歓迎会(4月13日、10月12日)

チームミーティング

(前期) 1月26日、2月4日、2月27日、3月13日、3月26日、4月9日、4月13日、4月18日、5月5日、6月27日

(後期) 9月14日、9月19日、9月29日、10月9日、10月16日、10月22日、11月6日、11月26日、12月05日、12月19日、1月17日

ハウスミーティング

(前期) 4月13日、4月19日、5月10日、5月24日、6月7日、7月19日 寮生平均出席率 79.3%

(後期) 10月12日、10月18日、11月8日、12月6日、12月20日、1月10日、2月21日

寮生平均出席率 74.2% (1月10日現在)

チーム選挙 (7月19日、2月21日)

当番: チームメンバー以外のレジデントは全員何らかの当番について寮生活に必要な 仕事を分担する。

セミナー当番: セミナーのテーマ選定にはじまり、プランの企画、講師の選定などを 行なう。開催希望日と講師との日程調整を行い決定する。

(前期) 金(羅)、韓

(後期) 金(羅)、Wu(Q)、Shin

主要実施内容: 出張陶芸体験教室(地域の方へも公開、11月30日)

コモンミール当番:年間およそ12回程度開催する夕食会の計画を行なう。準備段階では調理担当者、ヘルパーの依頼、予算管理のもと必要食材の調査、買い物リストの

作成等を行なう。配膳、食事のホスト役も勤める。

(前期) Lin、重入、井上

(後期) Huang 、辻川、早川

主要実施内容: コモンミール (4月19日、5月10日、5月24日、6月7日、6月21日、7月19日、10月18日、11月8日、12月6日、12月20日、1月10日、2月21日(金))

ハウスキーピング当番:館内美化(1階、2階、4階のキッチン、シャワー室、地下の 洗濯室、ロビー、卓球室、ビリヤード室)、キッチン換気扇のフィルター交換、洗剤補 充)を行う。Big Cleaning up の企画・運営を担当する。

(前期) Wu(C)、湯、李

(後期) 湯、Palungkun、山本

主要実施内容: Big Cleaning up (7月14日、12月15日)

防災当番: 寮内のセキュリティ対策・非常事態対策に取り組む。寮生全体の避難訓練 の企画・運営を担当する。

(前期) 大川、辻川、淵之上

主要実施内容:避難訓練·消火訓練(6月16日)

IFF 当番:国際食事祭りの企画・運営、レシピの取りまとめや買い物の手伝い、広告作成および地域住民への告知、前日の飾り付け準備、当日の準備や後片付けを担当する。

(前期) Shin、Wu (C)、HUANG、Fevre、早川、岸野

主要実施内容: 国際食べ物祭り(7月13日)

SDGs 当番:京都国際学生の家で SDGs イベントの企画・運営を担当する。チラシの作成および地域住民への当日参加の呼びかけ、当日の準備や後片付けを担当する。

(後期) 中山、韓、岸野

主要実施内容: SDGs イベント(1月11日)

スポーツ当番:地域住民を含む寮生によるスポーツ大会 (バスケットボール・バドミントン・卓球など)を企画・実施する。

(前期) Equbal、Rabenarimanitra

(後期) Welsh、 Kamlah

主要実施内容: スポーツ・デイ(4月20日、10月20日、3月予定)

PR/High Tech 当番: 学寮の広報やホームページ管理、インターネット環境の問題に対応する。

(前期) 平井、岡田、李

(後期) Ruiz Rodriguez、李

主要実施内容:インターネット環境の問題が発生するたびに迅速に対応した。活動日を決めての活動はなし。イベント終了後など HP 更新などその都度行う。

Thanks Giving 当番:日頃のご支援に感謝するため諸団体・地域住民等をお招きしてもてなすパーティを企画・運営する。寮生の料理や出し物を企画して共に楽しんでいただく企画の取りまとめを担当する。

(後期) 柊木、Nandan、淵之上

主要実施内容:謝恩会(11月16日)

Cooking Event 当番:地域住民を招待して、留学生母国の文化と料理を紹介する「クッキングイベント」の企画と運営を担当する。本年度は、インドとドイツ料理を紹介。

(後期)岡田、Equbal、Hofman

主要実施内容:親子 Cooking Event (12月7日、2月1日)

Year Book 当番: 各当番やレジデント全員から Yearbook に掲載する活動報告や寮生の 原稿および表紙原稿を集めて編集・発行することを担当する。

(後期だけ) 重入、Rabenarimanitra

主要実施内容: 2019 年版 Yearbook for residents (2020 年 3 月発行予定)

ダンスパーティ当番: イベントの準備・企画、運営を行う。当日の騒音、飲酒トラブル等にも細心の注意を払い、近隣の方々にも楽しんでもらえるような出し物を企画する。

(前期) Welsh、Palungkun、遠藤、赤尾

主要実施内容:春期ダンスパーティ開催(6月29日)

クリスマスパーティ当番: 寮生および寮関係者、ゲストや地域住民も含めたクリスマス会の企画・運営、準備を行なう。参加者に楽しんでもらえるような出し物を企画する。

(後期) Wu (C) 、Trinh、Obster

主要実施内容:クリスマス会(12月14日)

<各種行事への自主参加>

6月8日(土) OM 会及び懇親会に参加

7月28日(日) 左京区ふれあい祭り 有志レジデントの参加

8月31日(土) 吉田東通り夜市 HP および有志レジデントの参加

10月6日(日) 聖護院学区市民運動会 有志レジデントの参加

左京区ふれあいまつり

2019年7月28日、左京区ふれあい祭りにて、京都国際学生の家よりインドのヨーグルト風ドリンクであるラッシーを販売しました。有志で集まった7人のレジデントを中心に、メニュー決めから材料の調達、当日のあれこれまですべてを行いました。コミッティーの山田先生の紹介で、地域の人たちとの交流、HdBのPR活動という二つの目的を兼ねて取り組んだイベントです。イベントの準備期間が試験期間と重なっていたこともあり、全員が集まってミーティングをすることも難しい中で、それぞれ役割を決め助け合いながら準備を進めることが出来ました。

予定通り売り上げられるかと不安を抱きながら迎えた当日、会場はみんなの予想以上に大きく、ステージでは絶えずパフォーマンスがされていました。交代で休憩時間を取り会場を回ったり、宣伝を兼ねて看板を持ったまま盆踊りに参加したりと、私たちスタッフも存分に楽しむことが出来ました。お昼過ぎからは特にラッシーの売れ行きもよく、たくさん買っていただきました。プレーン、いちご、ブルーベリー、マンゴーと色とりどりのフレーバーが並び、リピーターの方も多く、好評であることがよくわかりました。実際に私たちも購入しラッシーを飲みながら、準備や作業をしましたが自信をもって美味しいと言えるものでした。

地域の人たちとの交流という目的通りに、近くのブースや国際的なことに興味のある人やそのブースなどの人たちとお話をする貴重な経験を積むことが出来ました。またそれを通して、もう一つの目的である HdB の PR にも繋げることが出来ました。また、スタッフの総意のもと、売り上げの一部は HdB へ寄付という形でささやかながらも貢献することが出来ました。

一緒に準備から販売まで共にしたスタッフを始め、紹介してくださった山田先生、ロビーでの試飲会で意見をくれたレジデントたち、本場のラッシーについて教えてくれたインド人のレジデントたち、その他準備を手伝ってくれた人たち、みんなに感謝しています。またひとつ HdB を通して貴重な経験を積むことが出来ました。

【資料】

公益財団法人京都国際学生の家 役員等

監事(2019年度)

浅 田 拓 史 (大阪経済大学准教授、公認会計士)

折 田 泰 宏 (弁護士)

秋 津 元 輝 (京都大学教授、OM 会員)

評議員会 (2019 年度)

岩 﨑 隆 二 (和晃技研㈱代表取締役社長、OM 会員)

中 島 理一郎 (元同志社大学教授、OM 会員)

吉 田 和 男 (京都大学名誉教授、京都産業大学教授)

西 尾 英之助 (京都日独協会会長)

平 野 克 己 (日本塗装機械工業会専務理事)

蔦 田 正 人 (蔦田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)

諏 訪 共 香 (元立命館大学講師)

山 田 祐 仁 (計調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2019 年度)

理事長

内海博司 (京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)

常務理事

吉 川 晃 史 (関西学院大学准教授、公認会計士)

理 事

嘉

田良平

上 村 多恵子 (京南倉庫㈱代表取締役社長)

村 田 翼 夫 (筑波大学名誉教授、OM 会員)

吉村一良 (京都大学教授、元HF、OM 会員)

RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)

深 海 八 郎 (眺八海倶楽部総支配人)

永 井 千 秋 (公財)神戸国際医療交流財団

医工連携人材育成コーディネーター、OM 会員)

HF

:House Father

HM: House Mother
HC: House Committee

OM :Old Member

崔 英 樹 (京都市青少年科学センター職員、OM 会員、HF)

(四條畷学園大学教授、OM 会員)

顧 間(2019年度)

所 久 雄 (社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)

神 田 啓 治 (京都大学名誉教授)

平 松 幸 三 (京都大学名誉教授、OM 会員)

森 棟 公 夫 (椙山学園理事長、京都大学名誉教授)

柴 田 光 蔵 (京都大学名誉教授)

学寮運営委員会 (HC) (2019 年度)

運営委員長

山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、OM 会員)

運営委員

坂 口 貴 司 (三菱電機㈱、OM 会員)

鈴 木 あるの (京都大学講師)

TANANGONAN Jean (近畿大学講師、OM 会員)

DAVIS Peter (Telecognix Corporation CEO)

戸口田 淳 也 (京都大学教授、元 HF、OM 会員)

松 橋 眞 生 (京都大学学際融合教育研究推進センター

健康長寿の総合医療開発ユニット、元 HF)

長谷川 真 人 (京都大学教授)

北島 薫 (京都大学教授、元 HM)

崔 英樹 (京都市青少年科学センター職員、OM 会員)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

2019年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2019年3月1日~2019年12月31日受領分

敬称略

補助金・助成金

京都ライオンズクラブ 地域社会奉仕活動助成基金

財団内で学生間の交流活性化事業

96, 250

(予定)

令和元年度京都市外国人留学生交流等促進事業補助金

・「食文化を中心に据えた交流事業」

- 金額の確定は
- ・「異文化学習とスポーツを通じて交流を深める事業」

2020年6月以降となります

- ・「SDGs促進に向けた国際学生の家による映像制作と実践型イベント開催」
- 「会誌発行(イヤーブック)」

寄付金 (使途指定なし)

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
オサカ病院	株式会社イセトー	京都合同会計	京都ボーイスカウト第42団 谷口平八朗
クリニックいのうえ 井上勝六	ジーケージャパンエー ジェンシー株式会社	宗教法人日本基督教団 錦林教会	淡交社
チームラッシー	モリカワ商事	有限会社エムティーエヌ 青木みどり	有限会社ハイナン 土屋俊宏

Ashif Equbal Dr Heinrich Reinfried Nehal Hasnine				Tang Mengjia											
	Tsai Yo	u Sha	n	青	木	みと	゛り	秋	津	元	輝	井	上	勲	次
今	西	$\vec{=}$	郎	岩	田	忠	久	岩	Ī	k	勉	岩	沼	省	吾
上	Н	1	学	内	本	陽	子	鵜	ţ	冢	健	大	久	保 嘉	高
大	西	正	哉	岡	本	徳	子	荻	原	悦	子	小	野	公	=
小	野 寺	良	信	笠	原	た	か	片	Щ	重	正	嘉	田	良	平
金	澤	成	保	鎌	野	幸	子	鴨	田	昭	代	河	溂	Ą	光
Щ	野	家	稔	力	ンタ	۱ -	- レ	木	下	研	_	金	ļ	盛	彦
窪	H	1	弘	倉	田	麻	里	小	西	淳	=	小	西	喬	郎
木	葉	丈	司	崔	Ì	英	樹	坂	П	貴	司	佐	藤	利	弘
澤	田	正	樹	塩	田	浩	平	島	田	義	也	清	水	暁	子
清	水	安	代	杉	本	節	子	杉	Щ	喬	_	鈴	木	武	夫
鈴	木	松	郎	髙	井	道	夫	高	木		町	田	中	徳	壽
納	屋	嘉	人	陳	1	台	君	寺	本	美 智	子	冨	田	弘	子
富	永	芳	徳	永	井	千	秋	中	島	保	子	中	島	理 一	郎
仲	谷	正	博	成	田	康	昭	新	ļ		哲	西	尾	英 之	助
西	本	太	観	野	澤	眞	司	パ	ク :	チス	ル	ハン	スナイ	ン・ネノ	ンル

早	Ш	和	夫	坂	野	泰	治	平	松	幸	三	平	見	松	夫
深	海	八	郎	福	井	敏	明	福	井	富	美	福	本	和	久
舩	津	雅	夫	古	Ш	千	佳	細	J	[]	治	前	上	英	1.1
前	川信	圭 世	子	眞	木	恵	子	松	田	敬	_	松	7		紘
三	浦	_	郎	三	井	紀	子	美	濃	導	彦	村	上	雅	子
村	﨑	直	美	村	田	翼	夫	牟	禮	浩	子	森		洋	
柳	田	充	弘	薮	田	定	男	Щ	岸	秀	夫	Щ	П	忠	彦
山	下	進	_	楊			方	義	家	敏	正	놤	武	泰	俊
吉	村	俊	之	和	田	裕	代	匿	名	四	名				

寄付金(研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事費用に使途指定)

到11至(例为16日外初来C于周围/展制法)。 《阿里子史》和《汉史·日文》						
寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄付者			
NCC宗教研究所	株式会社島津製作所	京都仏教会	福田金属箔工業 福田健			
秋 津 元 輝	荒 木 朋 子	石 原 ゆ き 子	井 上 富 子			
岩 田 忠 久	上村多恵子	大 畑 浩 志	大宮きみ子			
香 月 桂 子	川野家稔	川 本 治	北 島 薫			
木原文太左右衞門	窪 田 弘	琴浦良彦	斉 藤 郁 子			
櫻井真理	佐 藤 定 生	四方八洲男	渋 谷 和 彦			
シビレジルモンド	外 村 中	高 崎 英 雄	竹 田 洋 子			
辻 正 樹	土 居 貞 往	十 河 智 江 子	内 藤 義 弘			
永 井 千 秋	中 條 雅 子	奈 倉 道 隆	馬場博子			
平 松 幸 三	深見祥弘	福 西 勝 利	古川彰			
美 濃 導 彦	村 﨑 直 美	森 棟 公 夫	柳田由紀子			
山 岸 秀 夫	山口忠彦	山 田 祐 仁	山 本 攻			
山 本 慶 一						

寄贈品・その他

国際ソロプチミスト京都―たちばな	文化体験(乗馬体験)、ビールなど
矢田 裕子(矢田太一商店)	食器類の寄贈

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

*2020年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

「研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援事業」 特定寄附金の募集に関わる募金目論見書

寄附金等取扱規程第 4 条に基づく特定寄附金についての目論見書内容は以下のと おりである。

> 平成 29年7月31日 公益財団法人 京都国際学生の家

1.「本館耐震補強・改修工事及び研究者棟新築支援事業」に関わる寄附金の募集

①募集総額:250,000 千円

②募集期間:2017 年 8 月 1 日~ 2019 年 6 月 30 日

③募集対象:研究者棟の新築と本館耐震補強・改修工事

1) 研究者棟新築:100,000 千円

2) 本館耐震補強·改修工事:150,000 千円

④募集理由:建築後半世紀が経ち、建物が現在の耐震基準に合わず、本館の耐震工事と改修工事、及び研究者棟の取り壊しと新研究者棟の新築工事費用にあて、50 有余年を続く個人と個人の出会いを重視した国際交流拠点としての活動を継続するため

⑤資金使途:受け入れた寄附金は 100%本事業 (事業内管理経費を含む) に充当する。

以上

(公財) 京都国際学生の家の略史

西暦	ハウスイ	ペアレンツ	事項
和暦	日本	スイス	
1961 S36			・1月21日スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ)
1962 S37			・11月19日第1回京都「国際学生の家」建設発起人会・3月24日第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会
1963 S38			 ・6月SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付 ・12月16日財団法人京都「国際学生の家」設立 ・12月16日理事長湯浅八郎博士就任 ・12月16日財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定
1964 S39			・8月10日学寮建設工事契約;㈱竹中工務店、総額約8,700万円 ・8月中旬地鎮祭 ・10月14日寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認 (4教文第388号・京都府教育委員会委員長)
1965 S40	4月: 稲垣 Inagaki	4月: ドマムート Dumermuth 9月:コーラー Kohler	 ・12月25日財団法人京都「国際学生の家」規約制定 ・3月31日竣工 ・4月1日開寮 ・4月10日献堂式 ・10月頃ハウス・チーム誕生
1966 S41			・4月10日学寮開寮一周年記念式典 ・12月20日寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認 (雑文第1の28号・文部大臣)
1967 S42	3月: 中山 Nakayama		
1968 S43			
1969 S44	4月: 内田 Uchida	5月: ペニンガー Pfenninger	•12月16日西館完成
1970 S45	7月: 不在		
1971 S46	4月: 大沢 Ohsawa	4月:ベア Bär	•2月18日年報第1号発行
1972 S47		3月:ケッター Kötter	
1973 S48	6月: 内海 Utsumi		・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事

1	Ī	I	
1974 S49	50	4月:内田 Uchida 12月:パットナム	・4月1日財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 ・5月18日十周年記念式典 ・5月1日年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行
1975 S50	7月: 山本	Putnum	3月1日 平ң 田本(3和2号:1月中間かり元日
1976 S51	M. Yamamot	to	
1977 S52			・6月24日「ライオンズ基金要綱」を制定 寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ
1978 S53			昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付
1979 S54			
1980 S55	3月: 琴浦 Kotoura		
1981 S56			•8月15日初代理事長·湯浅八郎博士逝去
1982 S57		2月: ブルコルター Burkolter	
1983 S58	9月: 古川		・1月31日第2代理事長に上野直蔵博士就任
1984 S59	Furukawa		・8月21日創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去 ・10月2日第2代理事長・上野直蔵博士逝去
1985 S60			 ・10月26日第3代理事長に遠藤彰氏就任 ・3月8日年報第8-9号「二十周年記念号」発行 ・10月1日国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞
1986 S61			•10月19日創立二十周年記念式典
1987 S62	4月: 内海 Utsumi	3月: 不在	

1988			・1月18日財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備
S63		4月:フォレンバイ Vollenweider	ダー ┃・5月28日財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成
1000		Voliciiweidei	on some many and a some many a
1989 S64			
H1			・7月2日第1回国際食べ物祭り開催
1990			・3月31日第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任)
H2	0 - 1.+	4月:オッテ	・4月1日第4代理事長に稲垣博博士就任
	8月: 山本 Yamamoto	Otte	
1991 H3			
ПЭ			
1992			
1992 H4			
1993			
H5	4月: 吉村 Yoshimura		
1994 H6		3月:ヴィダー Wider	
110		widei	
1995			
H7			
			•7月8日創立三十周年記念式典(SOAM会長他5名来日、出席)
1996			
Н8	4月: 戸口田 Toguchida		
	1 Oguernaa		
1997 H9			
110			
1998			
H10			
1999			
Hll	4月: 高橋 Takahashi		 12月31日SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止
0000		1 11 11 11 11 11 11	
2000 H12		1月: 以降、廃」	
			・9月6日財団寄付行為の改正
2001			・3月下旬全職員の退職・全寮生の退寮
H13			•4月初旬大改修工事開始
			•8月末日工事完工 •9月1日再開館、新職員採用
			•10月21日再興祝賀行事開催
1			l l

0001	1		
2001 H13			
2002			
H14	8月: 木戸		
	Kido		
2003 H15			
2004			
H16			
2005			
2005 H17			
2006		ハウスアドバイ	ザー
H18	4月: 前川 Maekawa	10月: ブアデン Buadaeng	
	Maekawa	Duadaeng	
2007 H19		3月: 帰任	・1月20日第4代理事長・稲垣博博士逝去・5月20日第5代理事長に内海博司就任
1113		0/1: ///17	
2008			・11月17日稲垣先生を偲ぶ会
H20			
			・7月10日第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 (創始者・ウェルナー・コーラー夫人)
2009 H21			
	8月: 松橋		・7月17日第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去
2010	Matsuhashi		•2月12日石井米雄理事逝去
H22			•6月30日田村武理事逝去
			•9月3日──西島安則評議員逝去•11月6日──創立四十五周年記念式典
2011			
H23			
0010			0.00.00
2012 H24	4月: 山本		•3月31日公益財団法人移行申請
	Yamamoto		
2013			
H25			•4月1日公益財団法人認可
			•10月31日第1次耐震審査実施(本館)
2014 H26	6月: 北島		
1120	Kitajima		
	Phillips		

2015 H27		•3月30日寄付金税額控除認可
2016 H28	3月: 飯田 Iida Hidding	•11月7日創立五十周年記念式典 •5月31日第2次耐震審査実施(本館)
2017 H29		・3月本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成 ・9月27日募金委員会発足 ・10月1日募金趣意書作成
2018 H30		
2019 H31 R1	3月: 崔 Choi	・2月26日第1期工事・募金趣意書作成 ・6月8日第1回同窓会(OM会)総会、公開講演会の開催

(公財) 京都「国際学生の家」利用者の集計

● 学生の部 (レジデント)

国籍別利用者実数

1965年4月から2020年3月までの合計 82ケ国 1035名

アフガニスタン	6名	コンゴ	1名
アメリカ	45 名	コートジポアール	1 名
アルゼンチン	3名	ザイール	1 名
イギリス	12名	シンガポール	18 名
イスラエル	1名	ジンバブエ	1 名
イタリア	5名	スイス	12 名
イラク	3 名	スウェーデン	3 名
イラン	13 名	スーダン	1 名
インド	20名	スペイン	1 名
インドネシア	26 名	スリランカ	11 名
ウズベキスタン	2名	セネガル	1 名
エジプト	7名	タイ	42 名
エストニア	2名	台湾	27 名
エチオピア	2名	タンザニア	4名
オーストラリア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストリア	1名	中国	60 名
オランダ	12名	朝鮮	4名
カザフスタン	1名	チリ	3 名
ガーナ	1名	ドイツ	45 名
カナダ	4名	ドミニカ	1 名
韓国	51 名	トルコ	12 名
カンボジア	13 名	ナイジェリア	3 名
キプロス	1名	日本	334名
キルギス	1名	ニュージーランド	7名
グルジア	1名	ネパール	6名
ケニア	6名	ノルウェー	4名
コロンビア	1名	パキスタン	6名

ハンガリー	6名	ホンジェラス	1名
バングラディシュ	5名	マリ	1名
フィリピン	16名	マレーシア	23 名
フィンランド	1名	マダガスカル	2名
ブラジル	9名	南アフリカ	1名
フランス	9名	ミャンマー	16名
ブータン	1名	メキシコ	2名
ベトナム	35 名	モロッコ	4名
ベネズエラ	2名	モンゴル	10名
ペルー	4名	ユーゴスラビア	4名
ポーランド	5名	ラオス	1名
ボリビア	1名	リトアニア	1名
ポルトガル	3名	ルーマニア	1名
香港	14名	レバノン	1名

● 学者・研究者の部 (スカラー)

国籍別利用者実数(同一人物の利用・同行家族を含まない)

1965年4月から2019年12月までの合計 96ケ国 3088名(内国籍記載なし17名)

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	336 名	エストニア	1名
アルジェリア	4 名	エジプト	26 名
アルゼンチン	1名	エチオピア	1名
アルメニア	1名	オーストラリア	39名
イギリス	111 名	オーストリア	19名
イスラエル	11 名	オランダ	35 名
イタリア	45 名	ガーナ	3名
イラク	3 名	カザフスタン	1名
イラン	20 名	カナダ	47 名
インド	107 名	カメルーン	1名
インドネシア	115 名	韓国	206名
ウガンダ	1名	カンボジア	4名
ウクライナ	9 名	旧ソビエト連邦	14 名

キルギス	1名	ネパール	10 名
ギリシャ	4名	ノルウェー	7名
ケニア	3名	パキスタン	14 名
コスタリカ	2名	バーレーン	1 名
コロンビア	1名	ハンガリー	10 名
コンゴ	1名	バングラディシュ	16名
ザイール	1名	フィリピン	38名
サウジアラビア	1名	フィンランド	10 名
ザンビア	1名	ブラジル	27 名
シリア	1名	フランス	110名
シンガポール	25 名	ブルガリア	4 名
スイス	186 名	ベトナム	35 名
スウェーデン	14 名	ペルー	6名
スーダン	3 名	ベルギー	7名
スペイン	11 名	ポーランド	32 名
スリランカ	11 名	ボリビア	1名
スロヴェニア	1名	ポルトガル	8名
セルビア	1名	香港	45 名
タイ	187 名	ホンジェラス	1名
台湾	95 名	マダガスカル	1名
タンザニア	8名	マレーシア	40 名
チェコスロバキア	12 名	南アフリカ	2名
中国	172 名	ミャンマー	10名
チュニジア	2名	メキシコ	7名
朝鮮 (在日)	3 名	モロッコ	6名
チリ	7名	モンゴル	1名
デンマーク	5 名	ユーゴスラビア	13 名
ドイツ	300名	ラオス	2名
ドミニカ	2 名	ラトビア	3名
トルコ	22 名	リトアニア	1名
ナイジェリア	4名	ルーマニア	3 名
日本	328 名	ルクセンブルグ	3 名
ニュージーランド	10名	ロシア	23 名

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家(以下財団という。)の後援会 員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとす る。

(会員)

- 第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となる ことができる。
 - 2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

- 第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。
 - 2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。
 - (1) 個人会員(OM 会員) 年額 一口 5,000 円
 - (2) 法人・団体会員 年額 一口 30,000円

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

- 第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。
 - 2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。
 - 3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日(平成 25 年 4 月 1 日) から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。(平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂)

公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則

(名称) 第1条 本会は京都国際学生の家同窓会(略称 OM 会:Old Member 会)と称する。

(所在地) 第2条 本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町10番地とする。

(目的)第3条 本会は、京都国際学生の家の創立趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業) 第4条 本会は、次の事業を行う。

- 1) 学寮の運営と発展とを支援する事業
- 2) その他、本会の目的に沿う事業

(会員) 第5条 本会の会員は、次の者とする。

- 1)学寮の寮生として在籍経験者、
- 2) 学寮のハウスペアレント経験者、
- 3) 学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志 を有する者、
- 4)学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 5)ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

(総会)第6条 総会は会員で構成し、開催の30日前までに通知して会長がこれを 招集する。

- 2 総会の成立は、日本国内在住構成員の20分の1の出席による。
- 3 前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 定期総会は、毎会計年度の終了後3カ月以内に開催するものとする。
- 5 臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。
- 6 総会は次の事項を審議し、議決する。
 - 1)会長、副会長、監事の選任にかかる事項。
 - 2) 会則の制定および改正にかかる事項。
 - 3) 予算および決算の承認にかかる事項。
 - 4)活動計画および活動報告にかかる事項。
 - 5) 会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。
 - 6) 本会の解散にかかる事項。
 - 7) その他、会長が必要と認めた事項。

(総会の議決) 第7条 総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

(役員)第8条 本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

- 1) 会長 1名
- 2) 副会長 3名以内
- 3) 幹事 若干名
- 4) 庶務幹事 若干名
- 5) 会計担当幹事 1名
- 6) コーディネーター 20名以内
- 7) 監事2名
 - 2 本条第1項3)ないし6)の幹事およびコーディネーターは会 長がこれを任命する。

(役員の職務) 第9条 役員の職務は以下のとおりとする。

- 1)会長は、この会を代表し会務を総理する。
- 2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。
- 3) 幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
- 4) 庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
- 5) 会計担当幹事は、会計を執行管理する。
- 6) コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
- 7) 監事は運営ならびに会計の監査を行う。

(役員会) 第10条 役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

- 2 役員会の議決は出席者の過半数の替成による。
- 3 前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えること もできる。
- 4 役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

(会費)第11条 本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

(会計年度) 第12条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日とする。

(退会・除名) 第13条 第5条に定める会員のうち3ないし5に該当する会員は、

その意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2 本会の名誉を傷つける等、本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

(解散)第14条 本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

(会則改正)第15条 本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

(細則)

第1条 本会の役員を以下に定める。

会長:村田翼夫

副会長:岩田忠久、ジーン・タナンゴナン

庶務幹事:古川千佳、木葉丈司

会計担当幹事:崔英樹

幹事:柳そらや

コーディネーター: 内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、 鵜塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴへイッシュウィリ・ルース ダン、河瀬光

監事:平松幸三、嘉田良平

第2条 会長・副会長・監事の任期は4年間を上限として定める。 幹事の任期は会長が定める。

第3条 年会費は¥0とする。

(付則)

本会則は、2019年10月18日より施行する。

施設概要

所在地 京都府京都市左京区聖護院東町 10

敷地面積1,900.28 m²建築面積531.21 m²延面積1,778.78 m²

構造 本館 鉄筋コンクリート造 地下1階 地上4階

西館 鉄筋コンクリート造 地上2階

各階用途 本館1階 事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン

本館 2・4 階 学生居室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 2 室

本館 3 階ハウスペアレンツ室、客室 7 室本館地下洗濯室、トイレ、倉庫、機械室

西館 客室5室、ボーイスカウト会議室

学生居室 面積 13 ㎡

洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン

その他設備 日本庭園、バレーボール・コート、卓球台、ビリヤード、ピアノ

【編集後記】

古川 千佳

(イヤーブック編集委員、花園大学非常勤講師、元 HM)

わたくしが House Mother としてレジデント達と徹夜の Year Book 編集作業に明け暮れていた頃の 1985 年、HdB は国際交流基金から国際交流奨励賞地域交流振興賞(現在の地球市民賞)を受けるとともに創立二十周年を迎えておりました。YB 編集作業の徹夜はいっときのことですが、当時の House Meeting(ほぼ一週おきに開催)ではレジデント同士の意見のぶつかり合いに議論沸騰、朝まで続くこともしばしばで、HdB 創設者ヴェルーナー・コーラー博士の唱えられた"Begegnung"の語源を地で行くものでした。おそらくそのときの議論・討論の時間は人間としての本当の出会いとなり、レジデント達のその後の人生をとても豊かにしてくれたものと思います。もちろん House Parents にとっても同じです。現在 2020 年、HdB 二十周年の頃から二倍半の時を重ねたことになりますが、どういうわけか今回三十数年ぶりに OM として Yearbook の編集に携わることになりました。

さて、ことしも HdB の本年度一年間を振り返り、(公財) 京都国際学生の家をご支援いただいている内外多くのみなさまにご報告する季節となりました。

今号は昨年6月に開催した第1回公開講演会を特集しています。学生時代を HdB で過ごした OM 戸口田淳也氏とジン・タナンゴナン氏の講演原稿(「HdB から iPS 細胞との出会いまで」「サンゴ礁の生物多様性と HdB のダイバーシティ」)と現役寮生のスピーチ原稿を中心に関連記事をまとめています。【OM 便り】の「モンゴル見聞録ー日本式教育モデルの導入」は本誌編集委員長から、【レジデントより】は 2019 年度の寮生からいただいた原稿です。また今期は改修工事を控えて地下倉庫整理中の理事長が発見したコーラー博士の講演原稿「共同の生について」(京都「国際学生の家」献堂式講演)を掲載しました。

卒論や修論あるいは就職活動にいくら時間があっても足りないレジデントおよび卒寮者、たくさんのお仕事を抱えておいでの OM からもお忙しい中、貴重な原稿をいただきましたことに心より御礼申し上げます。レジデントと年々増える OM の活躍を祈り、今後とも貴重なレポートが届くことを期待したいと思っております。

すでに天国から見守ってくださる OM もありますが、みなそれぞれの専門分野で、また日本を含む世界各地で活躍されているのを見たり聞いたりするととてもうれしいものです。

一方で、寮生達が地域の市民運動会へのお誘いに楽しく参加させていただいたり、HdB の行事にも多くの方々においでいただいたりする機会も多く、学生だけの狭いグループで固まってしまうことなく居住地域の方々をはじめとする多くの方々に年を重ねるほどに受け入れられていることをありがたく実感しております。

これまで重ねてきた年月は京都国際学生の家に暮らした人々の心に貴重な経験と歴史を残してくれましたが、現在ここに暮らすレジデント達が貴重な経験を育むための建物にはいますぐの大規模メンテナンスが必要です。真の"Begegnung"に意気を感じた OM をはじめとする多くの方々のご協力とご支援をお願い申し上げます。

公益財団法人 京都国際学生の家へのご寄付に対する 寄 付 金 控 除 に つ い て

当財団への寄付金に関しては、税務上の寄付金控除があります。

●個人の場合

寄付金が2千円を超える場合には、その超えた金額が当該年度の 課税所得から所得控除として控除されます。

●法人の場合

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入 限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出ください。

※本誌 P.99 に後援会会則を掲載しております。

Haus der Begegnung, Kyoto Year Book, Vol.44

イヤーブック 第 44 号 編集者 内海 博司 村田 翼夫 蔦田 正人 古川 千佳 前川 佳世子 木場 丈司 崔 英樹 重入 義和 L. Rabenarimanitra

発行日 2020 年 3 月 31 日 発行者 公益財団法人京都国際学生の家 〒606-8325 京都市左京区聖護院東町 10 TEL 075-771-3648

> Kyoto International Student House 10, Shogoin-Higashimachi, Sakyo-ku, Kyoto-city, Kyoto, 606-8325 JAPAN

印刷所 (株北斗プリント社 (075-791-6125)

本イヤーブックの印刷・製本・送料の一部は、 京都市外国人留学生交流等促進事業補助金の援助を受けた。

- 当財団への寄付金に関しては税務上の寄付金控除があります-

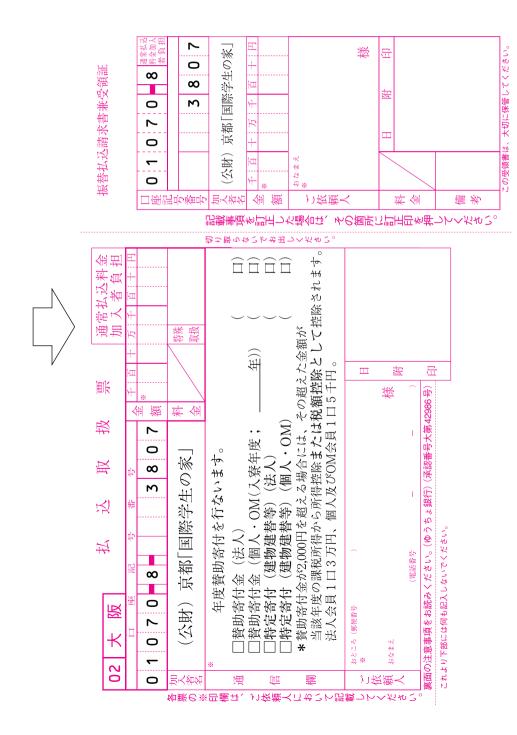
【個人の場合】

賛助寄付金が 2,000 円を超える場合には、この超えた金額が当該年度の課税所得から所得 控除または税額控除として控除されます。

【法人の場合】

点線より切り離してご使用ください

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

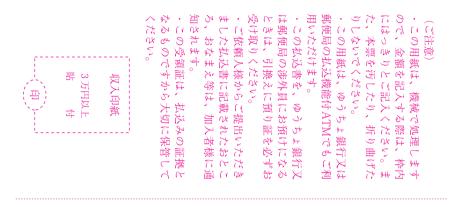


公益財団法人京都「国際学生の家」後援会会則

(会員の依託)

第1条 本会は、次のいずれかに該当する者をもって組織する。

- (1) 賛助寄付金1口以上の拠出を約諾した法人(法人会員)。1口3万円
- (2) 賛助寄付金1口以上の拠出を約諾した個人(個人会員)、そのうちで、財団で在寮生であった個人(OM会員)。1口5千円
- 2 会員が拠出すべき賛助寄付金(税務上の寄附金控除あり)の額は、付則により定める。



この場所には、何も記載しないでください。















